WEB 版

第6回信州大学大学史資料センター企画展

野尻湖発掘を支えた信州大学の人びと

「ナウマンゾウとオオツノシカの復元像」
野尻湖ナウマンゾウ博物館 提供

「第 19 次発掘のようす」 野尻湖発掘調査団 提供

展示構成

はじめに

Ⅰ　野尻湖発掘概観

Ⅰ-1 発掘前史

Ⅰ-2 発掘への準備

Ⅰ-3 発掘のはじまり

Ⅰ-4 発掘の再開

Ⅱ　野尻湖発掘と信州大学

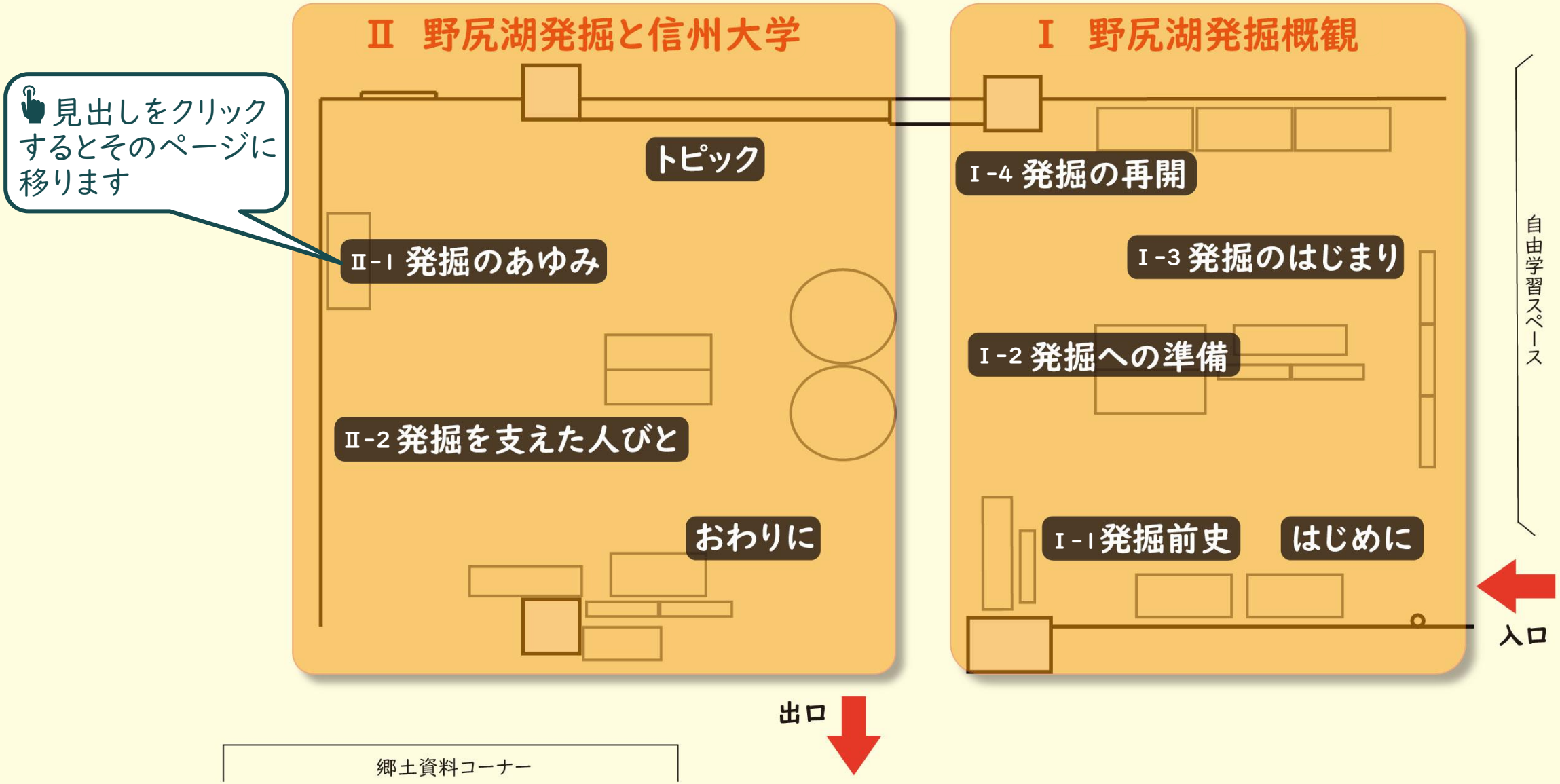
Ⅱ-1 発掘のあゆみ

Ⅱ-2 発掘を支えた人びと

トピック

おわりに

中央図書館１階　展示コーナー　案内図



はじめに

ごあいさつ

日本では第二次世界大戦後、学術研究の民主化が叫ばれ、地質学分野では、1947（昭和22）年、地学団体研究会（地団研）が結成されました。考古学、人類学等の各分野との学際的・横断的研究が、1950年代～60年代に全国のいくつかのフィールドで始まり、そうしたフィールドの一つである野尻湖発掘では、信州大学がその研究の推進に大きな役割を果たしました。

今回の企画展では、野尻湖発掘を概観するとともに、信州大学人の活動を取り上げ、学術研究にどのように貢献したのかについて展示します。

信州大学 大学史資料センター

展示案内図へ戻る

Ⅰ　野尻湖発掘概観

発掘前史

1962（昭和37）年に、現在まで続く野尻湖発掘調査が始まりました。この発掘調査が開始される前提には、戦前からの信州をフィールドとした地質学、生物学など博物学研究によって蓄積されてきた学際的研究の伝統と、それを支える教育的基盤（長野県師範学校と信濃教育会・教員の自主的研究）の伝統がありました。

展示資料 No.1　田中阿歌麿・平澤福松「野尻湖に就て（其一・其二）」

『信濃博物学雑誌』（27）（28）
信濃博物学会
1907（明治40）年、1908（明治41）年

信州大学附属図書館　蔵

野尻湖に関する最初の学術論文。田中阿歌麿（1869－1944）は、国内の主要湖沼を初めて科学的に調査し、日本の湖沼学・陸水学を開拓した。論文を掲載した『信濃博物学雑誌』は長野県の初等教育の教員を中心に組織された信濃博物学会の機関誌。地方の研究会でありながら全国レベルの研究が行われた。

展示資料 No.2　田中阿歌麿『野尻湖の研究』

信濃教育会上水内部会
1926（大正15）年

信州大学附属図書館　蔵
（旧制松本高等学校蔵書）

資料No.1の論文の成果を含む野尻湖に関する地質・生物から考古学、民俗・伝承、生活にいたるまでの学術的総合研究。発行の母体は信濃教育会上水内部会。田中を中心に長野県の教員が調査研究を支えた。

展示資料 No.3

芹沢長介・麻生優
「北信・野尻湖底発見の無土器文化（予報）」

『考古学雑誌』39巻2号　日本考古学会
1953（昭和28）年

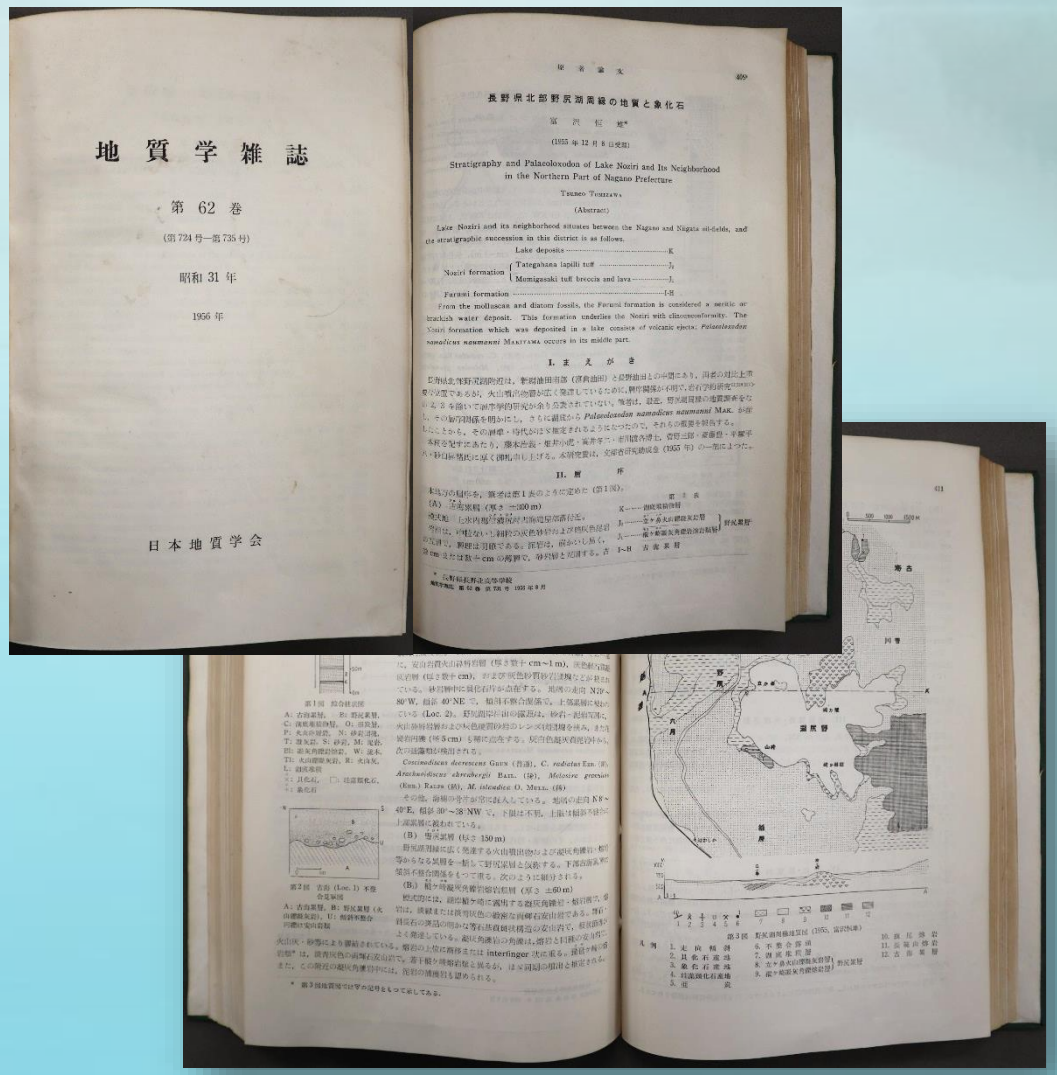
信州大学附属図書館　蔵

野尻湖の湖底に無土器文化の存在を確認した。あわせてナウマンゾウの臼歯の存在を初めて報告したもの。ナウマンゾウの出土層位と石器出土層位の関係の究明に言及するが、ただちに野尻湖発掘に結び付くことはなかった。

展示資料 No.4　富沢恒雄「長野県北部野尻湖周縁の地質と象化石」

『地質学雑誌』731号　日本地質学会
1956（昭和31）年

信州大学 農学部図書館　蔵


地 質 学 雑 誌

第 62 巻

(第 724 号—第 735 号)

昭和 31 年

1956 年

日 本 地 質 学 会

長野県北部野尻湖周縁の地質と象化石

富 沢 恒 雄*

(1955 年 12 月 8 日受理)

Stratigraphy and Palaeoloxodon of Lake Noziri and Its Neighborhood in the Northern Part of Nagano Prefecture

Tsuneo TOMIZAWA

(Abstract)

1948（昭和23）年加藤松之助がナウマンゾウ臼歯（資料５）を発見した。翌年地質学者八木貞助の「１０万年前の象の歯」とのコメントが信濃毎日新聞に掲載されたが、正式な学術報告としてはこの論文が最初であった。富沢は長野県の高等学校の理科教員。

参考：https://doi.org/10.5575/geosoc.62.409 (J-Stage)

展示案内図へ戻る

発掘への準備

1961（昭和36）年夏、ナウマンゾウの臼歯の化石が見つかった地層を検討していた豊野層団体研究グループ、信州ローム研究会の研究者は、確かめるためには「まず掘ってみよう」という井尻正二の提言をきっかけにして野尻湖底を発掘することにしました。同年12月、「野尻湖発掘実行準備委員会」が結成され、信州大学教育学部の斉藤豊を総責任者とし、合計8名によって準備が進められました。第一次調査は、信州大学医学部鈴木誠を団長に1962（昭和37）年3月26日から28日までの3日間行われ、それ以後1965（昭和40）年の第4次発掘調査まで毎年行われました。

展示資料 No.５　ナウマンゾウの臼歯（レプリカ）

1948（昭和23）年10月採集

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

1948（昭和23）年、野尻湖畔の旅館の主人加藤松之助が発見したナウマンゾウの臼歯。資料４の富沢論文により学術報告がされ、野尻湖発掘への手掛かりとなった。

3D画像：http://nojiriko-museum.com/?page_id=2623
（野尻湖ナウマンゾウ博物館Webサイト）

加藤松之助発見の化石についての新聞記事

6 厘 信濃毎日新聞

十萬年前の象の齒

野尻湖から掘り出した話

野尻湖から約十萬年前の象をはじめ完全に形態を残しの歯が出たという珍らしいている

話——去る十五日

野尻湖西岸小松屋旅館主人加藤松之助さんがボートをつなぎに出たところ、岸から十間ほどの水底に沙な物があるので掘り出し、三水中学の永野貞治氏を通じて縣嘱託八木貞助氏に届けられ象の右下アゴの奥歯と判明したもの、大きさは長さ一尺、高さ六寸、目方一貫三百匁ホウロウ質

八木貞助氏談

今から約十萬年前のものと推定され洪積層の千曲層から出るものだ、縣下で象の化石が出たのは南北佐久、小縣についで今回で七カ所目だむろん日本列島が大陸続きのころ生息していた象のものだこんなに完全に残った化石は珍らしい

寫眞は象の奥歯と八木氏

1949（昭和24）年9月27日 信濃毎日新聞

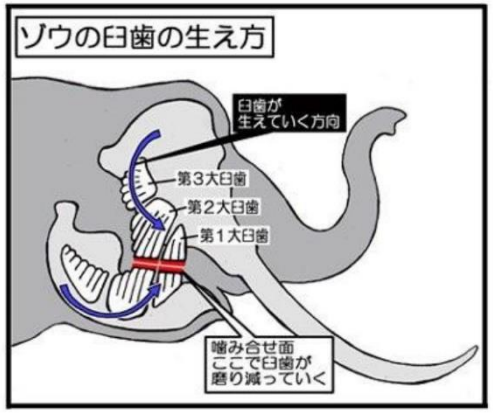
資料4で学術報告される前に、地質学者八木貞介が10万年前のゾウの化石だとする見解を示していた。

ナウマンゾウの臼歯の生え方

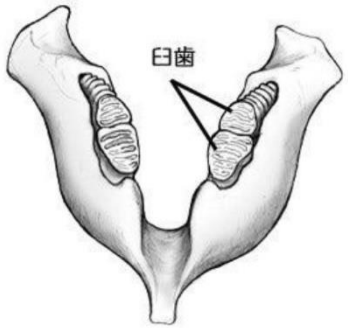
○ゾウの臼歯はベルトコンベア式

人間を含む一般的な哺乳類の歯の生え方は乳歯が抜けて、その下から永久歯が生えるという「垂直交換」であるが、ゾウの仲間は後ろから前へ臼歯が生えてくるという「水平交換」である。前の臼歯を使ううちに磨耗して無くなり、後ろ新たな臼歯が出てくる。

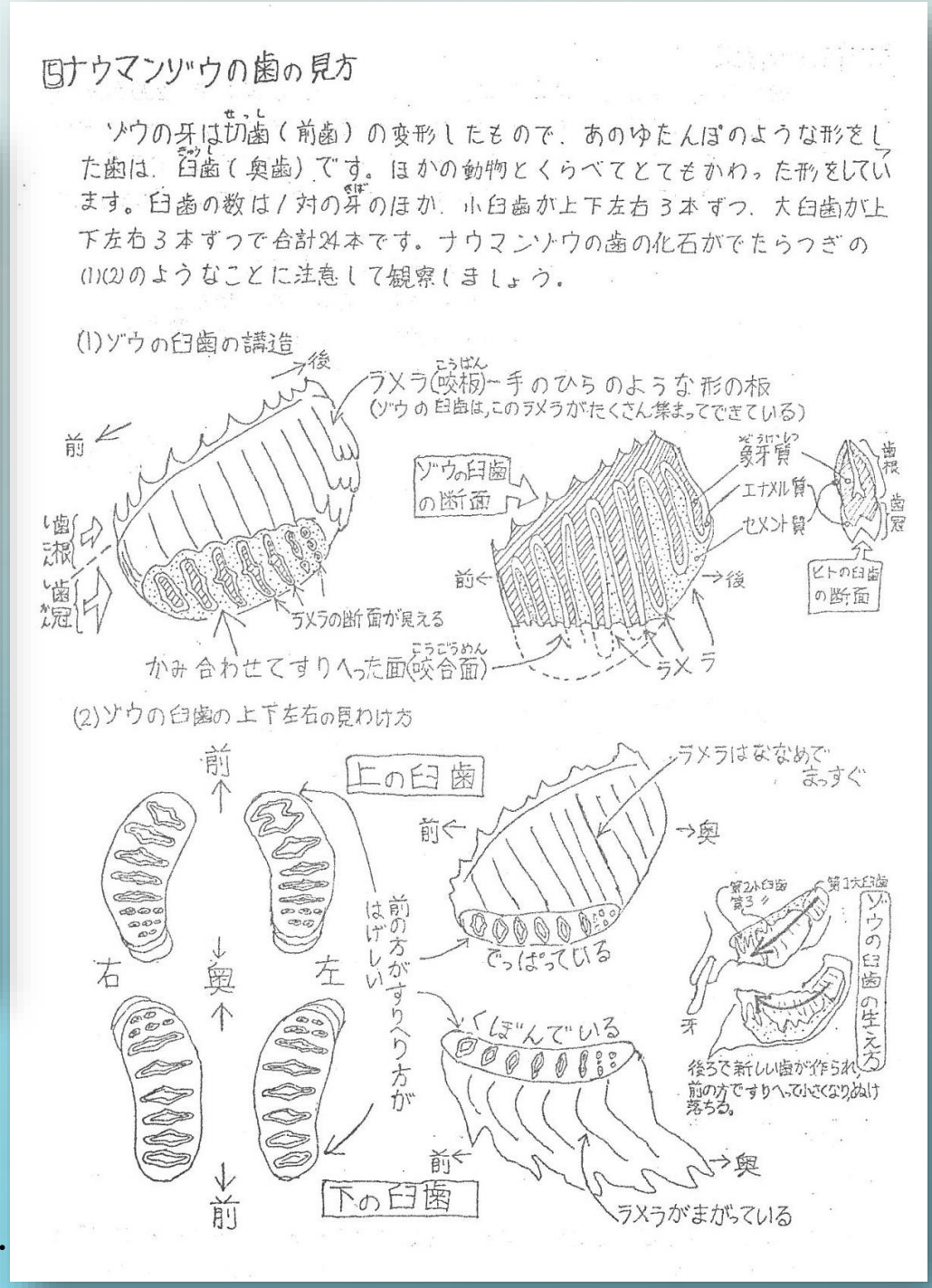
現生のアジアゾウが６回臼歯が生え変わることを参考に、ナウマンゾウの第３臼歯は30歳ころから出てくると考えられている。



ゾウの下顎の骨



出典：川崎悟司「ゾウの臼歯はベルトコンベア式」
https://ameblo.jp/oldwarld/entry-10069867928.html



出典：野尻湖発掘調査団『発掘の手びき　第８次野尻湖発掘』，p.40.

展示資料 No.6　『信州ローム』　No.4 - No.8

信州ローム研究会
1958（昭和33）年～1963（昭和38）年

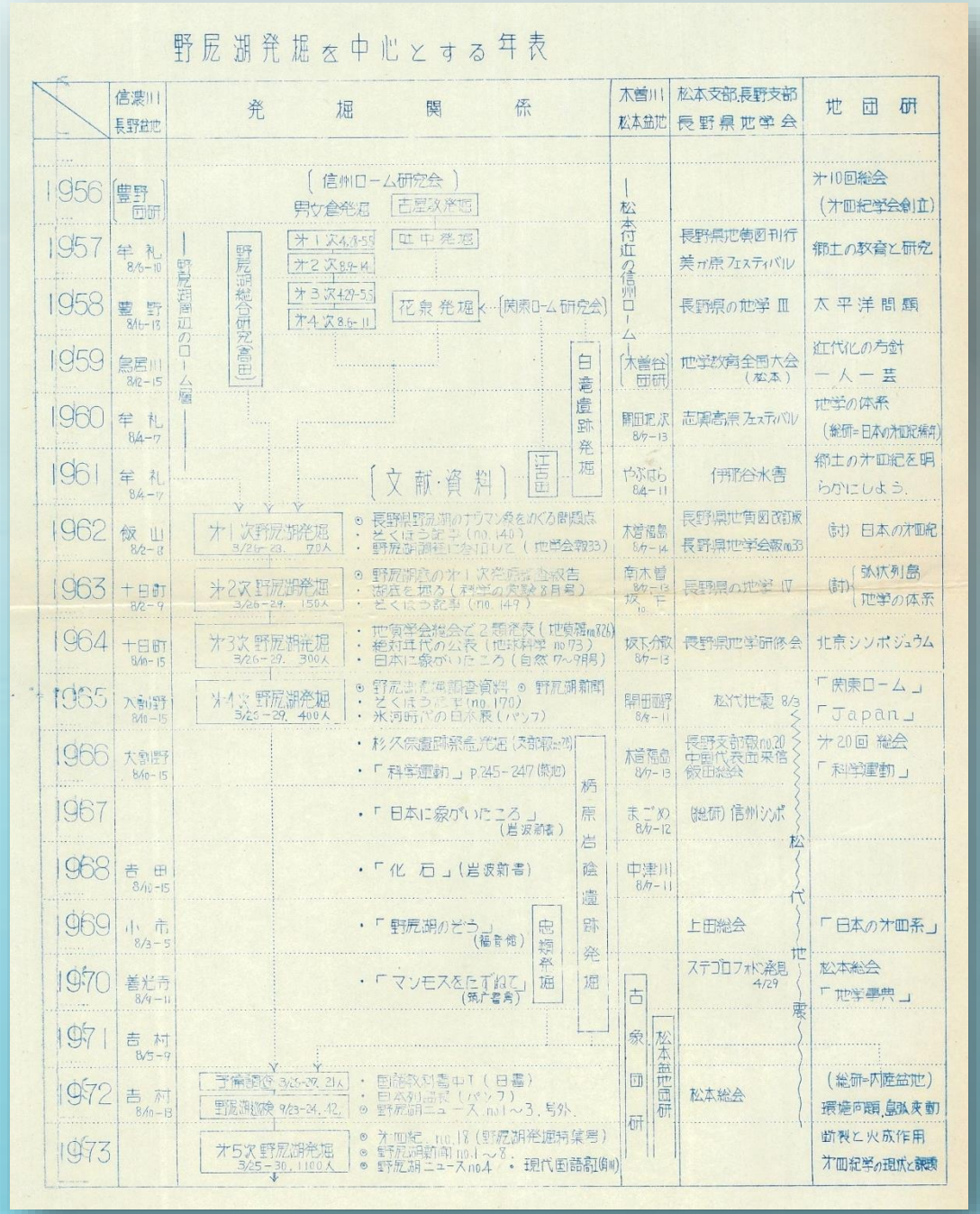
信州大学 大学史資料センター　蔵
（卒業生寄贈）

信州大学医学部第二解剖学教室に事務局を置いた信州ローム研究会が発行した雑誌。
医学部の鈴木誠を中心に、人類が登場した第四紀の地質・地形・人文地理・人類・考古・生物の各学術分野を関心の対象とした研究会。
信州大学教育学部の斉藤豊を中心とした信州大学出身者からなる豊野層団体研究グループとともに第1次から第4次の野尻湖発掘を支えた。

戦前～戦後1950年代頃までの博物学・地質学・考古学のようす

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

戦前の信濃教育会を母体とした教員による学術調査、研究の伝統と、戦後の民主主義の理念に基づく新しい団体研究の実践が結びついて戦後の地質学・考古学の研究が進められ、豊野層団体研究グループと信州ローム研究会とが協力して野尻湖発掘が始まった。



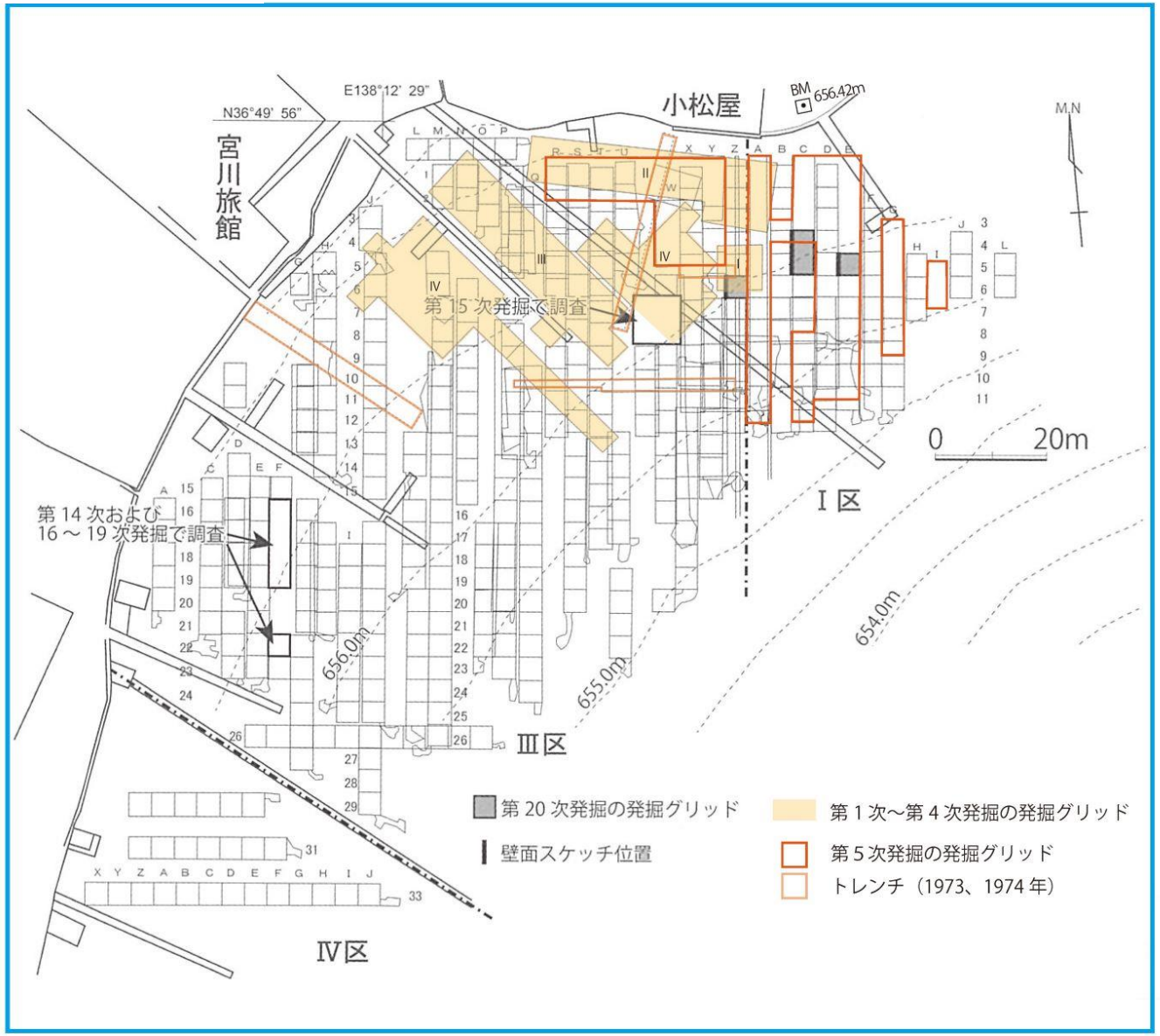
加藤松之助とナウマンゾウ臼歯

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

野尻湖から黒姫山・妙高山を望む

黒姫山の大崩落により7万年前に誕生した野尻湖は、現在まで湖であったことでナウマンゾウなどの大型動物が集まりやすく、また湖底に動植物が化石として残りやすい状態を作り出した。(野尻湖の奥中央が立が鼻　左:黒姫山　右:妙高山)

野尻湖の位置と発掘区



野尻湖ナウマンゾウ博物館（2016）「第20次野尻湖発掘の地質学的成果」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告　第20次野尻湖発掘報告書』第24号，p15．と
野尻湖発掘調査団　井尻正二監修（1975）『野尻湖の発掘　1962－1973』，共立出版，p13・26・186．をもとに作成

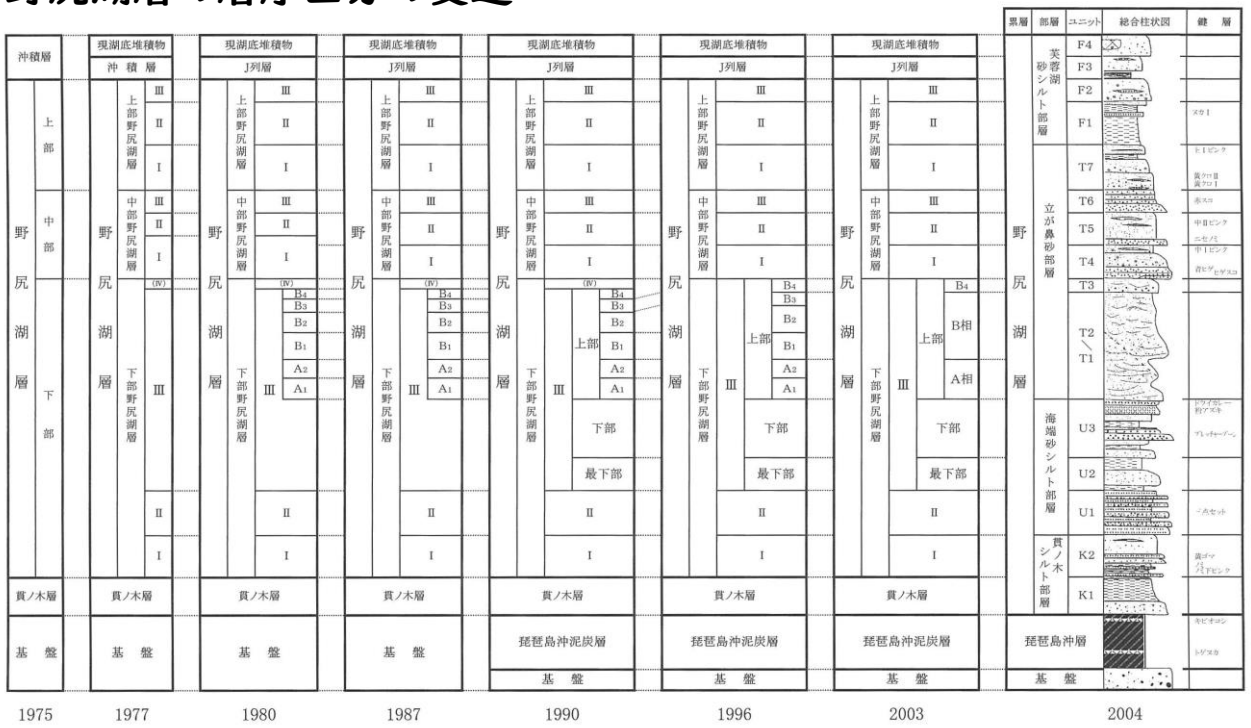
野尻湖遺跡群

1953（昭和28）年の芹沢長介らによる杉久保遺跡のナイフ形石器紹介から始まった野尻湖遺跡群の研究は、ナウマンゾウ臼歯の学術報告と野尻湖発掘及び並行して行われた陸上発掘調査、さらには上信越自動車道建設に伴う発掘調査により、広大な先土器時代（旧石器時代）遺跡群の存在が明らかになった。

出典：野尻湖ナウマンゾウ博物館，『ナウマンゾウの狩人をもとめて』，2003，p8.

野尻湖層の層序 （図1～4）

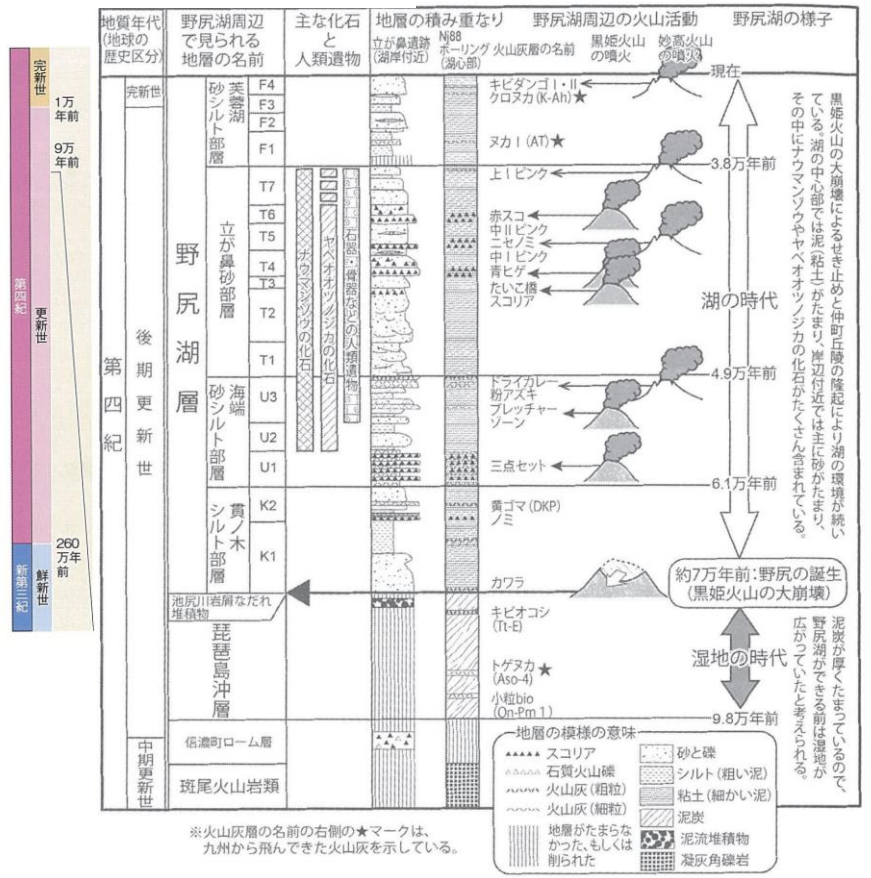
野尻湖層の層序区分の変遷



野尻湖ナウマンゾウ博物館（2006）「第15次野尻湖発掘の概要と成果」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第14号，p4.

図1 地層の区切り方（層序）が発掘調査の進展によって次第（左から右へ）精密で正確なものになってきたことを示している。

野尻湖層の層序表

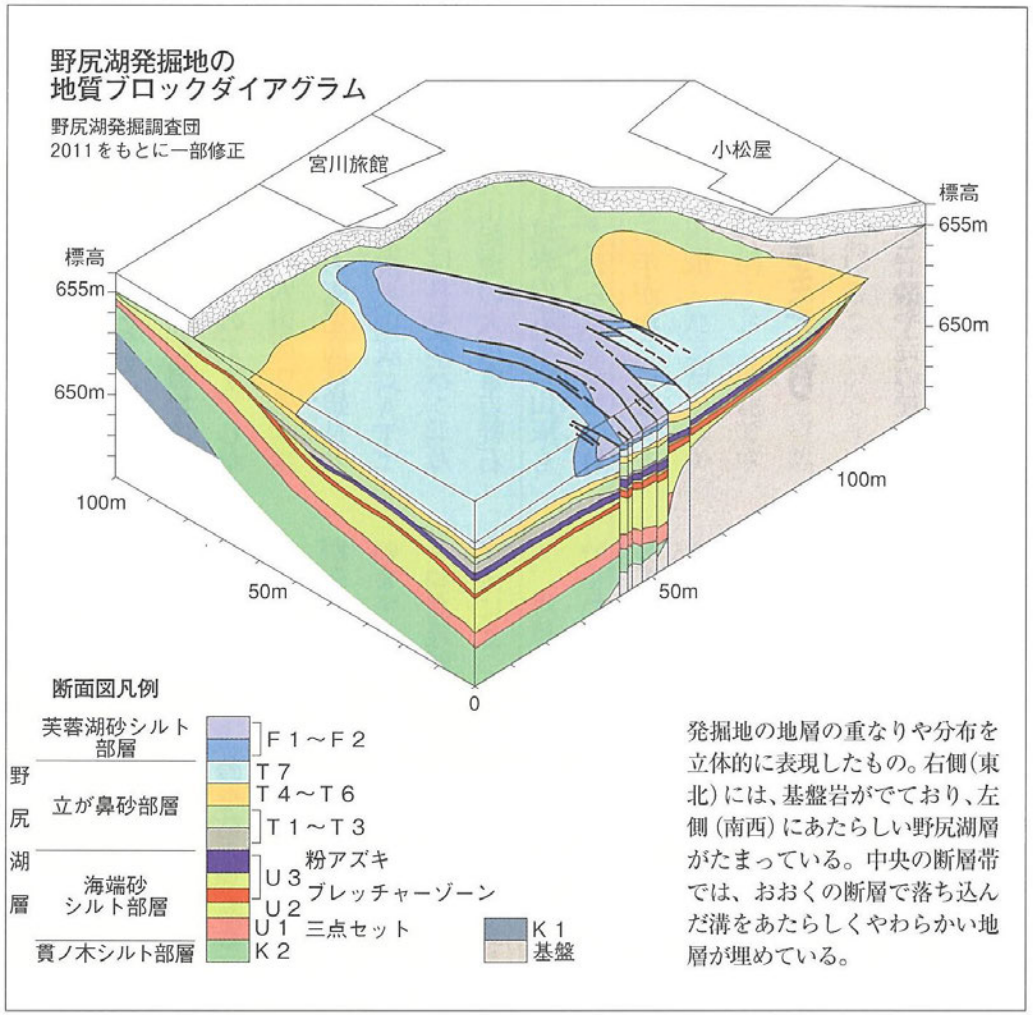


野尻湖発掘調査団（2018）『野尻湖のナウマンゾウ－市民参加でさぐる氷河時代－』，新日本出版，p15.
野尻湖ナウマンゾウ博物館（2003）『ナウマンゾウの狩人をもとめて』，p3.

図2 図1のなかの最新の表を詳しくしたもので、人文、自然のデータを加えたもの

野尻湖底からはナウマンゾウやヤベオオツノシカなどの生物の化石が見つかっている。生物がどのような時代に生きていたのかを考える上で決め手となるのは、化石が埋まっていた野尻湖層と呼ばれる湖底に堆積した地層に含まれる様々な情報（火山灰、石器、動物化石、花粉化石、古環境）をまとめて、地層の重なりを調べることである。図1～4はそれらの結果を示すものである。

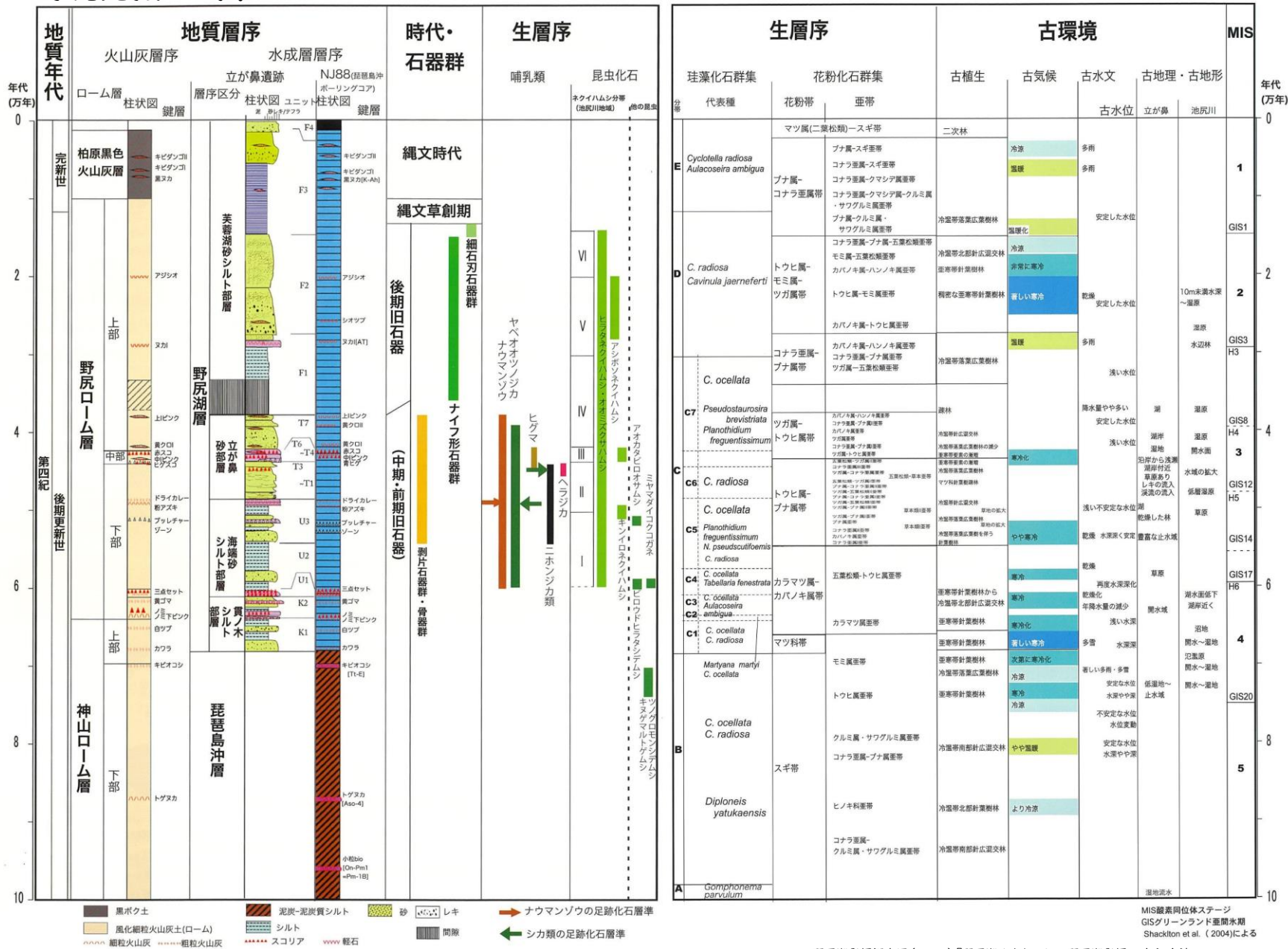
野尻発掘地の地質ブロックダイアグラム



野尻湖ナウマンゾウ博物館（2003）『野尻湖ナウマンゾウの狩人をもとめて』, p12.

図3 野尻湖の発掘地の地層の様子を立体的に示したもの。右側（北東）では基盤となる岩盤が地上近くまで来ていて、湖底の堆積層が薄いこと、左側（南西）は堆積層が厚いことがわかり、発掘する際の目安とすることができる。

野尻発掘の成果



野尻湖発掘調査団（2018）『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』, p68−69.

図4 地層の層序を基準に、火山灰、出土石器、動物化石、植物や気候の変化をまとめたもの

展示案内図へ戻る

発掘のはじまり

「まず実践、掘ってみよう」を合言葉にナウマンゾウ臼歯化石の産出層準を探ることを目的に始まりました。発掘が進む中で野尻湖層と命名するとともに、当時が最終氷期の寒冷期にあたっていたこと、旧石器の剥片の出土から人類との関わりが課題となりました。

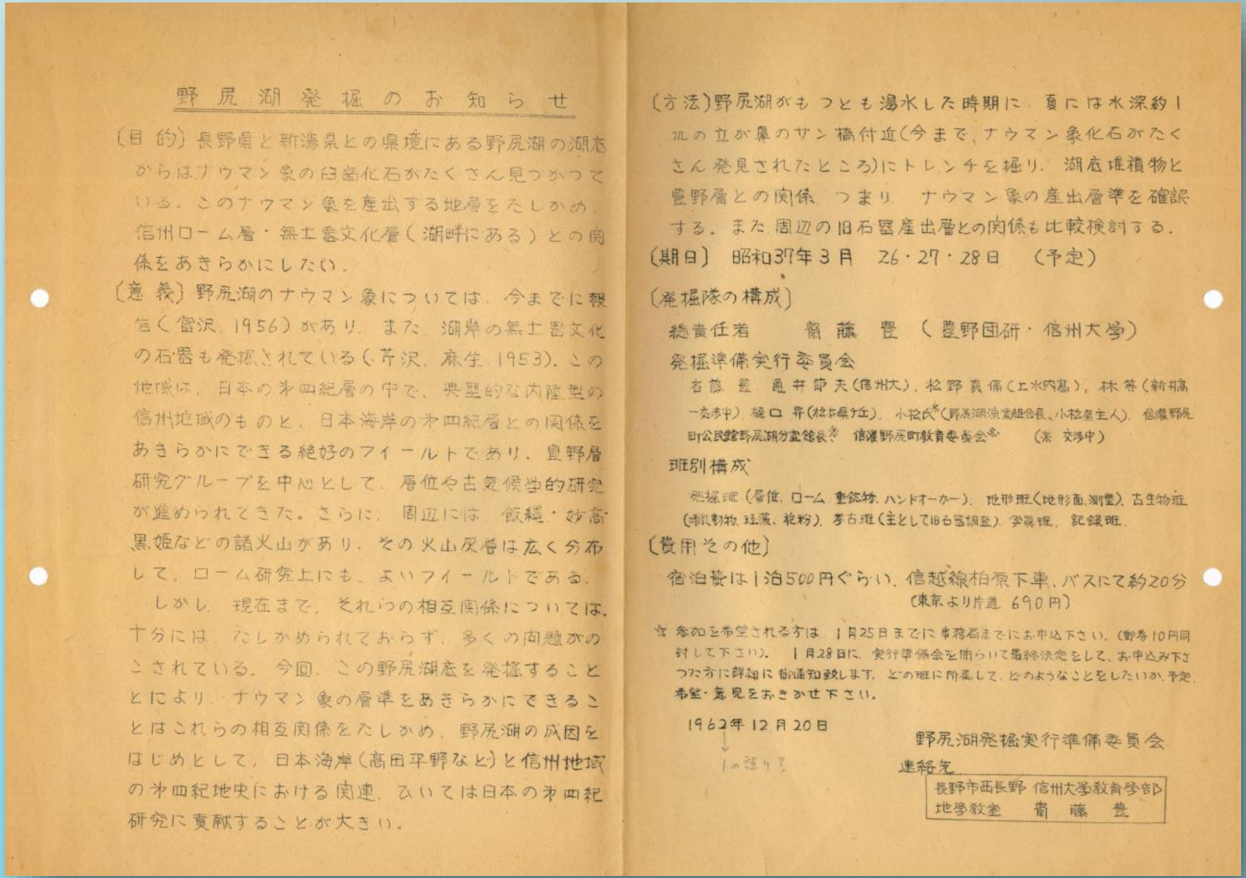
高田・城北中学校生と小林忠夫

第1次発掘最終日に中学生によって
大腿骨化石が見つかった。

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

1962（ママ）年12月「野尻湖発掘のお知らせ」チラシ

1962（昭和37）年3月に行われた第1次発掘調査を予告するチラシ。
発行年の1962年は1961年の誤記。



野尻湖発掘のお知らせ

〔目的〕長野県と新潟県との県境にある野尻湖の湖底からはナウマン象の臼歯化石がたくさん見つかっている。このナウマン象を産出する地層をたしかめ、信州ローム層・無土器文化層（湖畔にある）との関係をあきらかにしたい。

〔意義〕野尻湖のナウマン象については、今までに報告（富沢、1956）があり、また、湖岸の無土器文化の石器も発掘されている（芹沢、麻生、1953）。この地域は、日本の第四紀層の中で、典型的な内陸型の信州地域のものと、日本海岸の第四紀層との関係をあきらかにできる絶好のフィールドであり、豊野層研究グループを中心として、層位や古気候学的研究が進められてきた。さらに、周辺には、飯縄・妙高・黒姫などの諸火山があり、その火山灰層は広く分布して、ローム研究上にも、よいフィールドである。

しかし、現在まで、それらの相互関係については、十分にはたしかめられておらず、多くの問題がのこされている。今回、この野尻湖底を発掘することにより、ナウマン象の層準をあきらかにできることはこれらの相互関係をたしかめ、野尻湖の成因をはじめとして、日本海岸（高田平野など）と信州地域の第四紀地史における関連、ひいては日本の第四紀研究に貢献することが大きい。

〔方法〕野尻湖がもっとも渇水した時期に、夏には水深約1mの立が鼻のサン橋付近（今まで、ナウマン象化石がたくさん発見されたところ）にトレンチを掘り、湖底堆積物と豊野層との関係、つまり、ナウマン象の産出層準を確認する。また周辺の旧石器産出層との関係も比較検討する。

〔期日〕昭和37年3月 26・27・28日 （予定）

〔発掘隊の構成〕

総責任者 斎藤 豊 （豊野団研・信州大学）

発掘準備実行委員会

斎藤 豊、亀井節夫（信州大）、松野真備（上水内高）、林 茂（新井高一交渉中）、樋口 昇（松本県ケ丘）、小松氏※（野尻湖漁業組合長、小松屋主人）、信濃野尻町公民館野尻湖分室館長※ 信濃野尻町教育委員会※ （※ 交渉中）

班別構成

発掘班（層位、ローム、重鉱物、ハンドオーガー）、地形班（地形面、測量）、古生物班（哺乳動物、珪藻、花粉）、考古班（主として旧石器調査）、写真班、記録班。

〔費用その他〕

宿泊費は1泊500円ぐらい。信越線柏原下車、バスにて約20分
（東京より片道 690円）

☆ 参加を希望される方は、1月25日までに事務局までにお申込下さい。（郵券10円同封して下さい）。1月28日に、実行準備会を開いて最終決定をして、お申込み下さった方に詳細に御通知致します。どの班に所属して、どのようなことをしたいか、予定、希望・意見をおきかせ下さい。

1962年12月20日
↓
1の誤り？

野尻湖発掘実行準備委員会

連絡先

長野市西長野 信州大学教育学部
地学教室 斎藤 豊

酒井　潤一氏　蔵

第1次、第2次発掘出土品

第1次発掘 オオツノシカの上あごの奥歯

第1次発掘の際にナウマンゾウの大腿骨化石と共にオオツノシカの化石が発見された。それまで熱帯の動物とされていたナウマンゾウが、氷河期の代表的な動物であるオオツノシカと同時代に野尻湖周辺にいたことがわかった。野尻湖層に含まれていた花粉化石の鑑定結果は亜寒帯から冷温帯の植物であった。野尻湖層の^{14}C法（放射性炭素法）による絶対年度の測定値と合わせ、ナウマンゾウとオオツノシカが生息していたのはウルム氷期（最後の氷期）の最も寒い時期ということがわかった。

第2次発掘 オオツノシカのツノ

出典：野尻湖発掘調査団（1975）『野尻湖の発掘写真集』, p10, p11, p15, 共立出版株式会社.

展示資料 No.7

発掘調査で初めて出土した石器の剥片（レプリカ）

1964（昭和39）年

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

石器作成の際の剥片。無斑晶質安山岩製。
ナウマンゾウと同時代に石器製作を行う人類がいた可能性を示す初めての資料。第3次の発掘調査で出土した。

展示資料 No.８　野尻湖新聞（4次）3月26日号～3月29日号

1965（昭和40）年3月

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵
（仁科良夫資料）

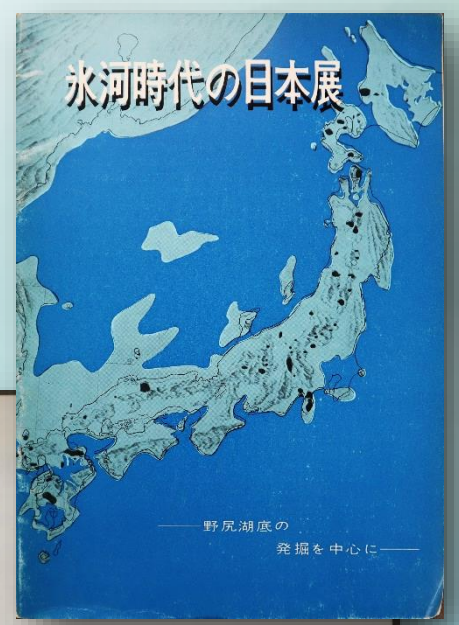
初めて発行された野尻湖新聞。発掘調査期間中の3月26日から29日まで4号が発行され、参加者全員に情報共有のために配布された。以後、各発掘調査に際して発行された。

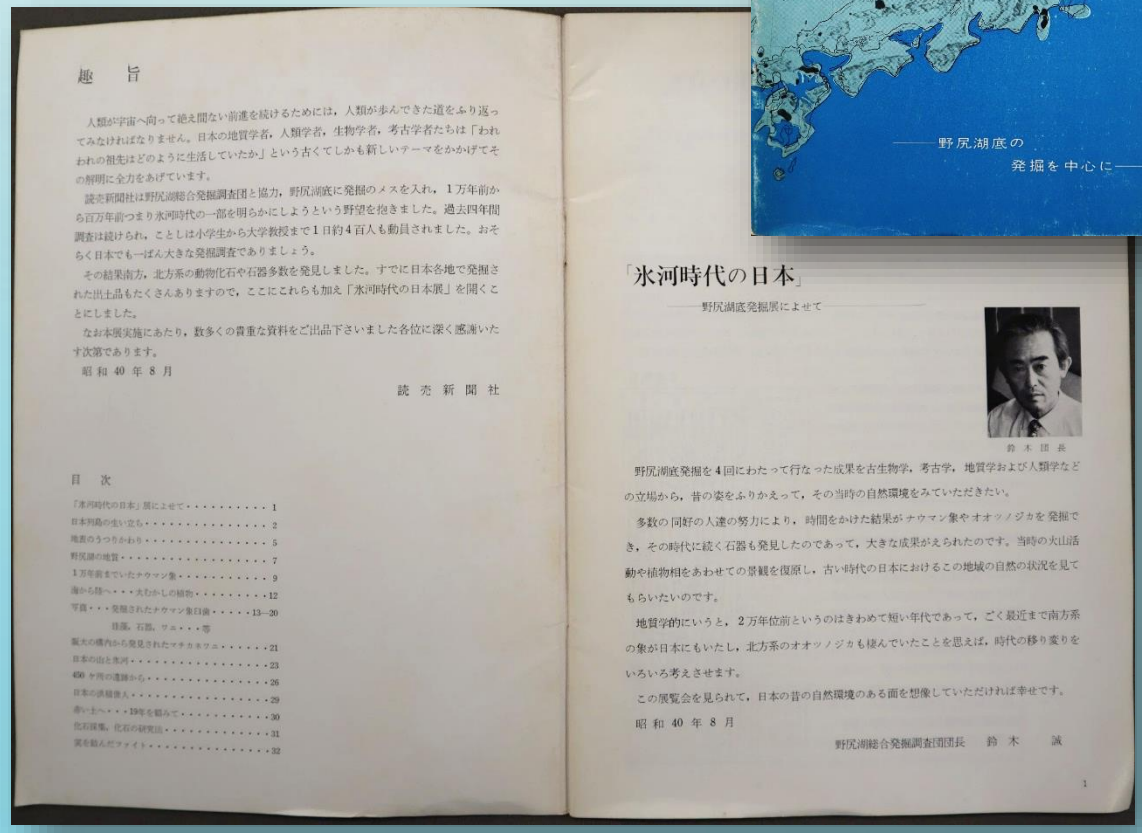
展示資料 No.9　「氷河時代の日本」展　図録

1965（昭和40）年

信州大学 大学史資料センター　蔵

第4次発掘後、成果を公表するために、東京・伊勢丹百貨店、大阪・阪神百貨店、諏訪・丸光百貨店で展示会を開催した。展示資料は伊勢丹開催時のもの。





趣　旨

人類が宇宙へ向って絶え間ない前進を続けるためには，人類が歩んできた道をふり返ってみなければなりません。日本の地質学者，人類学者，生物学者，考古学者たちは「われわれの祖先はどのように生活していたか」という古くてしかも新しいテーマをかかげてその解明に全力をあげています。

読売新聞社は野尻湖総合発掘調査団と協力，野尻湖底に発掘のメスを入れ，1万年前から百万年前つまり氷河時代の一部を明らかにしようという野望を抱きました。過去四年間調査は続けられ，ことしは小学生から大学教授まで1日約4百人も動員されました。おそらく日本でも一ばん大きな発掘調査でありましょう。

その結果南方，北方系の動物化石や石器多数を発見しました。すでに日本各地で発掘された出土品もたくさんありますので，ここにこれらも加え「氷河時代の日本展」を開くことにしました。

なお本展実施にあたり，数多くの貴重な資料をご出品下さいました各位に深く感謝いたす次第であります。

昭和 40 年 8 月

読 売 新 聞 社

目　次

「氷河時代の日本」展によせて・・・・・・・・・・・1
日本列島の生い立ち・・・・・・・・・・・・・・・・2
地表のうつりかわり・・・・・・・・・・・・・・・・5
野尻湖の地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
1万年前までいたナウマン象・・・・・・・・・・・9
海から陸へ・・・大むかしの植物・・・・・・・・・12
写真・・・発掘されたナウマン象臼歯・・・・・13—20
　　珪藻，石器，ワニ・・・等
阪大の構内から発見されたマチカネワニ・・・・・・21
日本の山と氷河・・・・・・・・・・・・・・・・・23
450 ヶ所の遺跡から・・・・・・・・・・・・・・・26
日本の洪積後人・・・・・・・・・・・・・・・・・29
赤い土へ・・・19年を顧みて・・・・・・・・・・・30
化石採集，化石の研究法・・・・・・・・・・・・・31
実を結んだファイト・・・・・・・・・・・・・・・32

「氷河時代の日本」

——野尻湖底発掘展によせて——

鈴 木 団 長

野尻湖底発掘を4回にわたって行なった成果を古生物学，考古学，地質学および人類学などの立場から，昔の姿をふりかえって，その当時の自然環境をみていただきたい。

多数の同好の人達の努力により，時間をかけた結果がナウマン象やオオツノジカを発掘でき，その時代に続く石器も発見したのであって，大きな成果がえられたのです。当時の火山活動や植物相をあわせての景観を復原し，古い時代の日本におけるこの地域の自然の状況を見てもらいたいのです。

地質学的にいうと，2万年位前というのはきわめて短い年代であって，ごく最近まで南方系の象が日本にもいたし，北方系のオオツノジカも棲んでいたことを思えば，時代の移り変りをいろいろ考えさせます。

この展覧会を見られて，日本の昔の自然環境のある面を想像していただければ幸せです。

昭 和 40 年 8 月

野尻湖総合発掘調査団団長　鈴 木　誠

1

モグラののぼりを立てて発掘する信州大学の学生たち

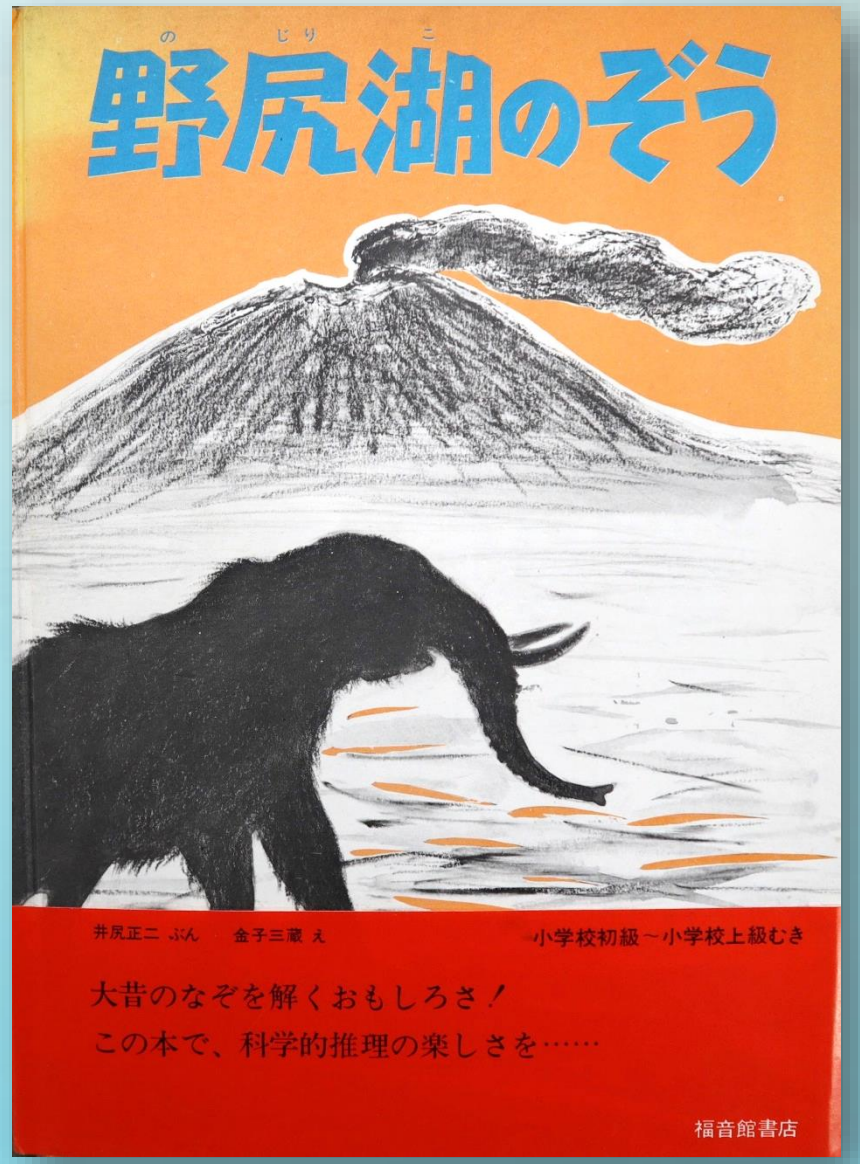
「氷河時代の日本」展　図録より

展示資料 No.10　『野尻湖のぞう』（福音館書店）

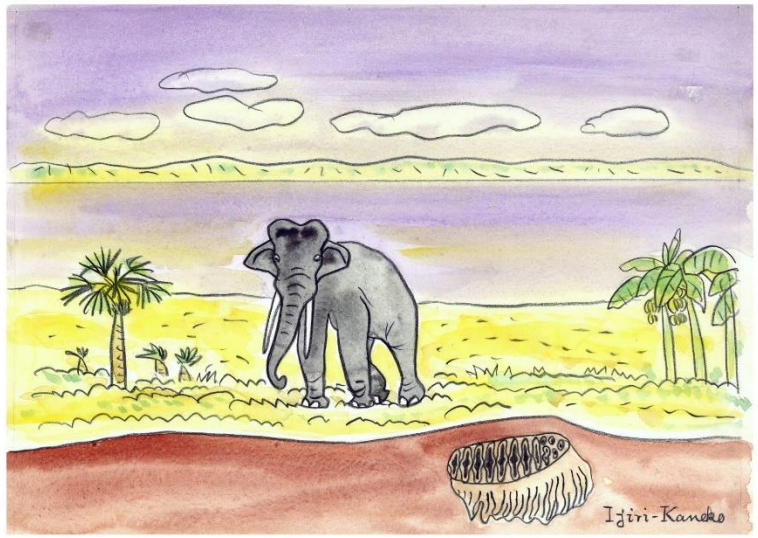
1969（昭和44）年

信州大学 大学史資料センター　蔵

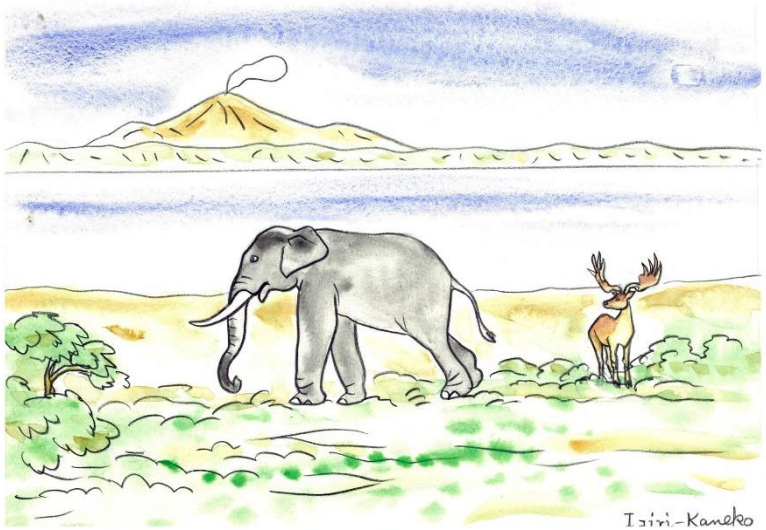
文章：井尻正二、挿絵：金子三蔵。
第1次から第4次までの発掘の成果を子どもたちにもわかるような形でやさしく解説している。1976（昭和51）年に新版が出され、現在も入手できる。



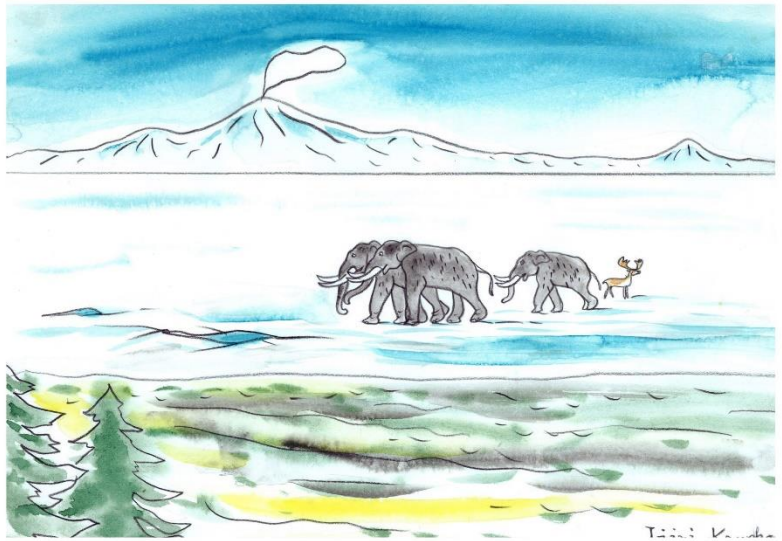
復元図に見る発掘の歴史



発掘が始まる前の復元図（井尻・金子、1961（昭和36）年）
ナウマンゾウは南方系と考えられていた



第1次発掘後の復元図（井尻・金子、1962（昭和37）年）
北方系と考えられていたヤベオオツノジカがナウマンゾウと共存していたことが明らかになった



第2次発掘後の復元図（井尻・金子、1963（昭和38）年）
花粉化石と放射年代から氷期の野尻湖が復元された

第3次発掘後の復元図（井尻・金子、1964（昭和39）年）
石器の発見で「野尻湖人」の存在が浮かび上がってきた

第4次発掘後の復元図（井尻・金子、1965（昭和40）年）
野尻湖がキルサイトであった可能性が描かれている

第1次発掘から第4次発掘までの成果をもとに、井尻正二氏と画家の金子三蔵氏によって描かれた復元図

展示案内図へ戻る

図：野尻湖ナウマンゾウ博物館 提供

発掘の再開

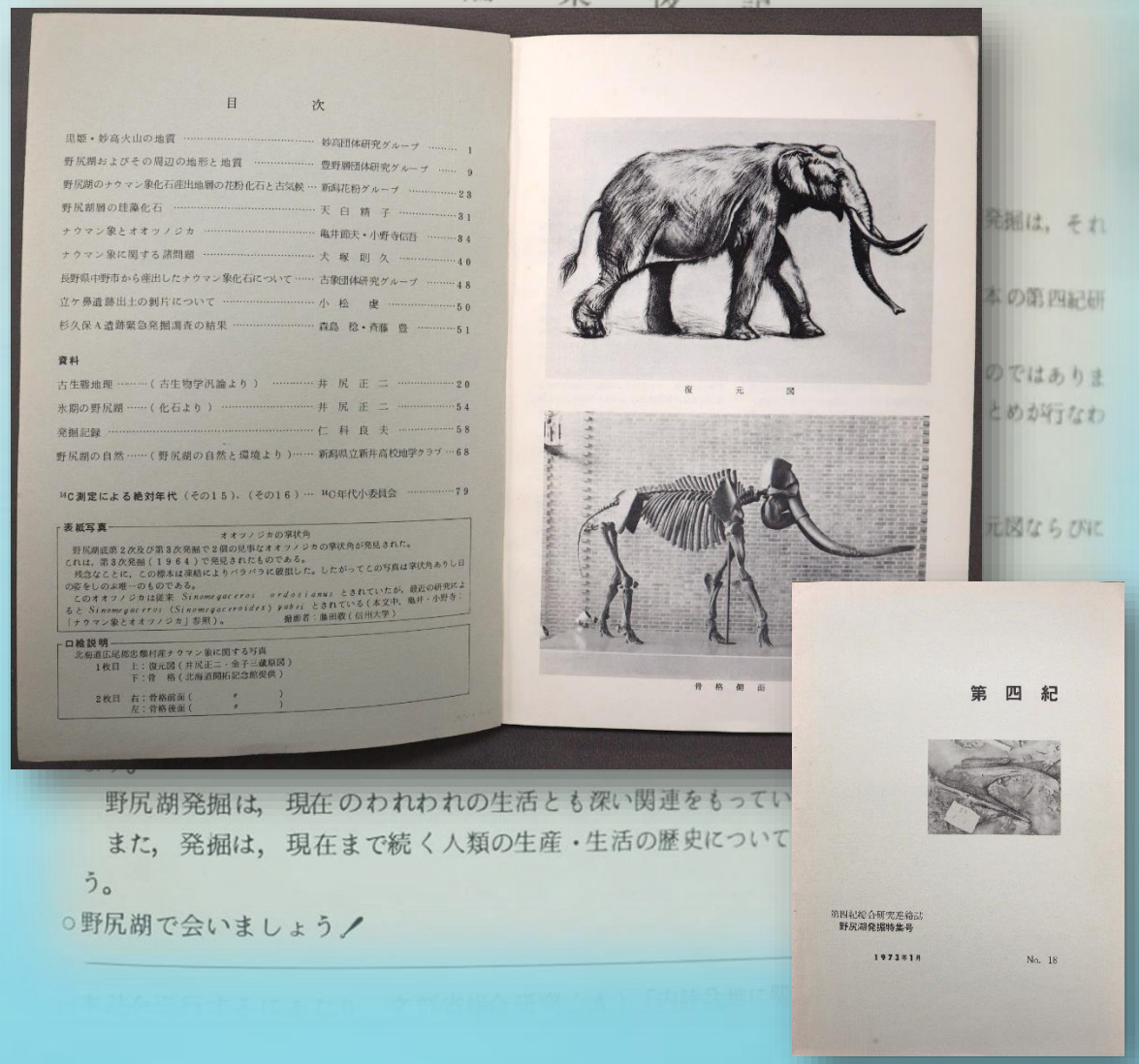
1965（昭和40）年の第4次発掘以後、1973（昭和48）年まで、発掘は中断しました。発掘再開には周囲の研究状況の進展がありましたが、特に文部省科学研究費による第四紀総合研究が再開にあたって果たした役割は大きいものがありました。

展示資料 No.11　『第四紀』No.18（第四紀総合研究連絡誌　野尻湖発掘特集号）

1973（昭和48）年1月

信州大学 大学史資料センター　蔵

本資料は、第5次発掘を実施するための準備資料で、第四紀総合研究の一環として発行された。地形・地質、花粉化石、ナウマンゾウ・オオツノシカ、石器などの各分野から報告がなされている。編集後記の文末は、「野尻湖で会いましょう！」で結ばれている。



第5次発掘の準備・年表

1965年の第4次発掘から8年の発掘休止期を経て、第5次発掘は1973年に行われた。
第5次発掘がいかに慎重で長期間の準備により再開されたのかがわかる。

＜1971年＞

10月　：「内陸盆地の第四系に関する総合研究」（代表者：郷原保真）を第四紀総合研究会（以下，第四紀総研と略す）から申請。申請計画立案のなかで野尻湖発掘再開が検討される。

12月26　：第四紀総研徳島シンポジウム。

～28日　野尻湖発掘再開について下相談。

＜1972年＞

1月15　：地学団体研究会（以下，地団研と略す）理論の学習会。野尻湖発掘再開，

～16日　予備調査などについて打合せ。

2月　：予備調査のよびかけ。

3月24日：野尻湖発掘予備資料集 No. 1 作成。

3月27　：野尻湖で予備調査・発掘準備打合せ（参加者 21 名），ナウマンゾウ

～28日　の頸椎発見。

4月 5日：第四紀総研地域センター代表者会議（千葉大学，地質学会会場），1973年3月26～29日に第5次野尻湖発掘調査を実施することを決定。松本に発掘準備事務局をおく。

下旬：3月に発見した頸椎の樹脂による強化実験成功。

5月16日：野尻湖ニュース第1号発行。

7月25日：野尻湖ニュース第2号発行。

8月 3日：発掘準備事務局と発掘参加希望者の集まり（新潟大学，地団研総会会

9月23　：野尻湖周辺の地質巡検と発掘打合せ（参加者 42 名），発掘日程の変更

～24日　（3月26～31日に延長），「第四紀」No. 18（野尻湖発掘特集号）の編集方針，記録のとりかたなど検討。

10月30日：野尻湖ニュース3号発行，参加申込み用紙同封。参加申込み第1号は故鈴木 誠先生。

11月13日：発掘準備事務局会議，「第四紀」No. 18 の原稿しめ切り 11 月 30 日，1月発行をきめる。

12月中旬：「第四紀」No. 18 編集，印刷へまわす。

26日：現地関係者へあいさつまわり（信濃町役場，同教育委員会，公民館，野尻区長，旅館組合，漁業組合，発電所など）。

＜1973年＞

1月上旬：野尻湖ニュース号外発行，野尻湖に関する文献集録。

15日：参加申込みしめ切り，「第四紀」No. 18 発行。

2月上旬：発掘届など作成。しめ切り後も参加申込み多数。

2月18　：現地で旅館と交渉，公民館の下検分，町役場・教育委員会へのあいさ

～19日　つ。お寺へあいさつ。

下旬：参加申込 600 名をこえる。あらためて予約金（1,000円）をつけた参加再確認用紙発送。

26日：発掘準備事務局会議，準備状況点検。

3月 7日：発掘準備事務局会議，参加再確認 320 名。

8日：発掘準備拡大事務局会議，発掘前日までのスケジュール・仕事の分担，発掘期間中の日課・係の分担，資材の確認，参加費徴収決定。

9日：現地で測量・クイ打ち，旅館の再確認。

10日：マルサン食堂との交渉，信越病院へあいさつ。役場へ排水ポンプ・ブルドーザーの依頼。

12日：参加希望者を図書カードで整理，宿舎の割りつけ・部屋割り・作業班

～15日　別編成完了。これらを全参加希望者に通知。野尻湖ニュース4号発行（13日）。

3月16　：グリッド図作製，各グリッドへの参加者の割りつけ。資材の梱包開始

～20日　（18日）。

3月21日：現地での旅館との再交渉。さらに数軒の旅館へ宿泊者を割りふり，公民館への宿泊をとりやめ，お寺への宿泊者をへらす。

22日：宿泊の割りつけ・部屋割りやりなおし，参加者への変更通知は不可能なので，受付けで処理する方針で準備。

野尻湖発掘調査団 井尻正二監修（1975）『野尻湖の発掘 1962−1973』，共立出版

2. 野尻湖発掘の経過と記録

3月23日：リボン（1,000個），腕章できる。
24日：資材梱包完了（ダンボール50個），野尻湖新聞第1号完成，アンケート用紙完成，医療班編成。
25日：資材積みこみ（ジープ・ライトバン），積みのこし資材は26日にトラックで運搬。事務局出発午後1時，野尻湖着午後4時，ただちに設営開始。
26〜30日：発掘。
31日：後片づけ
4月 1日：試資料の整理，資材撤収・ポンプなど返却。
2日：事務局より3名野尻湖へいき残務整理。立が鼻の埋蔵文化財発見届をだす準備。
3日：野尻湖で密掘がおこなわれているとのニュースが伝わったため，信濃町教育委員会に密掘防止の立ふだを立ててもらうよう連絡。
4日：埋蔵文化財の取得届・同保管証・遺跡発見届（立が鼻）を送付。現地関係者へ礼状発送。
5日：発掘成功記念バッチ発注。野尻湖新聞増刷。
4月 6日：階層別参加人数の整理，会計決算。
7日：アンケート集約。
9日：専門別研究グループ代表者会議の通知発送。
10日：報道関係者へのあいさつ状発送（約50名）。拡大事務局会議（総まとめの会，参加者25名）。大コンパ。
13日：ナウマンゾウの牙とオオツノシカの掌状角（通称“月と星”）のクリーニングはじまる。
20日：野尻湖新聞8号完成。
21日：専門別研究グループ代表，顧問団，拡大事務局の合同会議（松本）。
〜22日 今後のまとめの方針について検討し，試資料を整理する（参加者47名）。22日早朝，第1次〜第4次発掘団長・鈴木 誠先生逝去。
27日：写真展の準備。バッチ完成。
5月 3日〜5日：野尻湖写真展（東京・地団研総会会場），全紙の発掘写真35枚。
21日：第1回野尻湖の日。今後，毎週土曜日の午後を「野尻湖の日」として，まとめの作業などをすすめていくことが事務局で決定。
25日：「国土と教育」19号発行される。「発掘速報・野尻湖底を掘る」を掲載。
26日：第2回野尻湖の日。
6月 2日：第3回野尻湖の日。野尻湖そくほうNo.1発行。井尻・星野・小森の3氏参加。
7日：第6次発掘にむけての理論の学習会はじまる（事務局・地団研松本支部）。
6月 8日：第4回野尻湖の日。信州大学学内展示の相談。
16日：第5回野尻湖の日。大阪の景守 豊，野尻湖発掘の普及用スライド（テープ付，野尻湖発掘に参加した大阪の教師グループの作品）持参。試写会。
17日：夏の野尻湖地質調査（8月10日〜16日）の打合せ会（長野）。長野県考古学会で小松 虔，野尻湖発掘に関する特別講演（諏訪）。
18〜22日：野尻湖発掘の信州大学学内展示の準備。
23 〜25日：信州大学学内展示会（理学部）。復元・強化されたナウマンゾウの臼歯，オオツノシカの掌状角，骨器，石器など48点と写真・図多数，見学者約500人。
30日：第6回野尻湖の日。
7月 6日：野尻湖そくほう2・3合併号発行。化石・遺物の水平分布図作製にかかる。
14日：第7回野尻湖の日。井尻正二の特別講演（第6次発掘にむけての問題点），参加者45名。
21日：第8回野尻湖の日。
8月 1日：野尻湖そくほうNo.4発行。
10 〜16日：野尻湖周辺の地質調査・考古学調査（主として表面採取）。参加者約70名。仲町Eトレンチで置石とチョッパーと思われる石器を発見。しかし，地質図は未完成。
8月20日：秋の地質調査案内発送。埋蔵文化財発見届を発送（仲町・チョッパー）。
22〜24日：第四紀総研会津シンポジウムで野尻湖発掘の報告。
9月 8日：第10回野尻湖の日。
14日：第11回野尻湖の日。
21日：第12回野尻湖の日。
22 〜25日：秋の地質調査。参加者50名。野尻湖ニュースNo.5発行。地質図完成。
29日：第13回野尻湖の日。秋の地質調査総括。野尻湖そくほうNo.5発行。
10月18日：長野県地学会で野尻湖発掘の報告。
20日：第14回野尻湖の日。恒常的な運営委員会設置きまる。野尻湖そくほうNo.6発行。
11月 2〜3日：花粉グループ集会（松本）。参加者9名。
4日：拡大運営委員会（長野）。参加者26名。
24日：第15回野尻湖の日。
12月 1日：野尻湖発掘展準備会（信濃町）。参加者17名（信濃町関係者7名，調査

野尻湖発掘調査団 井尻正二監修（1975）『野尻湖の発掘 1962−1973』，共立出版

団 10 名)。
12月10日：野尻湖ニュース号外発行。
15日：第 16 回野尻湖の日。
22日：第 17 回野尻湖の日。野尻湖そくほう No. 7 発行。
26 ：専門別グループ集会 (花粉・大型植物・珪藻・地質・貝類は松本で,
～28日 重鉱物は高田で)。
＜1974 年＞
1月 5～8日：哺乳類グループ集会 (東京)。
10日：第 18 回野尻湖の日。
14日：専門別グループ発表会 (東京)。参加者 78 名。
15日：拡大運営委員会 (東京)。参加者 37 名。
18日：第 19 回野尻湖の日。
19日：野尻湖発掘展第 2 回準備会 (松本)。参加者 38 名 (信濃町関係者 18 名,
調査団 20 名)。
2月 1日：第 20 回野尻湖の日。野尻湖そくほう No. 8 発行。
4～5日：野尻湖発掘展実行委員会 (信濃町)。実行計画決定。
9日：第 21 回野尻湖の日。
10日：野尻湖ニュース号外その 3 発行。
15日：野尻湖発掘展パンフレット原稿完成，信濃町へ発送。
16日：第 22 回野尻湖の日。野尻湖発掘展製作部，急ピッチの追いこみにか
かる。
18日：第 23 回野尻湖の日。
22日：第四紀学会で野尻湖発掘報告 (東京・駒沢大学)。
23日：拡大運営委員会 (東京都立大学)。
25日：第 24 回野尻湖の日。
3月 2日：第 25 回野尻湖の日。
15～16日：信濃町の小・中学校でスライドによる普及講演会。
20日：野尻湖発掘展会場づくり予行演習。
22日：第 26 回野尻湖の日。
25～31日：野尻湖発掘展 (野尻公民館)，湖底地質調査 (3 月調査，2 本のト
レンチと試掘杭 2 ヵ所)。
4月 1日：野尻湖発掘展展示品松本へ輸送。
3日：拡大運営委員会の通知発送。
6日：第 27 回野尻湖の日。3 月調査のまとめ，野尻湖発掘展の反省。
13日：新日本出版「野尻湖人を求めて」(仮題)：のちに「象のいた湖」と決定,
1974 月 11 年出版) 拡大執筆者・編集者会議 (長野)。
14日：拡大運営委員会 (長野)。
4月25日：第 28 回野尻湖の日。地団研京都総会での野尻湖発掘展の準備，各係
の分担。
27日：展示品京都へ発送。
5月 2日：地団研総会会場 (京都大学) での展示品かざりつけ。
3 ：野尻湖発掘展(地団研総会会場・京都大学理学部)，6 日は京都地学教育
～ 6日 研究会と共催。
4日：地団研総会で特別講演。
7日：京都地学教育研究会総会で講演・スライド上映。
12日：京都から展示品とどく。
13日：第 29 回野尻湖の日。
21日：第 30 回野尻湖の日。信州大学学内展の準備，秋の地質調査の予定検
討。
25日：第 31 回野尻湖の日。野尻湖そくほう No. 9 発行。
28日：秋の地質調査地点 (仲町) の平板測量。
6月 1～3日：野尻湖発掘展，信州大学学内展。
8日：第 32 回野尻湖の日。野尻湖巡検資料の作製はじまる。
15～16日：野尻湖巡検，参加者 65 名。
21日：第 33 回野尻湖の日。
7月 6日：野尻湖そくほう No. 10 発行。
8日：第3 4 回野尻湖の日。
10日：第 35 回野尻湖の日。
15日：第 36 回野尻湖の日。
19日：野尻湖ニュース号外その 4 発行。
8月10～15日：専門別グループ集会 (野尻湖および松本)。
19日：野尻湖ニュース No. 6 発行。

野尻湖発掘調査団 井尻正二監修 (1975)『野尻湖の発掘 1962－1973』, 共立出版

第5次発掘出土品

「月と星」

野尻湖ナウマン象博物館提供

ナウマンゾウの牙（月）とヤベオオツノシカの掌状角（星）の化石が寄り添うような形で発見され、人為的に並べた可能性も考えられた。

左；二次加工のある骨製剥片　右；骨製基部加工剥片

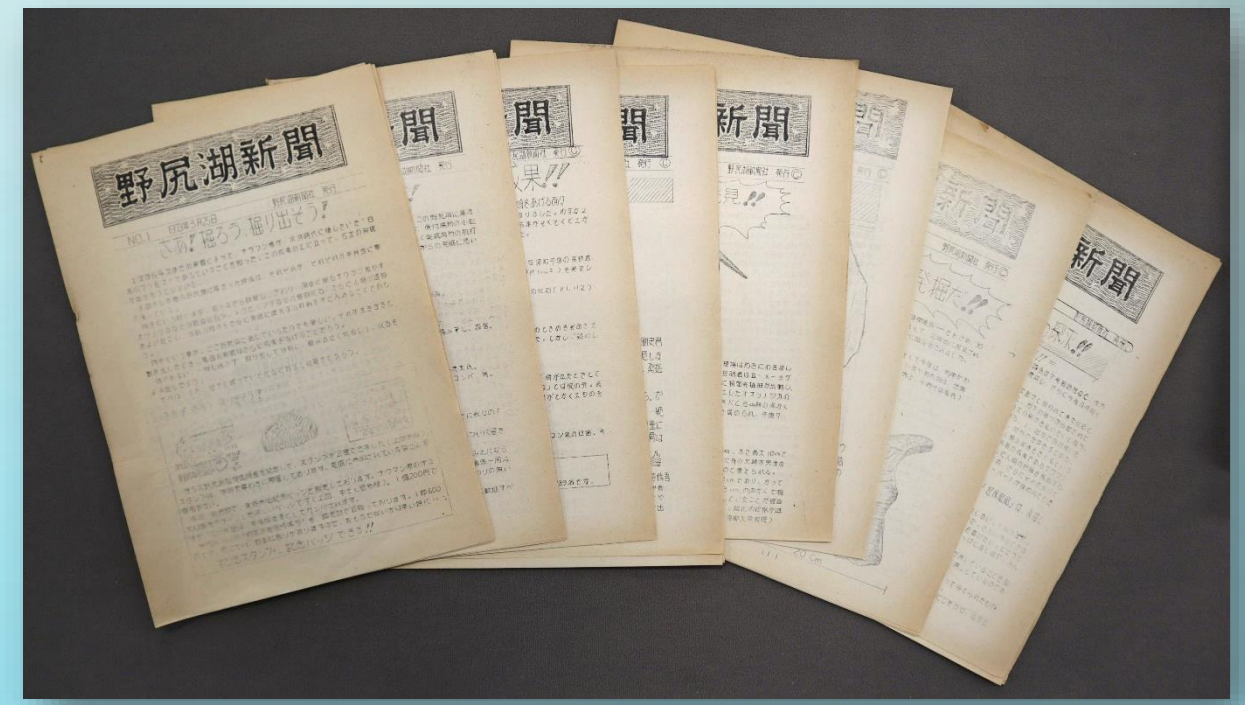
野尻湖人がナウマンゾウやヤベオオツノシカと同時代に生きていた可能性が高まった。

野尻湖発掘調査団　井尻正二監修（1975）『野尻湖の発掘　1962−1973』，共立出版，図版6.

展示資料 No.12　野尻湖新聞（第5次）

1973（昭和48）年3月

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵
（仁科良夫資料）



第5次発掘に際し発掘情報を共有するために発行。参加者や関係者に配布された。発掘開始前日のNo.1から終了のNo.8まで発行された。

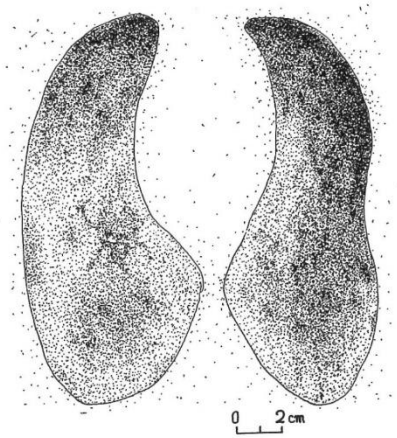
第6次発掘出土品

ヴィーナス像（?）

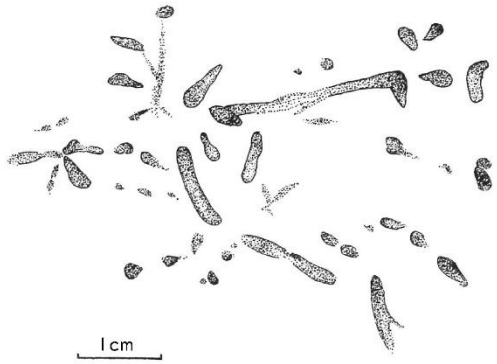
野尻湖ナウマン象博物館蔵

ナウマンゾウの牙の先端を加工した化石が発見され、その形から「ヴィーナス」ではないかと言われた。

生痕化石（オオツノシカ?の足跡）



生痕化石（水生昆虫の巣穴）

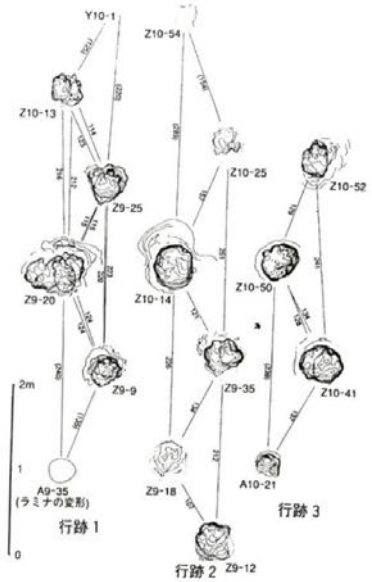


出典：野尻湖成婚グループ（1980）「野尻湖層の生痕化石と淡水生物の生痕」『地質学論集』第19号p203-214,図版Ⅰ・Ⅱ.

足跡や昆虫の巣穴などの生痕化石をラミナ掘りで発見

ナウマンゾウの足跡化石

蹄の形が残っている足跡化石



ナウマンゾウの足跡の並び（行跡）

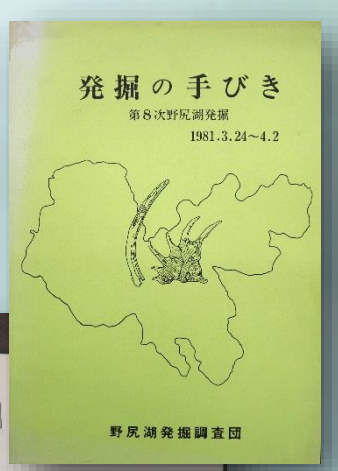
出典：野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』p56, p57.

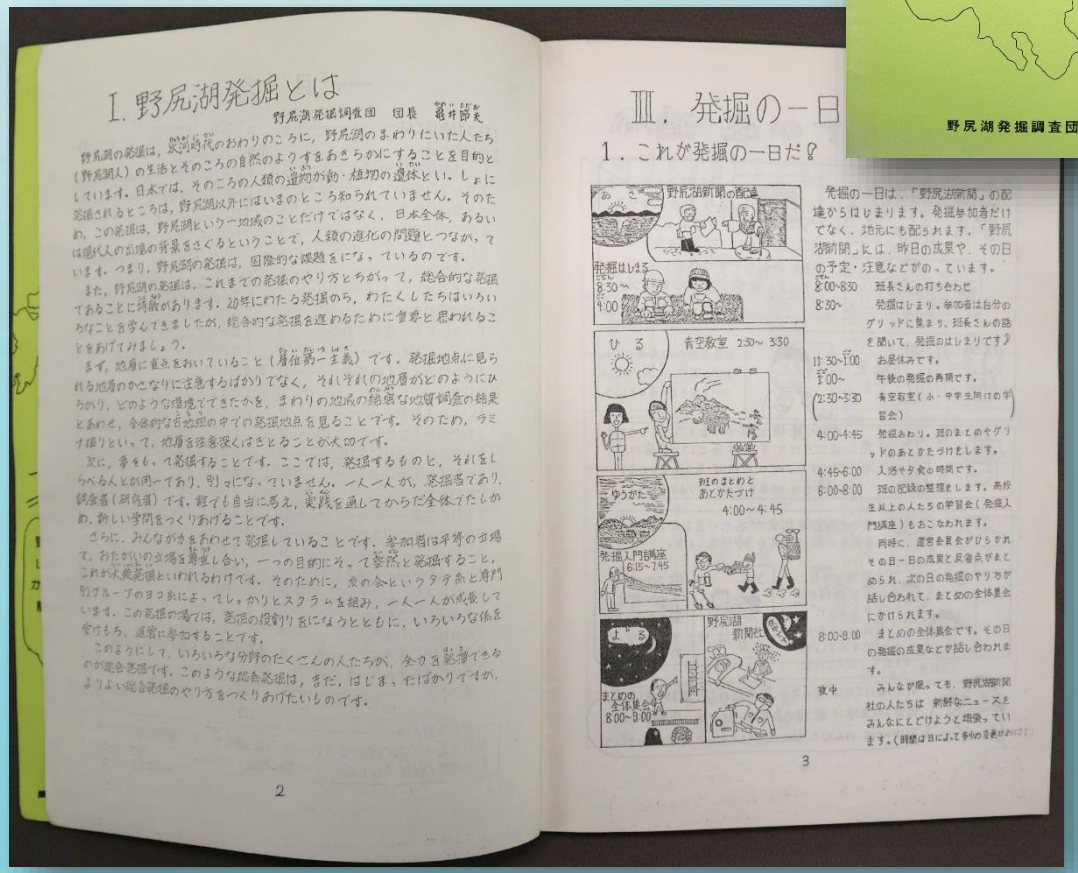
展示資料 No.13　発掘の手びき　第8次野尻湖発掘

1981（昭和56）年
野尻湖発掘調査団

信州大学 大学史資料センター　蔵

発掘の体制や手法が進展し、かつ参加者が増加したことから、野尻湖発掘全体を共有するための手引きがつくられた。





第8次発掘出土品

左：骨製スクレイパー
中央：骨製ナイフ
右：骨製尖頭器

野尻湖ナウマンゾウ博物館（2003）『ナウマンゾウの狩人をもとめて』, p29.

骨製の道具は、クリーヴァー、スクレイパー、ナイフ、尖頭器、剥片等が出土している。このうちスクレイパーはナウマンゾウのすねの骨を加工したもので、皮なめしの際の思号を掻き取るときに使われたと考えられている。

発掘手法の進展ーラミナ掘りの方法ー

ラミナ掘り

一枚の地層の中の砂つぶなどのならびにそって、うすくはぎとるように掘る掘り方。移植ごて、竹べらなどを使います。

▶メモノートを使って、ラミナ掘りをやってみましょう。

①一枚の地層をよく観察してみると砂つぶのならび（ラミナ）が、いく重にも重なっているようすが見えます。

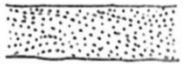
} 一枚の地層

②メモノートが一枚の地層だとすると、ノートの1ページ1ページがラミナの一枚一枚にあたります。

③ページをめくるように、ラミナをはがしていきます。

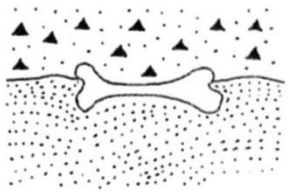
▷地層やラミナは、つねに平らだとは限りません。

曲がった地層



平らでないラミナ

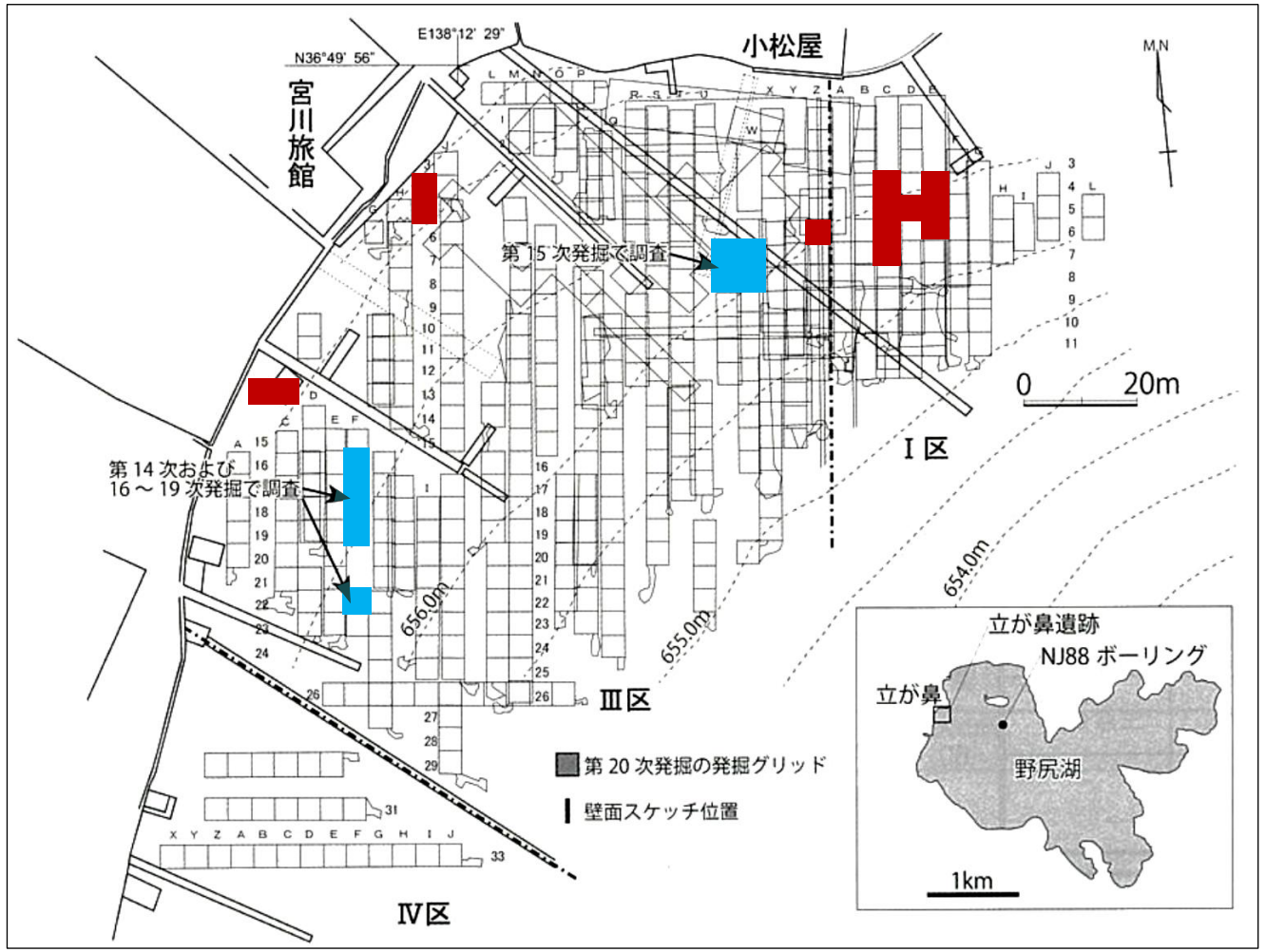
▷化石の入っている地層を決める時は、化石をふくむ地層の断面などを作り、ラミナとの関係もよく見ましょう。右の図の場合は、化石は下の地層に入っていることになります。

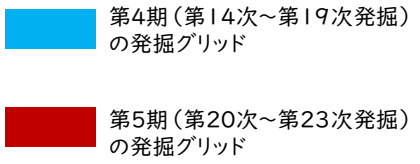


野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』, p20.

考古学の発掘調査は、人間活動により形成された文化層による発掘を行うが、野尻湖の自然堆積の環境把握のためにラミナ掘りの手法を用いて地質の違いを基に地層の調査が行われた。

中期目標と中期目標以降の調査





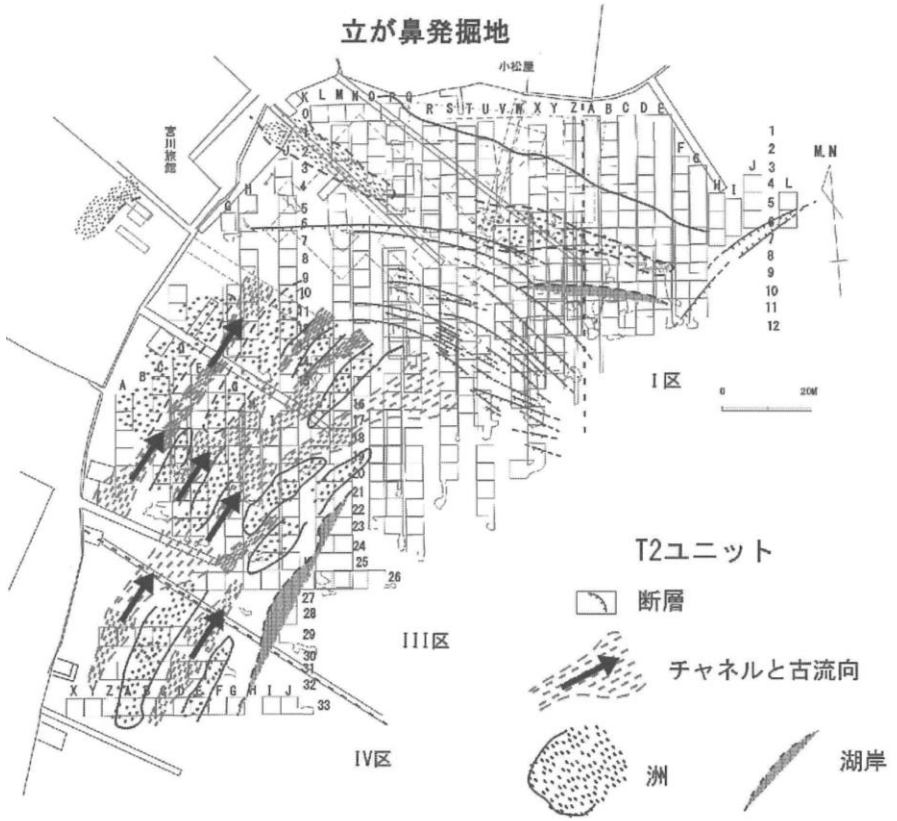
野尻湖地質グループ・野尻湖火山灰グループ（2016）「第20次野尻湖発掘の地質学的成果−野尻湖発掘地とその周辺の地質　その20−」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告書』第24号，p15.をもとに作成

中期目標

第4期（第14次～第19次発掘）：ナウマンゾウと人類の共存という仮説を証明するために長期的展望に基づいた調査が行われるようになった。第15次発掘後、Ⅲ区F列周辺のキルサイト（人為的な動物の解体場）の状況の調査に力を入れるようになった。

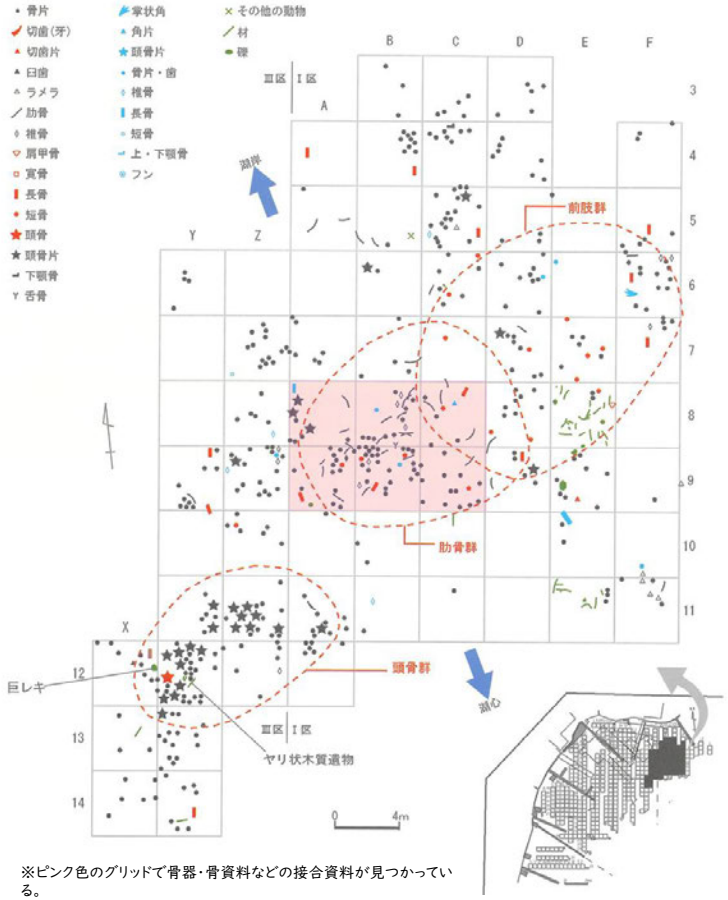
中期目標以降

第5期（第20次～第23次発掘）：氷河時代の野尻湖人とナウマンゾウ、ヤベオオツノシカとの関わりや、自然環境のようすを明らかにするために、これまでキルサイトの証拠がたくさん発見されてきたⅠ区での発掘が再開された。



立が鼻砂部層の古水系（流路）図　T2ユニット堆積

野尻湖地質グループ（2014）「第19次野尻湖発掘の地質学的成果とⅢ区F列周辺における立が鼻砂部層の堆積環境-野尻湖発掘地とその周辺の地質　その19-」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告書』第22号，p23.



※ピンク色のグリッドで骨器・骨資料などの接合資料が見つかっている。

立が鼻砂部層T4ユニットにおける化石と遺物の分布

野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて　野尻湖発掘50年記念誌』,p60.をもとに作成

中期目標でわかったこと

中期目標では、Ⅲ区F列の調査からキルサイトの証拠は十分な成果をあげられなかったが、野尻湖に流れ込む河川によって形成された地層の様子を詳しく知ることができた。

中期目標以降にⅠ区へ調査地区を再設定した理由

Ⅰ区は発掘調査を開始し、キルサイトの証拠が多く見つかった場所で、特に北東部にナウマンゾウの化石が、前肢群・肋骨群・頭骨群とほぼ1頭分見つかっていた。ナウマンゾウの骨をみると、解体したナウマンゾウの骨を加工して骨器をつくり、それでさらに解体を進めたようすもわかってきたことから、さらにキルサイトの証拠を調査する必要があった。

ナウマンゾウ解体のようす

金子三蔵　画

野尻湖ナウマンゾウ博物館　提供

金子三蔵氏は、旧石器人（野尻湖人）のナウマンゾウ狩りの様子を想像し、子供にも大人にもわかりやすく描いた。

ナウマンゾウ狩りのようす

金子三蔵　画

野尻湖ナウマンゾウ博物館　提供

展示案内図へ戻る

Ⅱ 野尻湖発掘と信州大学

発掘の歩み

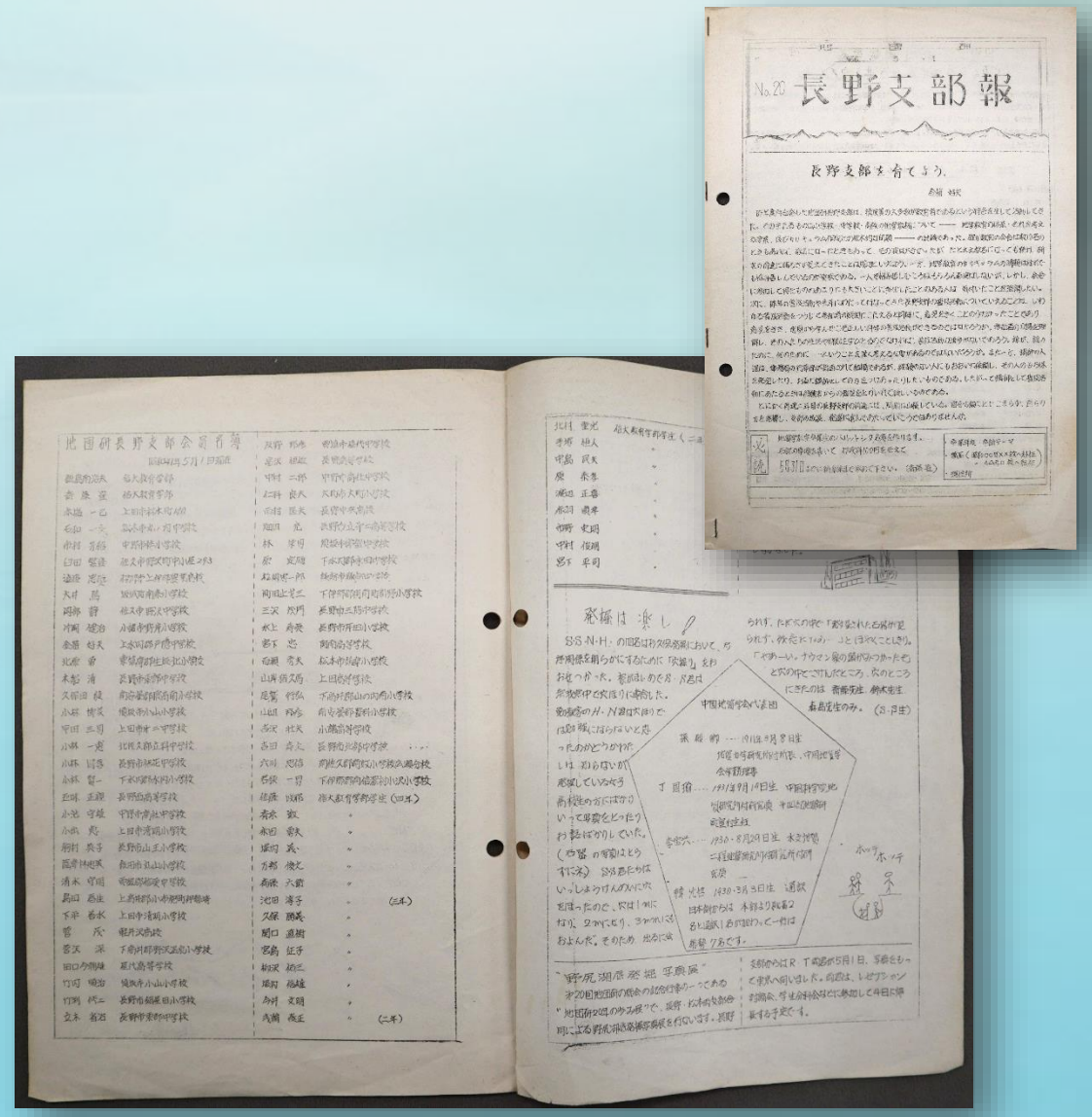
野尻湖発掘60年の歩みは、第1期から第5期に分けることができます。1962（昭和37）年から1965（昭和40）年の第1期では「まず実践」を合言葉に試行錯誤の調査が行われ、その後の調査の基本が据えられました。発掘調査を質的に変え、現在に続く調査体制ができたのが第2期の第5次調査で、これを契機に信州大学に事務局を置き、大勢の参加を得た発掘調査の体制が整えられました。その後は出土する様々な資料の情報を確実につかむための調査手法の深化によって、さらに新しい課題の設定と新事実の認識という好循環が生まれていきました。そして、2001（平成13）年、地元野尻湖ナウマンゾウ博物館に事務局が移転することで中期計画に基づく調査、成果の公表など、博物館を拠点とした持続可能な体制が整えられ、発掘開始100年を目指した調査が進められています。

展示資料 No.14　地団研　長野支部報　No.20

1966（昭和41）年5月1日
野尻湖発掘調査団

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵
（仁科良夫資料）

1965（昭和40）年の再結成を契機に発行された地学団体研究会長野支部の会報。掲載された会員名簿から、小中学校の教員と教育学部の学生が中心であったことがわかる。

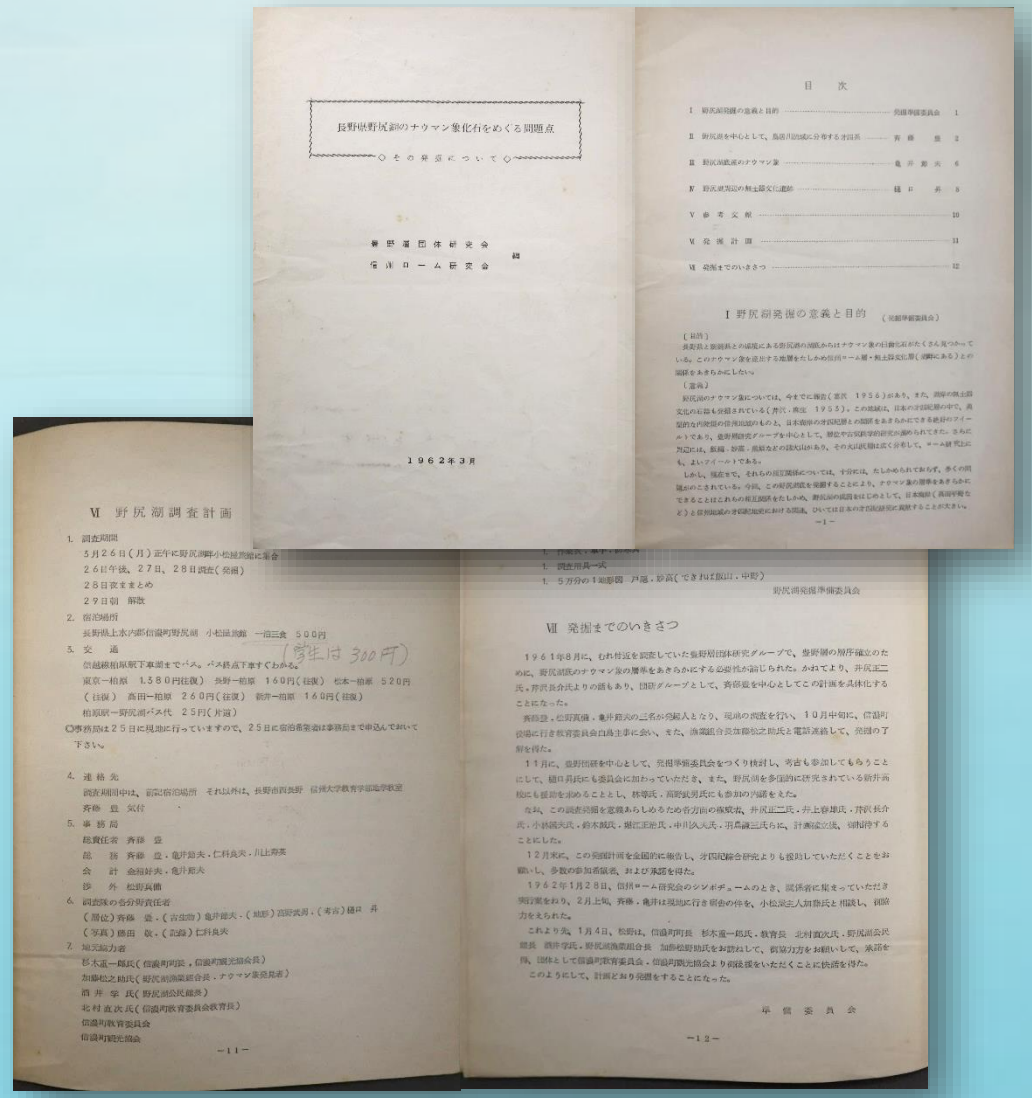


展示資料 No.15

『長野県野尻湖のナウマン象化石をめぐる問題点』

1962（昭和37）年3月
豊野層団体研究会・信州ローム研究会　編

野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵
（仁科良夫資料）



第1次発掘を支えた豊野層団体研究グループと信州ローム研究会が、発掘準備のために作成した冊子。発掘の意義と目的、地質、化石、考古の各分野からの問題提起、参考文献、発掘計画から構成されている。

展示資料 No.16

『掘って掘って また掘って
ーまんが野尻湖発掘ものがたりー』

1983（昭和58）年3月24日　第1刷発行
野尻湖発掘調査団

信州大学 大学史資料センター　蔵

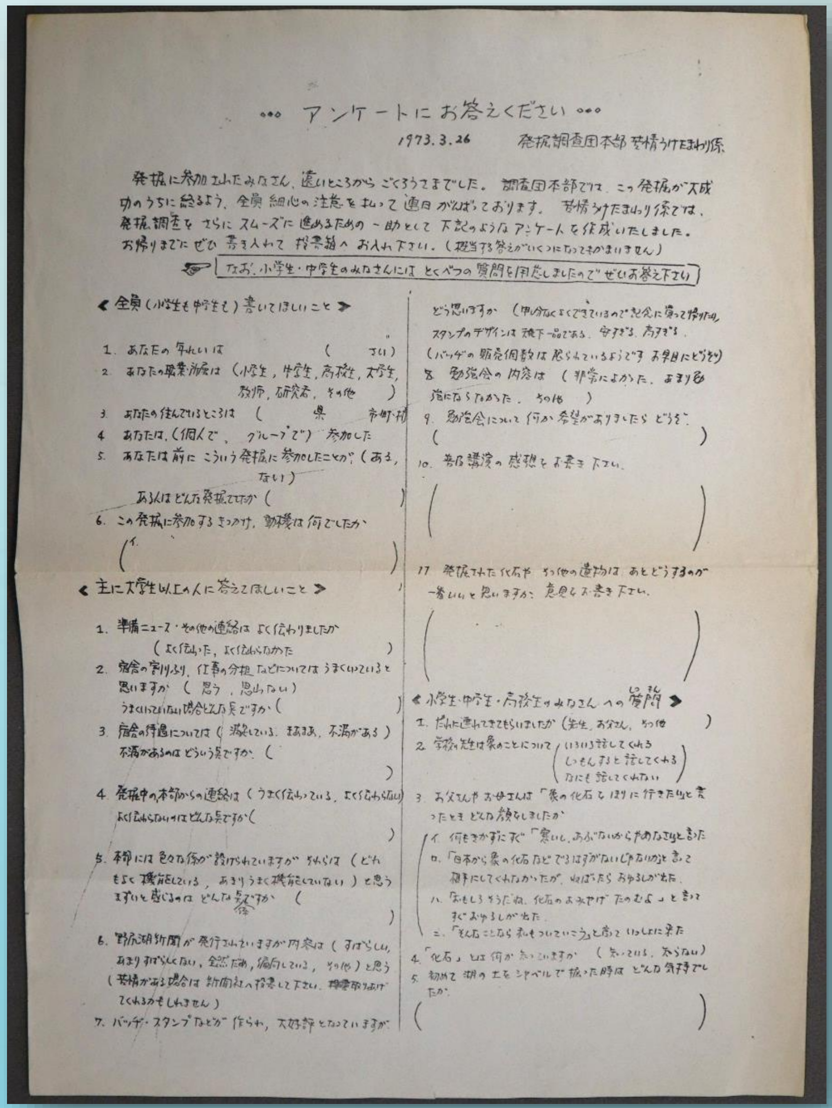
まんがによって野尻湖発掘をわかりやすく解説。各地の友の会が分担して執筆している。

展示資料 No.17　発掘アンケート

1973（昭和48）年3月26日
発掘調査団本部　苦情うけたまわり係

野尻湖ナウマンゾウ博物館
（仁科良夫資料）

発掘調査がスムーズに進められるよう、発掘調査団本部苦情うけたまわり係が小学生から大人までを対象に行ったアンケートの用紙。設問は全員、小中高生、大人に分けて作られている。



・・・ アンケートにお答えください ・・・

1973. 3. 26　発掘調査団本部 苦情うけたまわり係

発掘に参加されたみなさん、遠いところからごくろうさまでした。調査団本部では、この発掘が大成功のうちに終るよう、全員細心の注意をはらって連日がんばっております。苦情うけたまわり係では、発掘調査をさらにスムーズに進めるための一助として下記のようなアンケートを作成いたしました。お帰りまでにぜひ書き入れて投票箱へお入れ下さい。（該当する答えがいくつになってもかまいません）

なお、小学生・中学生のみなさんにはとくべつの質問を用意しましたのでぜひお答え下さい

≪全員（小学生も中学生も）書いてほしいこと≫

1. あなたの年れいは（　　さい）
2. あなたの職業・所属は（小学生，中学生，高校生，大学生，教師，研究者，その他　）
3. あなたの住んでいるところは（　県　市町村
4. あなたは（個人で，グループで）参加した
5. あなたは前にこういう発掘に参加したことが（ある，ない）
あるんはどんな発掘でしたか（　）
6. この発掘に参加するきっかけ，動機は何でしたか
（イ.　）

≪主に大学生以上の人に答えてほしいこと≫

1. 準備ニュース・その他の連絡はよく伝わりましたか
（よく伝わった，よく伝わらなかった　）
2. 宿舎の割りふり，仕事の分担などについてはうまくいっていると思いますか（思う，思わない）
うまくいっていない場合どんな点ですか（　）
3. 宿舎の待遇については（満足している，まあまあ，不満がある）
不満があるのはどういう点ですか（　）
4. 発掘中の本部からの連絡は（うまく伝わっている，よく伝わらない）
よく伝わらないのはどんな点ですか（　）
5. 本部には色々な係が設けられていますがそれらは（どれもよく機能している，あまりうまく機能していない）と思う
まずいと感じるのはどんな点（係）ですか（　）
6. 野尻湖新聞が発行されていますが内容は（すばらしい，あまりすばらしくない，全然だめ，偏向している，その他）と思う
（苦情がある場合は新聞社へ投書して下さい。取りあげてくれるかもしれません）
7. バッヂ・スタンプなどが作られ，大好評となっていますがどう思いますか（申し分なくよくできているので記念に買って帰ったり，スタンプのデザインは天下一品である，安すぎる，高すぎる，
（バッヂの販売個数は限られているようです お早目にどうぞ）
8. 勉強会の内容は（非常によかった，あまり勉強にならなかった，その他　）
9. 勉強会について何か希望がありましたらどうぞ
（　）
10. 普及講演の感想をお書き下さい。
（　）
11. 発掘された化石やその他の遺物はあとどうするのが一番いいと思いますか。意見をお書き下さい。
（　）

≪小学生・中学生・高校生のみなさんへの質問≫

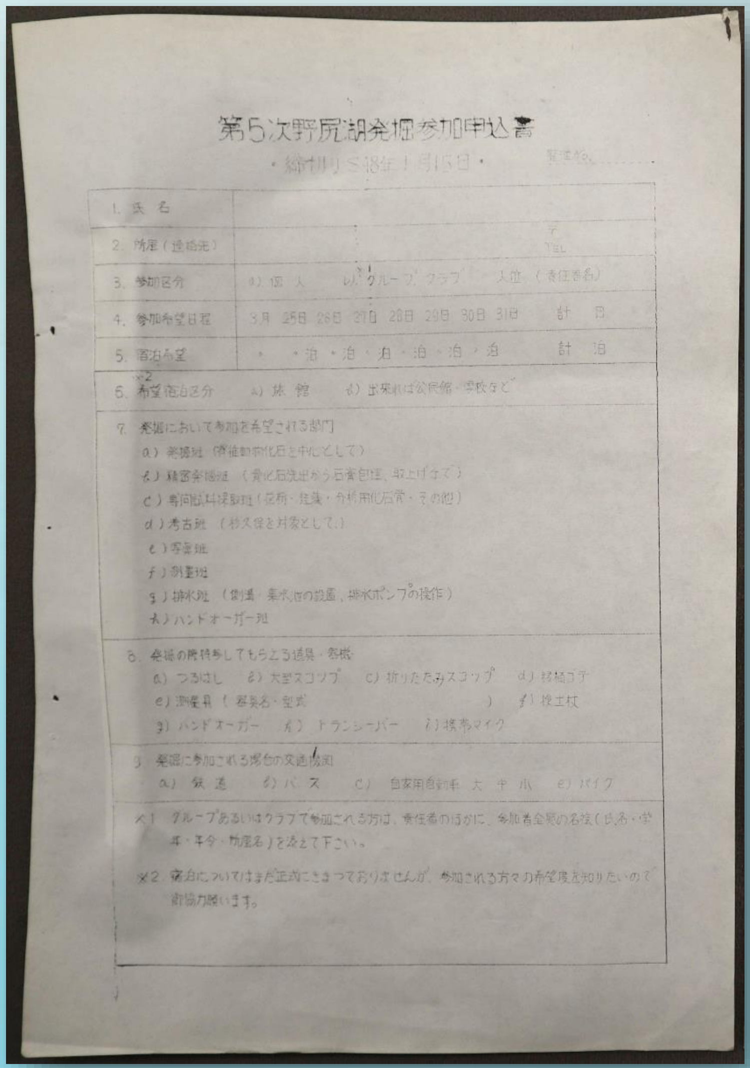
1. だれに連れてきてもらいましたか（先生，お父さん，その他　）
2. 学校の先生は象のことについて（いろいろ話してくれる，いっしょうけんめい話してくれる，なにも話してくれない）
3. お父さんやお母さんは「象の化石をほりに行きたい」と言ったときどんな顔をしましたか
（イ. 何もきかずにすぐ「寒いし，あぶないからやめなさい」と言った
ロ. 「日本から象の化石などでるはずがないじゃないか」と言って相手にしてくれなかったが，ねばったらおゆるしが出た
ハ. 「おもしろそうだね，化石のおみやげたのむよ」と言ってすぐおゆるしが出た
ニ. 「そんなことなら私もついていこう」と言っていっしょに来た）
4. 「化石」とは何か知っていますか（知っている，知らない）
5. 初めて湖の土をシャベルで掘った時はどんな気持でしたか。
（　）

展示資料 No.18　第5次野尻湖発掘参加申込書

1973（昭和48）年

野尻湖ナウマンゾウ博物館
（仁科良夫資料）

1973（昭和48）年1月15日締切の発掘参加申込書。


第5次野尻湖発掘参加申込書

・締切り S48年1月15日・　整理No.

1. 氏名

2. 所属（連絡先）　〒　TEL

3. 参加区分　a）個人　b）※1グループ、クラブ　人位（責任者名）

4. 参加希望日程　3月 25日 26日 27日 28日 29日 30日 31日　計　日

5. 宿泊希望　・泊・泊・泊・泊・泊・泊　計　泊

6. ※2 希望宿泊区分　a）旅館　b）出来れば公民館・学校など

7. 発掘において参加を希望される部門

a）発掘班（脊椎動物化石を中心として）

b）精密発掘班（骨化石洗出から石膏包埋、取上げまで）

c）専門試料採取班（花粉・珪藻・分析用化石骨・その他）

d）考古班（杉久保を対象として）

e）写真班

f）測量班

g）排水班（側溝・集水池の設置、排水ポンプの操作）

h）ハンドオーガー班

8. 発掘の際持参してもらえる道具・器機

a）つるはし　b）大型スコップ　c）折りたたみスコップ　d）移植コテ

e）測量具（器具名・型式　）　f）検土杖

g）ハンドオーガー　h）トランシーバー　i）携帯マイク

9. 発掘に参加される場合の交通機関

a）鉄道　b）バス　c）自家用自動車　大　中　小　e）バイク

※1 グループあるいはクラブで参加される方は、責任者のほかに、参加者全員の名簿（氏名・学年・年令・所属名）を添えて下さい。

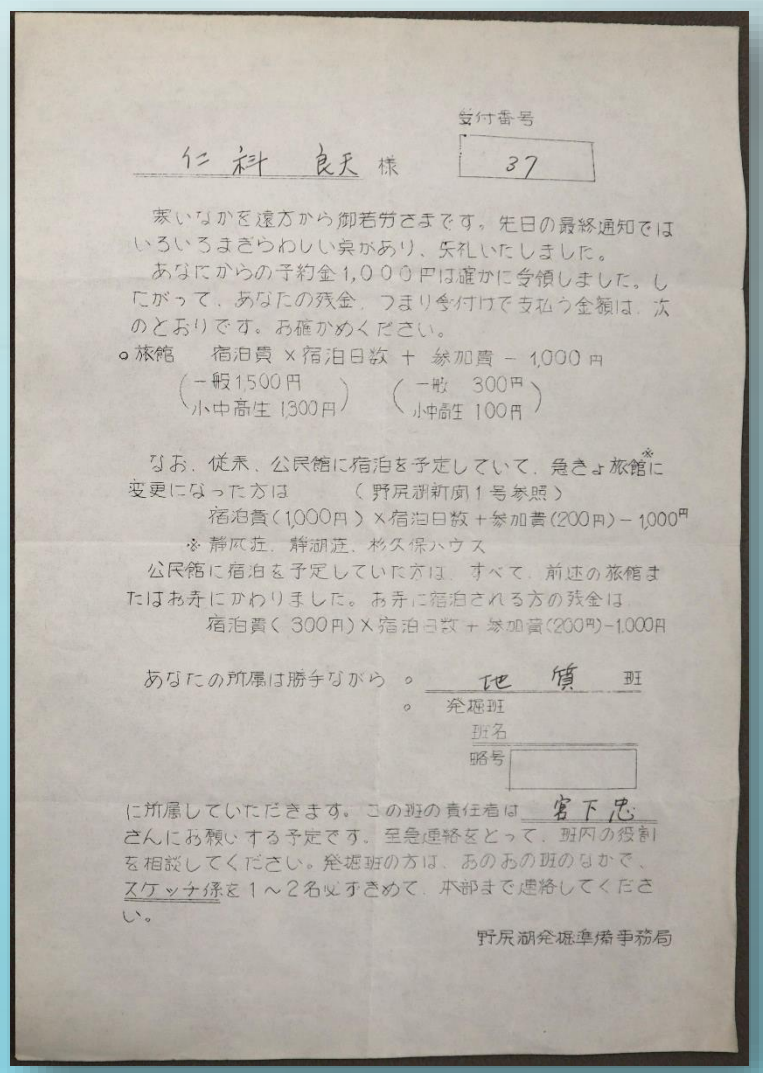
※2 宿泊についてはまだ正式にきまっておりませんが、参加される方々の希望度を知りたいので御協力願います。

展示資料 No.19　仁科良夫様　受付番号37（第5次発掘参加受付通知）

1973（昭和48）年

野尻湖ナウマンゾウ博物館
（仁科良夫資料）

発掘調査参加の受付番号、必要経費、所属する班名、班の責任者名を知らせている。



受付番号

仁科　良夫 様　37

寒いなかを遠方から御苦労さまです。先日の最終通知ではいろいろまぎらわしい点があり、失礼いたしました。

あなたからの予約金1,000円は確かに受領しました。したがって、あなたの残金、つまり受付けで支払う金額は、次のとおりです。お確かめください。

○旅館　宿泊費×宿泊日数＋参加費－1,000円
（一般1,500円 小中高生1,300円）　（一般300円 小中学生100円）

なお、従来、公民館に宿泊を予定していて、急きょ旅館※に変更になった方は　（野尻湖新聞1号参照）
宿泊費（1,000円）×宿泊日数＋参加費（200円）－1,000円
※静水荘、静湖荘、杉久保ハウス

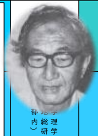
公民館に宿泊を予定していた方は、すべて、前述の旅館またはお寺にかわりました。お寺に宿泊される方の残金は
宿泊費（300円）×宿泊日数＋参加費（200円）－1,000円

あなたの所属は勝手ながら　○地質　班
○発掘班
班名
暗号

に所属していただきます。この班の責任者は宮下忠さんにお願いする予定です。至急連絡をとって、班内の役割を相談してください。発掘班の方は、あのあの班のなかで、スケッチ係を1～2名必ずきめて、本部まで連絡してください。

野尻湖発掘準備事務局

野尻湖発掘年表



調査次	西暦	和暦	団長	事務局	参加者数（人）（のべ人数）	特徴的な出土品・調査など	発掘品数	主な出来事
	1948	昭和23				ナウマンゾウの臼歯		加藤松之助（小松屋旅館主人）がナウマンゾウの臼歯を発見
	1953	昭和28						芹沢長介・麻生優が野尻湖底発見の無土器時代の石器とともに、ナウマンゾウの臼歯の発見を紹介する。それぞれの出土層位の検討の必要性を指摘
	1954	昭和29						富沢恒雄がナウマンゾウの臼歯化石を学術雑誌に紹介する。
	1961	昭和36						8月「まずは掘ってみよう」井尻正二が提案する。 11月 発掘準備委員会発足（斉藤豊・松野真備・亀井節夫発起人）
第1次発掘	1962	昭和37	鈴木誠	斉藤豊（信州大学教育学部野尻層団体研究グループ）	70	ナウマンゾウ、ヤベオオツノシカの化石を発見 野尻湖層の命名	20	1辺8mの区画を発掘（1948年10月加藤松之助がはじめて臼歯を発見したといわれる地点を中心に） 最終日夜のまとめの会にて、調査団と信濃町教育委員会ら地元関係者との間に次の事項が確認された。「発掘された化石などの学術資料は、公表後は信濃町の財産とし、また、後世における研究者の便宜のために、さらに、野尻湖を訪れる人たちに郷土の歴史を知ってもらうために、十分な保管施設のもとに、現地に保存すること」信濃町公民館報「しなの」（1962年6月5日付）に亀井記で明記
第2次発掘	1963	昭和38		野尻層団体研究グループ（代表…）	150	放射性年代の測定と花粉分析によるウルム氷期の確認 ナウマンゾウやオオツノシカの化石骨を、狭い地域から多数掘り出し、南方系のナウマンゾウと北方系のオオツノシカが共存していたことを明らかにした。	70	
第3次発掘	1964	昭和39	鈴木誠	野尻層団体研究グループ（代表・斉藤豊）	200	最初の旧石器剥片の発見 まがった牙と毛におおわれたナウマンゾウの復元	77	最終日まとめの会にて、調査団の組織を各団体研究会の共催から一本化し、「野尻湖底発掘研究グループ」が今後の研究を進めていくことに決定
第4次発掘	1965	昭和40	鈴木誠	野尻…（代表…）	400	ナウマンゾウの頭骨の一部、8.5メートルの材木化石の発見	315	解散式席上で、調査団は「第1次～第4次発掘の多量の資料の整理の為に、発掘調査はしばらく休む」ことを宣言 発掘資料の研究と採集資料はそれぞれの研究分担者に配分 「氷河時代の日本」展（読売新聞社・野尻湖総合発掘調査団の共催） 8月12日～18日 東京新宿伊勢丹デパートにて開催 8月20日～24日 大阪梅田阪神デパートにて開催 9月2日～8日 諏訪市の丸光デパートにて開催 野尻湖新聞発行
	1966	昭和41						発掘資料整理のため発掘休止 信州大学文理学部の改組により、人文学部及び理学部が設置され、理学部に地質学科地質学教室が設置された。
	1967-1970	昭和42-45						亀井節夫や井尻正二らによって、野尻湖発掘の報告や普及が行われた。
	1971	昭和46						10月 第四紀総合研究会（代表・新潟大学教育学部、歌代勤）の「海岸平野の形成過程」に関する研究成果を引継ぎ、「内陸盆地の第四系」に関する総合研究（代表・信州大学理学部、郷原保真）を実施することに決定 第4次発掘までの成果と経験を集約し、第5次発掘の準備期間を約1年半見込み、第5次発掘までの期間を1973年3月として全国に呼び掛けることにした。
	1972	昭和47		信州大学理学部地質学教室・内陸盆地総研事務局（信州大学理学部内）		3月 予備調査 9月 地質巡検		3月 野尻湖に有志が集まり準備委員会を結成 夜の打ち合わせ会にて、第4次発掘までの記録と記憶を頼りに、発掘の方法などを相談。野尻湖の水位などの情報交換。最後に、発掘品の処理の問題について、第4次発掘までの地元信濃町との約束である「研究が終わったら化石類は地元に返す」ことを再確認した。 4月 第四紀総研地域センター代表者会議（日本地質学会総会会場）で、正式に準備事務局が発足 5月 野尻湖発掘再開が全国によびかけられた。
第5次発掘	1973	昭和48	鈴木誠 郷原保真	信州大学理学部地質学教室・内陸盆地総研事務局（信州大学理学部内）	1107（2743）	「月と星」、ナイフ形石器、骨器の発見	1402	5月21日 第1回野尻湖の日。毎週土曜日の午後を「野尻湖の日（調査団の定例事務局会議の愛称）」として、週一でまとめの作業などを進めていくことが事務局で決定 6月23日～25日 信州大学学内展示会開催（理学部） 専門グループの発足 臨時拡大運営委員会を開催し、運営委員会を恒常的なものにすることを確認（教育学部・長野市）
	1974	昭和49		信州大学理学部地質学教室・内陸盆地総研事務局（信州大学理学部内）		3月 湖底地質調査		野尻湖発掘展 3月25日～31日（野尻公民館） 地元信濃町との共催。観覧者総数4680名 5月3日～6日（地団研総会会場・京都大学理学部） 6日は京都地学教育研究会と共催 6月1日～3日 信州大学学内展
第6次発掘	1975	昭和50		信州大学理学部地質学教室（相談役・斉藤豊）	3672（10360）	ヴィーナス像（?）、生痕化石の発見。ラミナ掘りはじまる。	10154	野尻湖友の会発足 野尻湖発掘の指導者井尻正二は、第6次発掘に先立って目的意識を持ち、見通しと指導性のある発掘でなければならないと宣言し、その方法論と発掘調査の計画を提示した。これ以後明確なビジョンに基づく発掘調査が進められるようになった。
	1976	昭和51	大森昌衛	信州大学理学部地質学教室	377	第1回陸上発掘 ナイフ形石器と乾痕の発見	1217	
	1977	昭和52	大森昌衛	信州大学理学部地質学教室				第1回野尻湖発掘まつり開催（1995年の第8回まで続く）
第7次発掘	1978	昭和53	大森昌衛	信州大学理学部地質学教室	2897（11548）	ナウマンゾウ頭骨、ハタネズミ臼歯、昆虫化石の発見	8174	友の会単位での発掘参加
	1979	昭和54	亀井節…	信州大学理学部地質学教室	327	第2回陸上発掘 土壙、爪形文土器、台形ナイフの発見 黒姫駅でナウマンゾウの牙を発見	1868	
第8次発掘	1981	昭和56		信州大学理学部地質学教室	2897（11277）	2.4メートルの牙、ヤリ状木質遺物の発見 日本最古の骨器（骨製スクレイパー）の発見	8384	
	1982	昭和57	亀井節夫	信州大学理学部地質学教室	344	第3回陸上発掘 約2万年前の湖岸線の発掘。隆線文土器の発見	2261	
第9次発掘	1984	昭和59		信州大学理学部地質学教室	2377（11212）	キルサイト確認、スパイラル剥片、糞石（?）発見	8429	7月 野尻湖博物館開館
	1985	昭和60	野村哲	信州大学理学部地質学教室	358	第4回陸上発掘 細石器文化の確認	3417	
第10次発掘	1987	昭和62		信州大学理学部地質学教室	1969（9260）	骨製クリーヴァー（ナタ状骨器）の発見 大型偶蹄類（オオツノジカ）の足跡化石確認	7872	
	1988		野村…	信州大学理学部地質学教室	335	第5回陸上発掘 旧石器時代の礫群、配石遺構を発見	3387	
第11次発掘	1990	平成2		信州大学理学部地質学教室	1672（6831）	ナウマンゾウの足跡化石の認定 ニホンジカ、スパイラル剥片などを発見	5568	
	1991		野村哲	信州大学理学部地質学教室	298	第6回陸上発掘 仲町丘陵で後期旧石器時代の遺物を発見	4415	
第12次発掘	1993	平成5	酒井潤一	信州大学理学部地質学教室	1498（6100）	線状痕（解体痕?）のあるナウマンゾウの肋骨の発見	4033	
	1994	平成6		信州大学理学部地質学教室	243	第7回陸上発掘 仲町遺跡で後期旧石器時代の石器を多数発見	1152	
	1996	平成8		信州大学理学部地質学教室				2月 野尻湖ナウマンゾウ博物館に改称
第13次発掘	1997	平成9		信州大学理学部地質学教室	855（3404）	たたき石、ナウマンゾウ上腕骨の発見	2485	
	1998	平成10	酒井潤一	信州大学理学部地質学教室	186	第8回陸上発掘 仲町丘陵で後期旧石器時代の石器を発見	1008	
第14次発掘	2000	平成12		信州大学理学部地質学教室	573（2580）	化石の産状を詳しく観察する調査法をはじめる。 ナウマンゾウの左右そろった臼歯の発見	1998	
	2001	平成13		野尻湖ナウマンゾウ博物館				発掘調査団事務局が野尻湖ナウマンゾウ博物館へ移る。
第15次発掘	2003	平成15	熊井久雄	野尻湖ナウマンゾウ博物館	482（2118）	昔のなぎさの場所を発見	2274	中期目標Ⅰの設定（野尻湖のキルサイトの様子を明らかにする）
第16次発掘	2006	平成18	赤羽貞幸	野尻湖ナウマンゾウ博物館	304（1285）	ニホンジカの足跡化石の発見	800	3年サイクルから2年サイクルの発掘へ
第17次発掘	2008	平成20		野尻湖ナウマンゾウ博物館	245（1007）	ヘラジカの化石や哺乳類の足跡化石の発見	732	
第18次発掘	2010	平成22	赤…	野尻湖ナウマンゾウ博物館	193（1002）	ナウマンゾウの切歯の発見。堆積環境の解明	514	学生参加者への宿泊費補助（支援する有志の会）
	2021	平成23		野尻湖ナウマンゾウ博物館				野尻湖発掘50周年を記念して、『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』を発行
第19次発掘	2012	平成24	赤羽貞幸	野尻湖ナウマンゾウ博物館	223（964）	ナウマンゾウの臼歯、剥片の発見	706	
第20次発掘	2014	平成26	赤羽貞幸	野尻湖ナウマンゾウ博物館	192（830）	ナウマンゾウの肋骨や脛骨の発見	752	中期目標Ⅱの設定（Ⅰ区での発掘に挑戦・キルサイトの状況証拠をつかむ） 氷河時代たんけん隊はじまる
第21次発掘	2016	平成28	赤羽貞幸	野尻湖ナウマンゾウ博物館	205（801）	ヤベオオツノシカの上腕骨片の発見	648	
第22次発掘	2018	平成30	笹川一郎	野尻湖ナウマンゾウ博物館	156	ナウマンゾウの臼歯、肋骨群の発見	441	
	2020	令和2		野尻湖ナウマンゾウ博物館		新型コロナウイルスのため発掘延期		
	2021	令和3		野尻湖ナウマンゾウ博物館		新型コロナウイルスのため発掘延期		
	2022	令和4		野尻湖ナウマンゾウ博物館		新型コロナウイルスのため発掘延期		12月 60周年記念シンポジウムを開催
第23次発掘	2023	令和5	笹川一郎	野尻湖ナウマンゾウ博物館	210		688	
	・・・							
発掘100周年	2062							

のべ人数 86,000人

総点数 85,000点

※このほか、野尻湖発掘調査団は野尻湖ナウマンゾウ博物館といっしょに「氷河時代」、「野尻湖」などのキーワードで、野尻湖やその周辺の地層や自然を観察する学習会を行っている。

鈴木誠 1951～1972年度 信州大学医学部在任

斎藤豊 1951～1989年度 信州大学教育学部在任

郷原保真 1964～1965年度 信州大学文理学部在任 1966～1982年度 信州大学理学部在任

亀井節夫 1950～1962年度 信州大学文理学部在任 1988～1990年度 信州大学理学部在任

野村哲 1957年度 信州大学文理学部卒

酒井潤一 1960年度 信州大学理学部卒 1967～2001年度 信州大学理学部在任

熊井久雄 1971～1988年度 信州大学理学部在任

赤羽貞幸 1973年度～ 信州大学教育学部在任

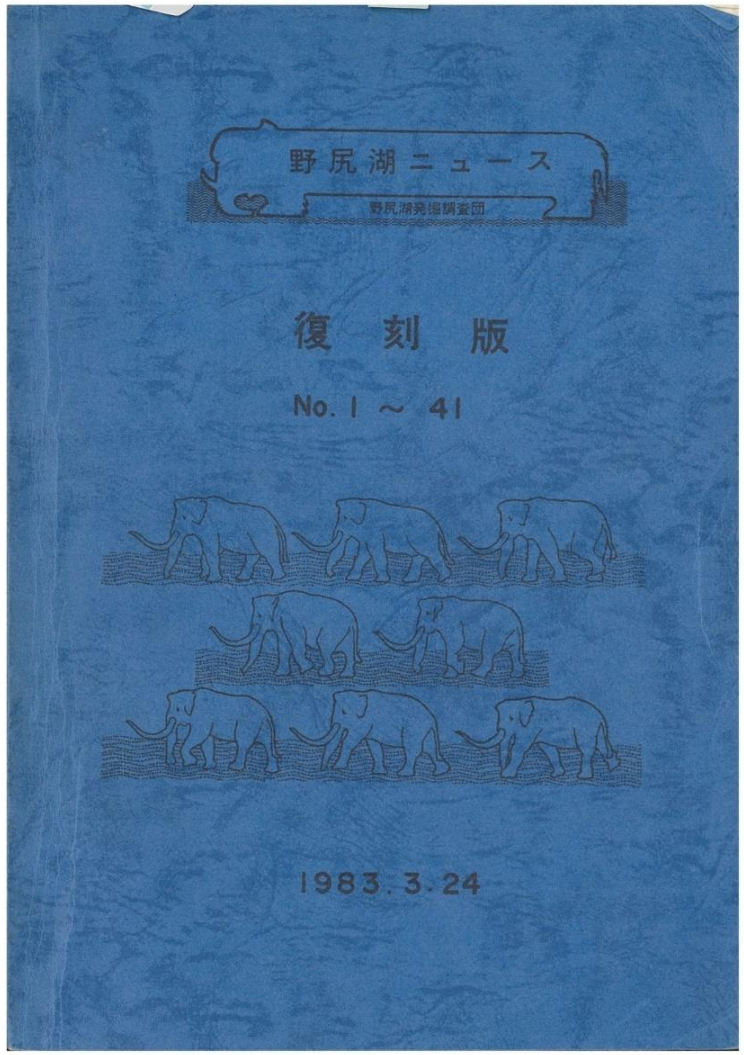
近藤洋一 2001年度 信州大学大学院理学研究科地質学専攻博士課程修了

区分

- 第1期：ナウマンゾウ臼歯化石の出土層位の究明を目的に始まった調査から、同時代の人類活動の確認へと課題を広げた。
- 第2期：友の会と専門グループを縦と横の組織とする活動スタイルを確立。小学生から大人まで参加の大規模発掘が実現
- 第3期：発掘調査の課題の明確化に伴って発掘手法の進展が進んだ。
- 第4期：化石の産状確認法の確立、地層や化石の堆積環境の解明が進んだ。
- 第5期：キルサイトの状況証拠の発見に集中して取り組んでいる。

野尻湖発掘調査団 井尻正二監修（1975）『野尻湖の発掘 1962-1973』，共立出版.
野尻湖発掘調査団（1975）「ナウマン象と野尻湖人 第6次野尻湖発掘の記録」『野尻湖発掘に託す夢』「国土と教育」臨時増刊35号，p70-78.
斎藤豊先生退職記念事業会（1990）『旋風65年 信州大学退職記念誌』
野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』
野尻湖発掘調査団（2018）『野尻湖のナウマンゾウー市民参加でさぐる氷河時代ー』，新日本出版.
信州大学文理学部同窓会（1999）『信州大学文理学部同窓会報 母校開学五十周年記念特集号』第27号，p.22.
地質学会「2016年度名誉会員 熊井久雄」，https://geosociety.jp/outline/content0176.html
赤羽貞幸（2022）「野尻湖発掘60年の歩みと野尻湖方式」『野尻湖発掘 60周年記念シンポジウム』，p5.

「野尻湖ニュース」



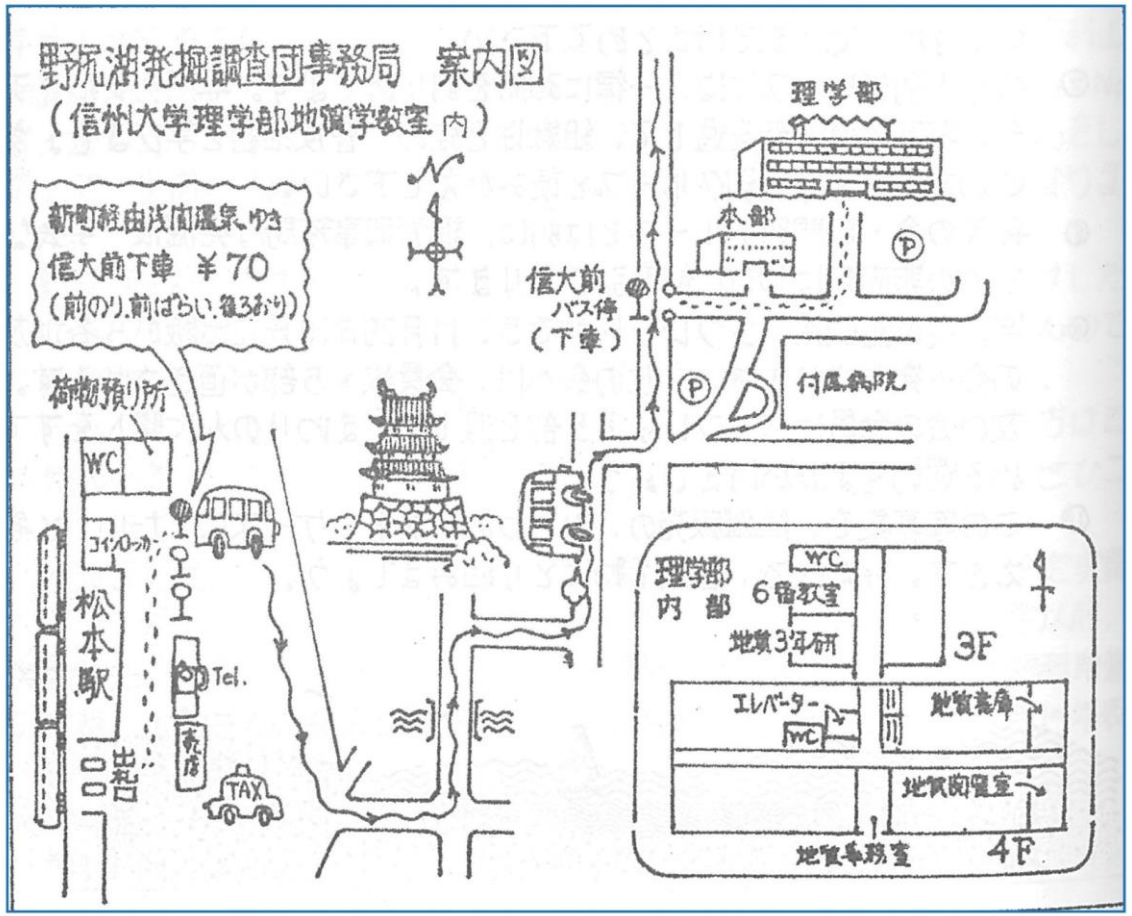
野尻湖発掘調査団 (1983)『野尻湖ニュース』復刻版 No.1 ～ 41．
酒井　潤一氏　蔵

野尻湖発掘調査団が発行している機関紙

	発行回数	発行部数	発行する係	配布先
野尻湖ニュース	年三回	五〇〇〇部	事務局友の会係	友の会全会員
事務局ニュース	二か月に三回	三三〇部	事務局総務係	運営委員 各友の会事務局員
専Gニュース	月一回	三三〇部	事務局専門グループ係	運営委員 各友の会事務局員
散在会員ニュース	年二回	一五〇部	事務局友の会係	散在会員
野尻湖新聞	発掘・発掘まつりのとき日刊	四〇〇〇部	野尻湖新聞社	発掘参加者 地元野尻区（三〇〇部） カンパを下さった方
運営係ニュース	発掘のとき日刊	一五〇部	運営係	係長・班長

右記以外に、各友の会、専門グループごとに機関紙が発行されている。

野尻湖発掘調査団（1986）『一万人の野尻湖発掘』築地書館，p148.



野尻湖発掘調査団（1975）『野尻湖ニュース』復刻版 No.9，p12.

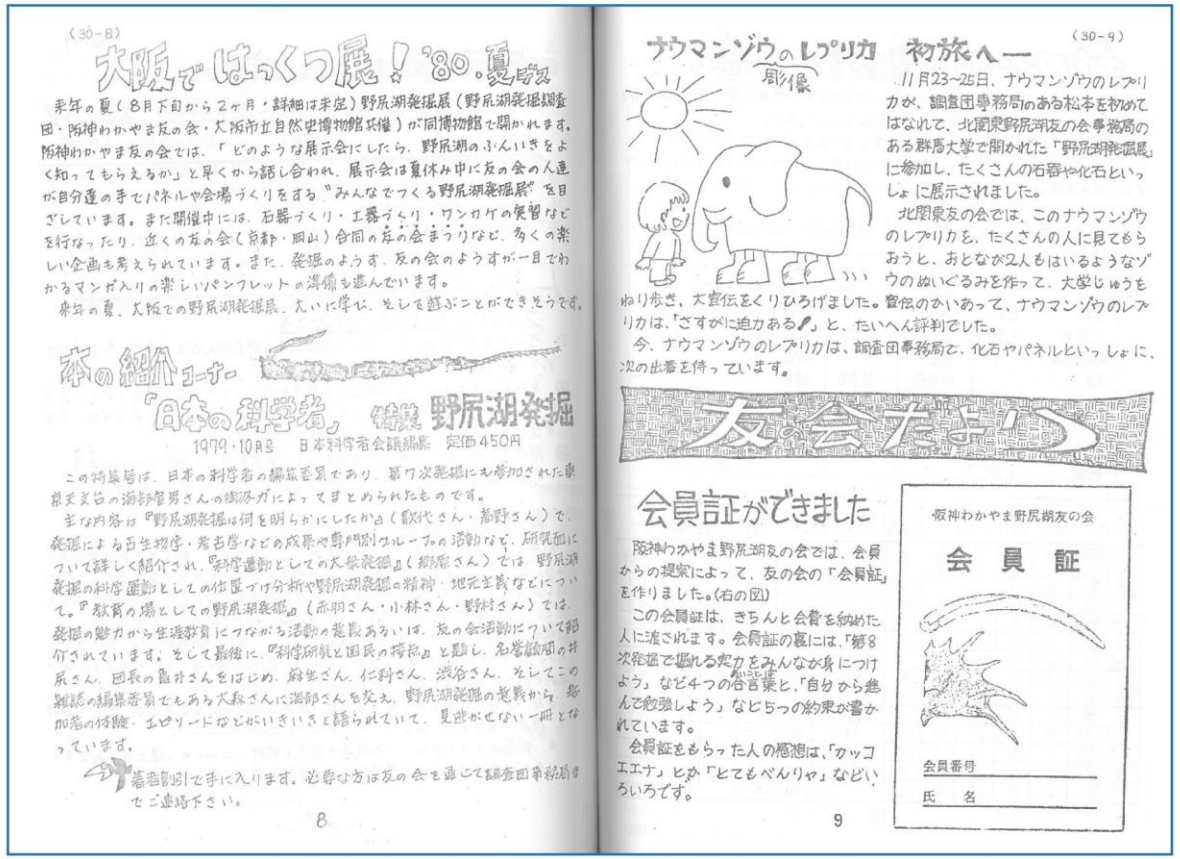
（10-3）

新しい事務局体制　（○印：責任者，アイウエオ順）

（※各係には，後ほど数名追加される予定です。）

□ 事務局長：郷原保真
□ 相談役：斉藤豊，白瀬寛一
□ 庶務（責任者：酒井潤一，宮下忠）
　○会計係：飯島ゆり子，酒井潤一
　○資料（出版物）係：中島豊志，白壁，田中玲子，仁科良夫，宮下忠
　○公式文書・記録・手紙係：趙哲済，岡部孝次
　○野尻湖の日係：角谷邦明，須藤宏，林田守生，柳沢文孝
　○販売（書籍）係：井上喜嗣，望月康年
　○資材係：近藤洋一，清水湧一，山田正三
□ 友の会（責任者：熊井久雄，新海正博）
　○会員係：中西一裕，大橋宏之，長津聡，原洋之
　○行事・普及係：松本俊幸，古條正行，堀野敏昭，茂原高，山越正義
　○野尻湖ニュース入係：田崎正和，新井健司，伊藤孝，狩谷康，菅野匡
　　隅田耕治，藤田敬，安井敏夫，吉田充夫
　○資料（機関紙・誌）係：内田克，新海正博，関口尚志
□ 専門別グループ（責任者：赤羽貞幸，小坂共栄）
　○試料係：柳沢文孝，赤羽貞幸，斉藤尚人，沢村寛，中村由克
　○写真係：山本裕之，中島豊志，森本興
　○資料（機関紙・誌）係：斉藤義則，小坂共栄
　○各グループ担当（10グループ）
　　花粉：隅田耕治　　貝類：井上喜嗣　　珪藻：長津聡
　　古地磁気：菅野匡　　地質：山本裕之　　大型植物遺体：趙哲済
　　火山灰：近藤洋一　　生痕：斉藤尚人
　　哺乳類：松本俊幸　　人類考古：望月康年
□ コンパ係（上記3グループのどれかと兼任）
□ 古地理学習グループ（世話人：赤羽貞幸，熊井久雄，沢村寛）

野尻湖発掘調査団（1975）『野尻湖ニュース』復刻版 No.10，p3.



(30-8)

大阪ではっくつ展！'80夏

来年の夏（8月下旬から2ヶ月・詳細は未定）野尻湖発掘調査団・阪神わかやま友の会・大阪市立自然史博物館共催）が同博物館で開かれます。阪神わかやま友の会では、「どのような展示会にしたら、野尻湖のふしぎをよく知ってもらえるか」と早くから話し合われ、展示会は夏休み中に友の会の人達が自分達の手でパネルや会場づくりをする"みんなでつくる野尻湖発掘展"を目ざしています。また開催中には、石器づくり・土器づくり・ワンカゲの実習などを行なったり、近くの友の会（京都・胆山）合同の友の会まつりなど、多くの楽しい企画も考えられています。また、発掘のようす、友の会のようすが一目でわかるマンガ入りの楽しいパンフレットの準備も進んでいます。

来年の夏、大阪での野尻湖発掘展、たいに学び、そして遊ぶことができそうです。

本の紹介コーナー

「日本の科学者」特集 野尻湖発掘

1979・10月号　日本科学者会議編集　定価450円

この特集号は、日本の科学者の編集委員であり、第7次発掘にも参加された東京天文台の海部宣男さんの編集ガによってまとめられたものです。

主な内容は『野尻湖発掘は何を明らかにしたか』（藪内さん・鈴野さん）で、発掘による古生物学・考古学などの成果や専門別グループの活動など、研究面について詳しく紹介され、『科学運動としての大発掘展』（堀尾さん）では、野尻湖発掘の科学運動としての位置づけ分析や野尻湖発掘の精神・地元主義などについて、『教育の場としての野尻湖発掘』（赤羽さん・小林さん・野村さん）では、発掘の魅力から生涯教育につながる活動の意義あるいは、友の会活動について紹介されています。そして最後に、『科学研究と国民の権利』と題し、弁護士団の井尻さん、団長の亀井さんをはじめ、麻生さん、伊藤さん、渋谷さん、そしてこの雑誌の編集委員でもある大森さんに瀬部さんを交え、野尻湖発掘の意義から、参加者の感想、エピソードなどがいきいきと語られていて、見逃がせない一冊となっています。

書店割引で手に入ります。必要な方は友の会を通じて調査団事務局までご連絡下さい。

8

(30-9)

ナウマンゾウのレプリカ 初旅へ

彫像

11月23~25日、ナウマンゾウのレプリカが、調査団事務局のある松本を初めてはなれて、北関東野尻湖友の会事務局のある群馬大学で開かれた「野尻湖発掘展」に参加し、たくさんの石器や化石といっしょに展示されました。

北関東友の会では、このナウマンゾウのレプリカを、たくさんの人に見てもらおうと、おとなが2人もはいるようなゾウのぬいぐるみを作って、大学じゅうを練り歩き、大宣伝をくりひろげました。宣伝のかいあって、ナウマンゾウのレプリカは、「さすがに迫力ある！」と、たいへん評判でした。

今、ナウマンゾウのレプリカは、調査団事務局で、化石やパネルといっしょに、次の出番を待っています。

友の会だより

会員証ができました

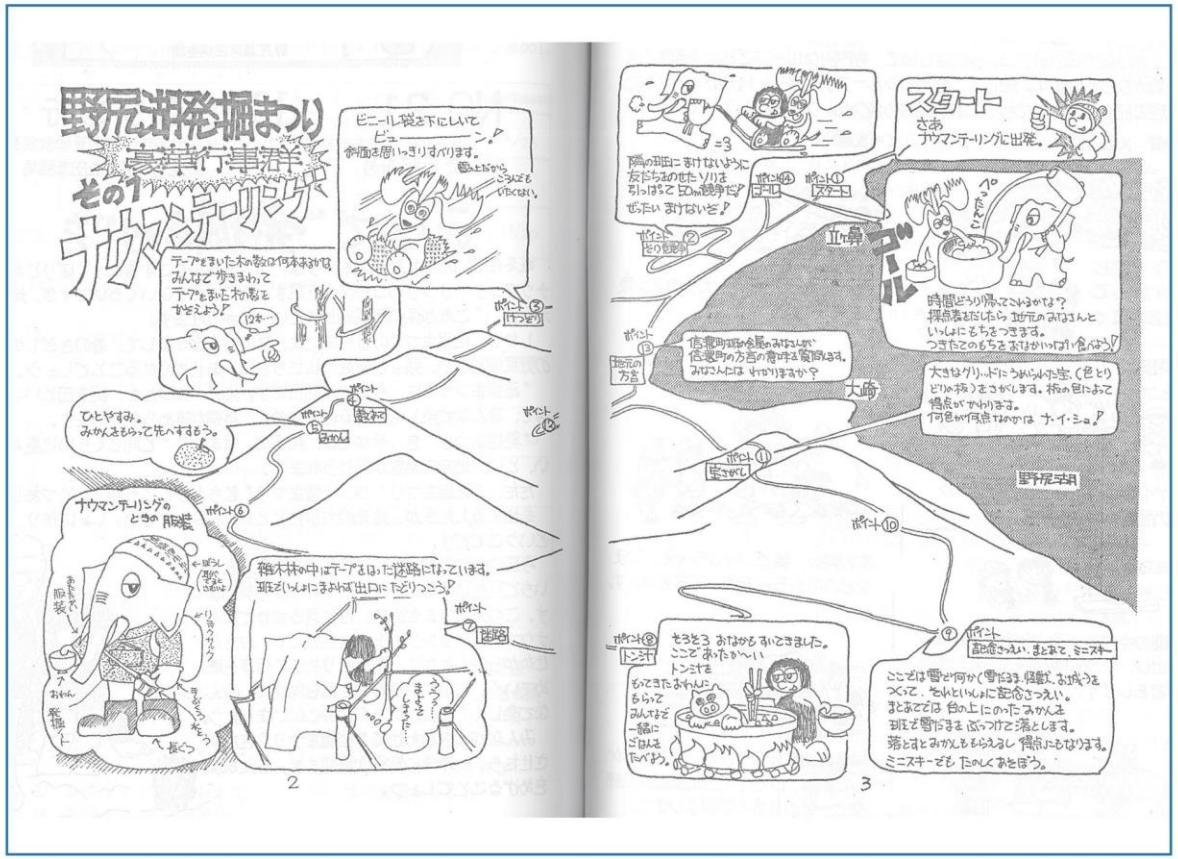
阪神わかやま野尻湖友の会では、会員からの提案によって、友の会の「会員証」を作りました。(右の図)

この会員証は、きちんと会費を納めた人に渡されます。会員証の裏には、「第8次発掘で掘れる実力をみんなが身につけよう」など4つの合言葉と、「自分から進んで勉強しよう」などちっの約束が書かれています。

会員証をもらった人の感想は、「カッコエエナ」とか「とてもべんりや」などいろいろです。

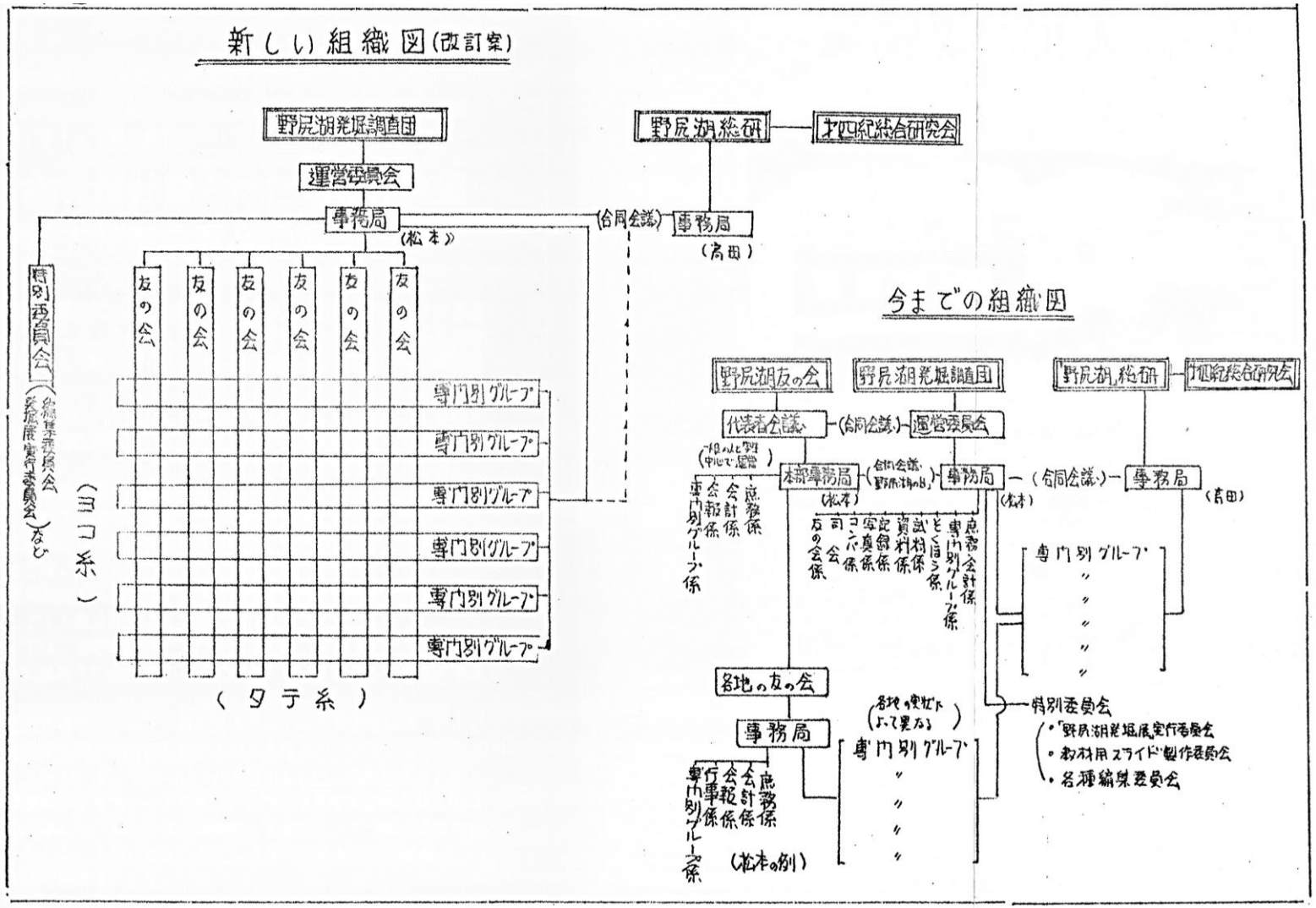
9

野尻湖発掘調査団（1979）『野尻湖ニュース』復刻版 No.30，p8-9.



野尻湖発掘調査団（1980）『野尻湖ニュース』復刻版 No.31，p2-3.

野尻湖友の会 誕生



野尻湖発掘調査団(1983)『野尻湖ニュース』復刻版No.8.付図-1. 酒井 潤一氏 蔵

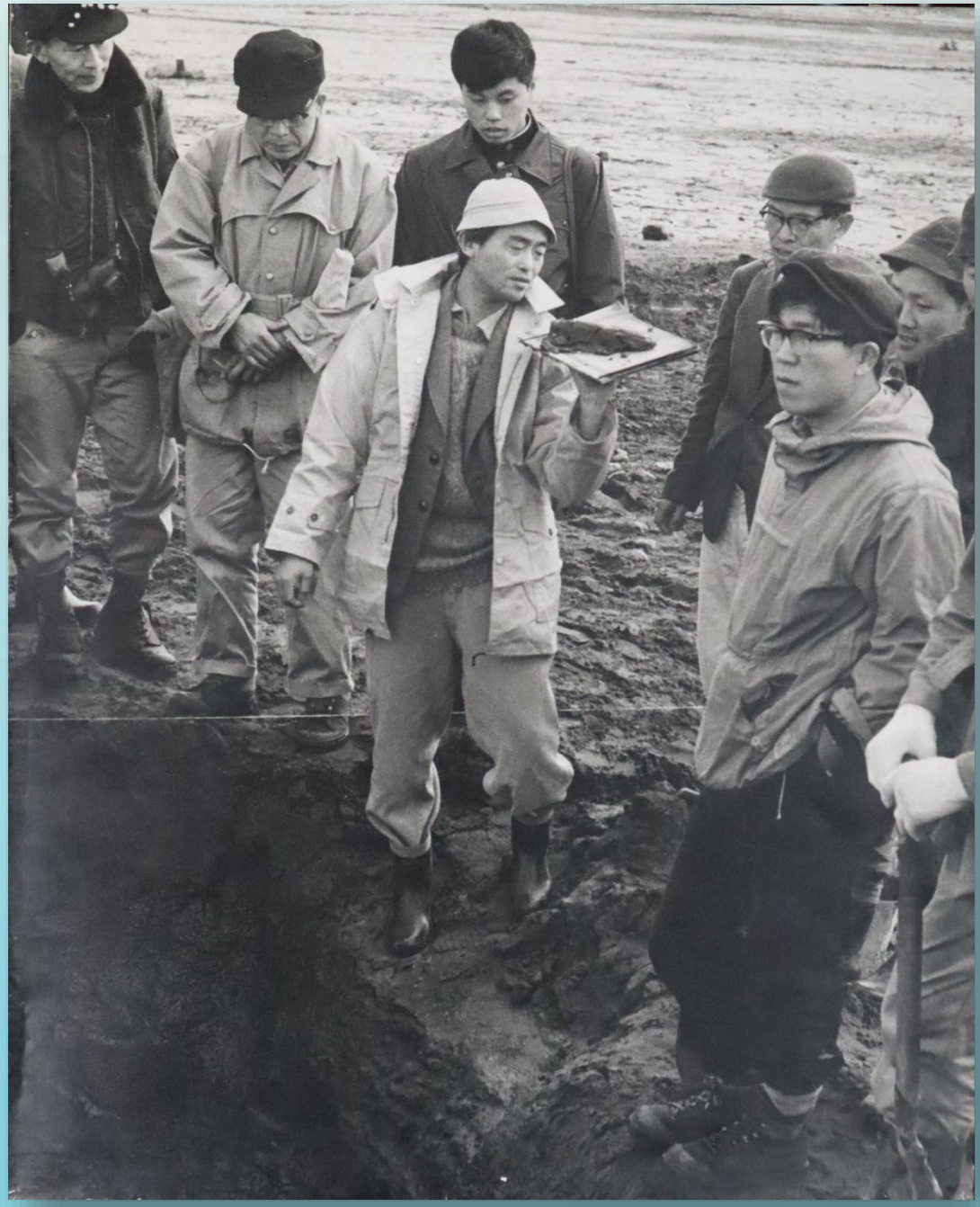
第5次発掘以後、調査団の組織化が試みられ、まず専門グループが生まれ、また第6次発掘後、全国各地につくられた友の会の組織に参加して調査に加わる方式がとられた。

野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて野尻湖発掘50年記念誌』p22.

1984（昭和59）年7月 野尻湖博物館開館、1997（平成9）年野尻湖ナウマンゾウ博物館に改称

発掘現場での鈴木誠先生

（中央白い帽子を被っているのが鈴木先生）



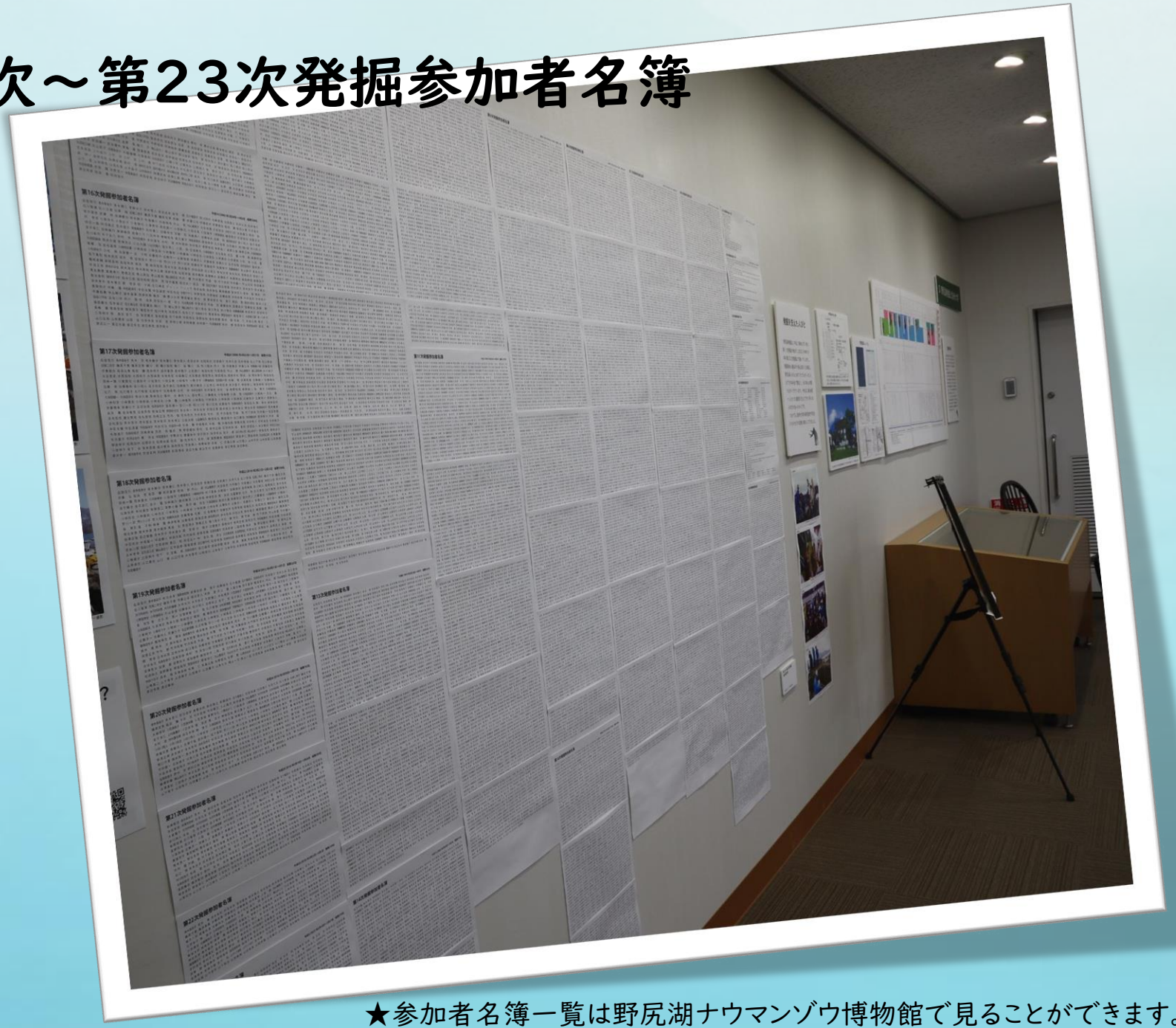
野尻湖ナウマンゾウ博物館　蔵

展示案内図へ戻る

発掘を支えた人びと

野尻湖発掘は、1962（昭和37）年に第1次発掘が始まり、2023（令和5）年の第23次発掘まで続いています。発掘参加人数はのべ86,000人を超え、野尻湖人をもとめて子供から大人までが手弁当で集まり、60年もの間つながってきています。それは、参加者一人ひとりと運営を支えてきた多くの人の力があったからです。なかでも、信州大学の研究者や学生たちが大きな役割を果たしてきました。

第1次～第23次発掘参加者名簿



参加人数

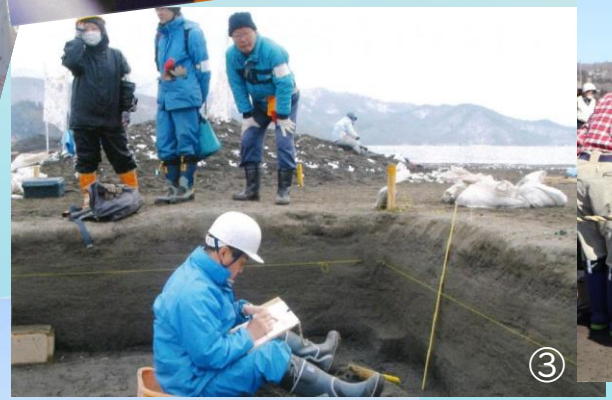
第1次	70人
第2次	150人
第3次	200人
第4次	400人
第5次	1107人
第6次	3672人
第7次	2897人
第8次	2658人
第9次	2377人
第10次	1969人
第11次	1672人
第12次	1498人
第13次	855人
第14次	573人
第15次	482人
第16次	304人
第17次	245人
第18次	196人
第19次	223人
第20次	192人
第21次	205人
第22次	156人
第23次	210人
合計	22311人

★参加者名簿一覧は野尻湖ナウマンゾウ博物館で見ることができます。

発掘風景

①

②


③

④

⑤

⑥

⑦

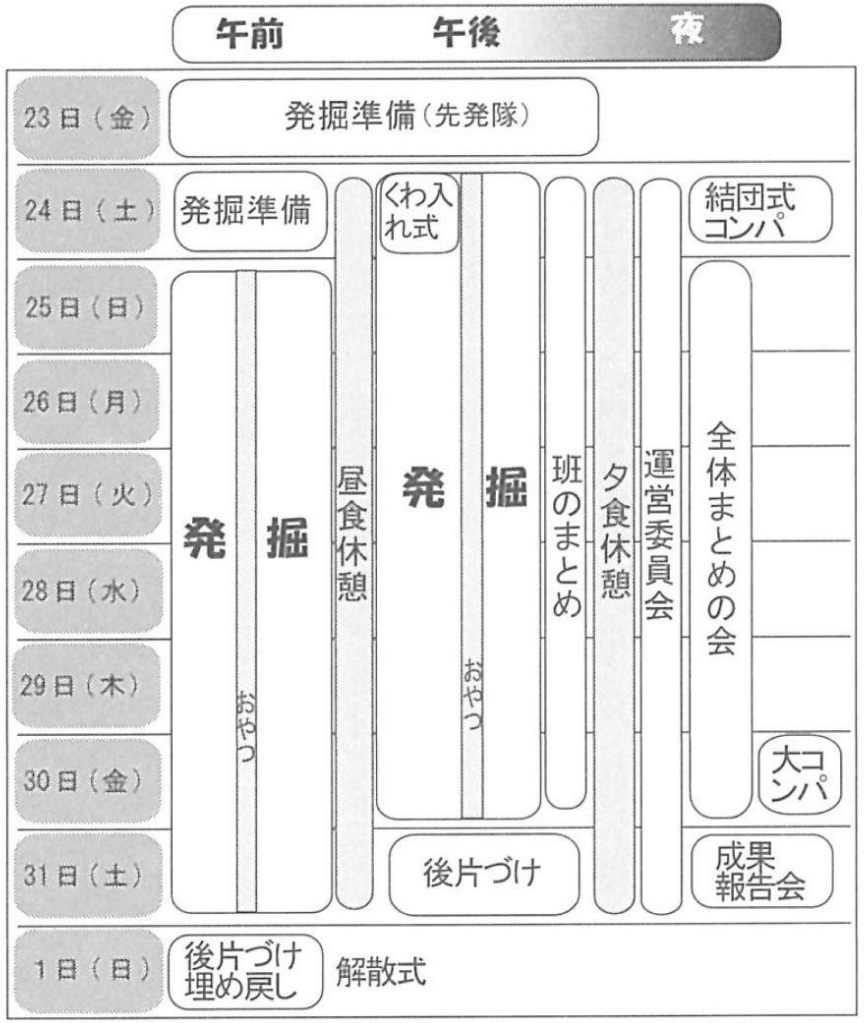
⑧

⑨

⑩

① 第9次発掘，② 第8次発掘，③ 第18次発掘，④ 第13次発掘〈①～④野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて 野尻湖発掘50年記念誌』，p26-27.〉
⑤ ～ ⑩ 第23次発掘（大学史資料センター撮影）

発掘の一日



発掘のスケジュール（第22次発掘）

野尻湖発掘調査団（2018）『野尻湖のナウマンゾウ－市民参加でさぐる氷河時代－』，新日本出版，p34.

野尻湖発掘調査団（1984）『発掘の手びき 第9次野尻湖発掘』，p7.

第23次発掘のご案内

・野尻湖発掘調査団 第23次野尻湖発掘一般参加者募集のお知らせ
http://nojiriko-hakkutsu.info/archives/6199

・「第23次野尻湖発掘」見学のご案内
http://nojiriko-hakkutsu.info/archives/6220

あなたも仲間になりませんか！
発掘に参加してみたい方はこちらをご覧ください ➡

<野尻湖ナウマンゾウ博物館Web サイト「楽しい野尻湖発掘」>

「第23次野尻湖発掘」見学のご案内

2023.3.18（土）～26（日）

みなさまへ

3月18日（土）から野尻湖底で第23次野尻湖発掘をおこないます。新型コロナのために延期され、2018年に実施した第22次発掘から5年ぶりの発掘になります。

野尻湖は氷河時代のナウマンゾウの狩り場と考えられていますが、それをうらづける証拠をさがすことを目的におこないます。全国の野尻湖友の会会員221名（その内、信濃町からは20名）の参加者が力をあわせ、がんばって発掘したいと思っています。

見学におこしください

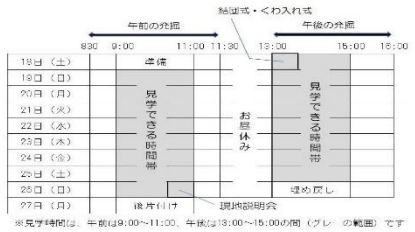
発掘は3月18日（土）午後1時からの結団式・くわ入れ式から始まります。

18日（土）午後～26日（日）午前の間は毎日見学できます。「発掘ガイド」の方がいる時間帯は、説明を聞きながら見学をしていただけます。

どうぞ見学におこしください。

※お車は町営第2駐車場へ駐車してください。

※お手数ですが、受付プレハブで受付をしてください

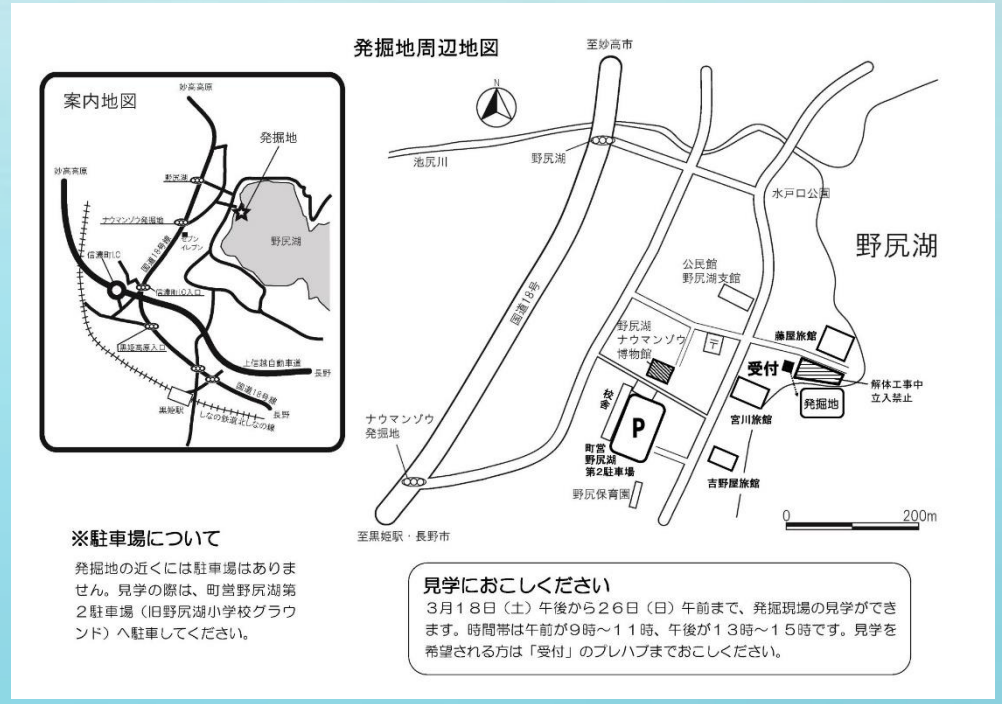


主催：第23次野尻湖発掘実行委員会

●問い合わせ先●
野尻湖発掘調査団事務局
長野県上水内郡信濃町野尻287-5 野尻湖ナウマンゾウ博物館気付
TEL 026-258-2090 FAX 026-258-3551

※裏もご覧ください。地図があります。

←「第23次野尻湖発掘」見学のこ案内チラシ↓



※第24次発掘は2025年3月の予定です。最新情報をご確認ください。

展示資料 No.20　発掘時の道具　酒井　潤一氏　蔵

魚沼ハンマー

新潟県の鍛冶屋の特注品。本来の用途は山菜掘りの道具。

信州鎌

江戸時代から古間村・柏原村（現信濃町）で作られた特産品の鎌。本来は草取り用だが、発掘では地面を薄くはがすために使われる。

色鉛筆

発掘現場で遺跡や遺物をスケッチする際に用いる。

竹べら・木べら

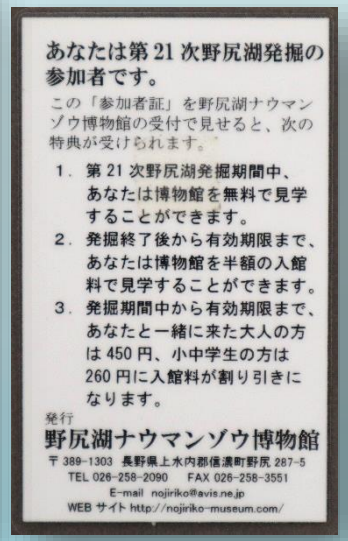
出土した化石等の土を払ったり、化石等をはがす際に用いる。

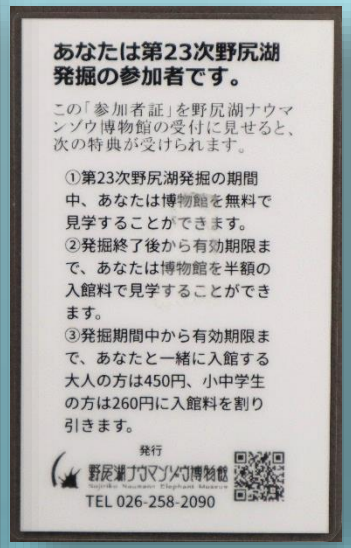
手ぼうき

削った地面を観察するために不要な砂や土を払うために用いる。

展示資料 No.21　発掘記念品

酒井　潤一氏　蔵





ショルダーバッグ、帽子（第17次発掘）、鉛筆、参加者証、名札。
さまざまな記念品が作られた。

展示案内図へ戻る

トピック

～発掘調査に参加した人びとの思い出～

野尻湖発掘の思い出

発掘に参加した方々からお寄せいただいたエピソードをまとめました。

ご覧になりたいエピソードをクリックしてください。

エピソード（原文ママ）

野尻湖発掘の思い出　一覧

○名前またはニックネーム
○野尻湖発掘に関わった当時の学部学科名
○参加した発掘
○参加時の作業分担（係・班）

野尻湖発掘の思い出 ①

○KNY
○理学部地質科学科
○第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○資材班

野尻湖発掘の思い出 ②

○渡邉裕満
○教育学部理科教育コース
○第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○4 班の班長

野尻湖発掘の思い出 ③

○K
○教育学部理数科学教育専攻・理科(層位研)
○第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年，第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年
○記載係

野尻湖発掘の思い出 ④

○天藤
○理学部地質科学科
○第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○測量班

野尻湖発掘の思い出 ⑤

○T.T.
○教育学部（学生），理学部（大学院生）など
○第 9 次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年，第 11 次発掘 / 1990（平成 2）年，第 12 次発掘 / 1993（平成 5）年，第 13 次発掘 / 1997（平成 9）年，第 14 次発掘 / 2000（平成 12）年，第 15 次発掘 / 2003（平成 15）年，第 16 次発掘 / 2006（平成 18）年，第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，
○地元係　野尻湖新聞社　列長　地質班　司会団等いろいろ

野尻湖発掘の思い出 ⑥

○J.K
○理学部地質科学科，工学系研究科地球生物圏科学専攻
○第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○17 次：資材班、18 次：外回り責任者・資材班長・運営係、19 次：外回り責任者・運営係

野尻湖発掘の思い出 ⑦

○公文富士夫
○大学院生（京都大学大学院　地質鉱物学専攻），1983 年以降（信州大学地質学教室，教員）
○第 5 次発掘 / 1973（昭和 48）年，第 6 次発掘 / 1975（昭和 50）年，第 7 次発掘 / 1978（昭和 53）年，第 9 次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年
○地質班など

野尻湖発掘の思い出 ⑧

○NT
○長野県立高校教員
○第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年，第 21 次発掘 / 2016（平成 28）年，第 22 次発掘 / 2018（平成 30）年，第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○記載係・地質班・野尻湖新聞社・司会団・受付係・運営係

野尻湖発掘の思い出 ⑨

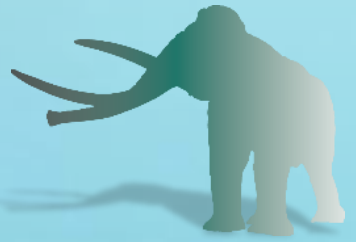
○H.T.
○教育学部理科教育コース
○第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○記載係

野尻湖発掘の思い出 ⑩

○酒井潤一
○理学部地質学科　教員
○第 1 次発掘 / 1962（昭和 37）年，第 2 次発掘 / 1963（昭和 38）年，第 3 次発掘 / 1964（昭和 39）年，第 4 次発掘 / 1965（昭和 40）年，第 5 次発掘 / 1973（昭和 48）年，第 6 次発掘 / 1975（昭和 50）年，第 7 次発掘 / 1978（昭和 53）年，第 8 次発掘 / 1981（昭和 56）年，第 9 次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年，第 11 次発掘 / 1990（平成 2）年，第 12 次発掘 / 1993（平成 5）年，第 13 次発掘 / 1997（平成 9）年，第 14 次発掘 / 2000（平成 12）年，第 15 次発掘 / 2003（平成 15）年，第 16 次発掘 / 2006（平成 18）年，第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年，第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年，第 21 次発掘 / 2016（平成 28）年，第 22 次発掘 / 2018（平成 30）年，第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年，陸上発掘、湖底地質調査
○受付係、研究顧問団、広報係

野尻湖発掘の思い出　①

○KNY
○理学部地質科学科
○第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○資材班



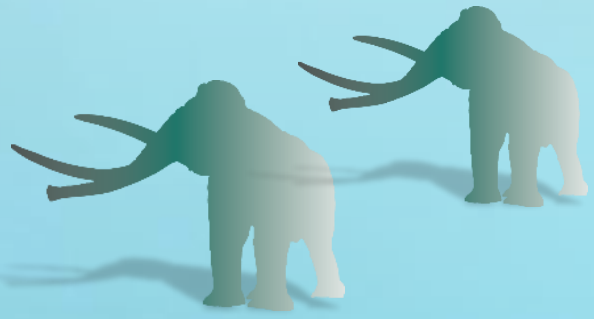
発掘用資材の管理や運搬等に従事するために、軽トラックで資材倉庫～野尻湖間を何度も往復していた。その仕事のためにマニュアル免許を取得したり、免許取得後まもなくの時期にいきなり雪道の運転をする羽目になったり、使っていたのが非常にクラッチが浅く繋がる車だったりと大変苦労したことが思い出深い。

また、発掘グリッドには数えるほどしか入れなかったが、骨片をひとつと（埋め込まれた痕跡のある）謎の石を発見したことが強く印象に残っている。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出　②

○渡邉裕満
○教育学部理科教育コース
○第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○４班の班長



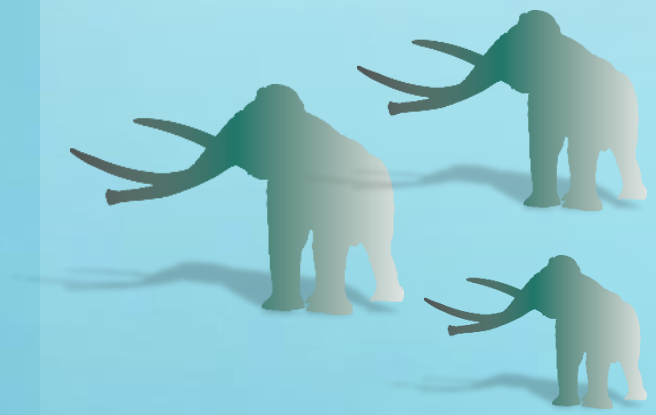
初めて野尻湖発掘に参加しました。保育園生からご年配の方と年齢層の幅広い参加者の皆さんがスムーズに発掘を進められるように指揮をとることはとても大変でした。参加者の方々が化石をみつけたときにとてもキラキラした目で班長のことを呼んでいたのが私の中ではとても印象的でした。

また、４班では野尻湖人の存在を明らかにする手掛かりになるかもしれない敲石のようなものが発掘されたので、とても嬉しかったのを覚えています。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出　③

○K
○教育学部理数科学教育専攻・理科(層位研)
○第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年，第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年
○記載係



大学２年生で初めて野尻湖発掘に参加しましたが、今思い返してみるとなかなか体験できない貴重な経験でした。野尻湖発掘に参加していた約１週間はまさに下界と隔離され、別世界にいるような濃密な時間でした。朝早くから湖畔に行き、日が沈むまで発掘された化石の産出層準や標高などを仲間と協力して記載する日々で、まさに発掘に没頭していた時間でした。

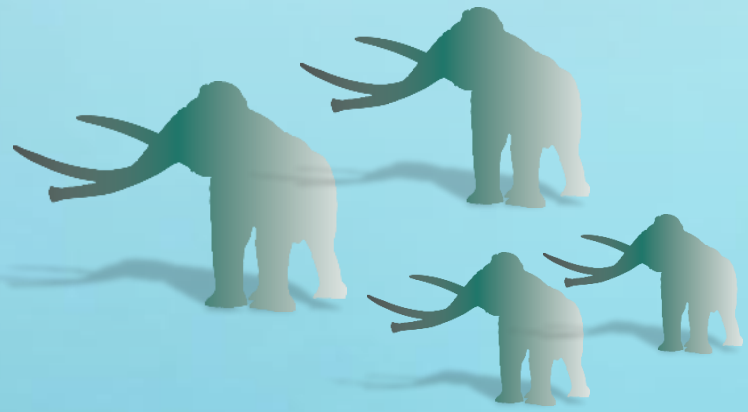
発掘が進むと発見される化石が増えていくわけですが、記載係としては記載が追い付かず化石を示す竹串が徐々に増えていく光景に絶望感を感じたのを覚えています。しかし、その日の夜に発掘された化石や遺物の数を聞くと一日頑張った充実感を得られたのもいい思い出です。

社会人になると、あの野尻湖発掘に参加していた時間が懐かしいです。他の仕事を気にすることなく、自然の中で発掘だけに没頭できる時間は今は取れないな…と寂しく感じます。それだけの魅力がある野尻湖発掘で、人類がいた証拠が発見されることを期待しています。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出　④

○天藤
○理学部地質科学科
○第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○測量班



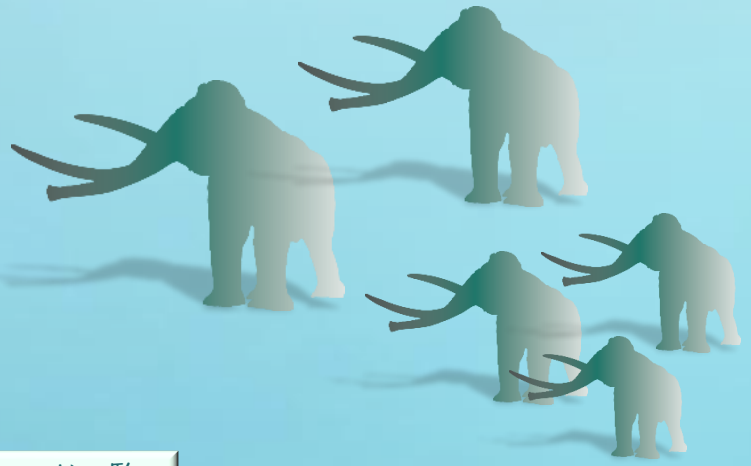
松本事務職の一員として測量班の班長となって、第 18 次野尻湖発掘に参加しました。朝から夜遅くまで発掘期間中の 2 週間の間作業をしていた印象です。夜ご飯もゆっくり食べれません。期間中吹雪く中で作業することも。期間前は測量班としてトランジットを使って、正確に距離と方位を図り、グリッドの四隅に印を入れていきました。期間中は化石や遺物が出ると、グリッドのどこから出てきたのか。これもトランジットを主に使用して、スタッフを当てて。出土の深度の記録にも役立ててもらった記憶があります。

また、発掘が始まる前から班分けして長い期間準備に当たっていたかとも思います。月に 1 度は夜に博物館へ通って打ち合わせをし、雪深い中で測量の基準点を探す作業をしたりと、苦労した思い出がいっぱい。でも、夜の飲み会や化石が出てきた時の雰囲気など、楽しい思い出も沢山あります。松本事務局に在籍中は大人の皆様に叱咤激励いただきながら、日々活動をしていました。測量は技術が必要ですので、技術の面で沢山の助言を頂きながら作業をしていました。私たち学生にとって、経験豊かな皆さまと関わって作業する貴重な機会になったかと思っています。手弁当の精神により、学生にはちょっと厳しいお金の問題や、自分の時間を割いてまでボランティアをしている気分もありましたが、当時の経験や思い出は今でも宝物で、代え難いものであり、社会人になっての自身の力にもなっているかと思っています。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出　⑤

○T.T.
○教育学部（学生），理学部（大学院生）など
○第９次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年，
第 11 次発掘 / 1990（平成 2）年，第 12 次発掘 / 1993（平成 5）年，
第 13 次発掘 / 1997（平成 9）年，第 14 次発掘 / 2000（平成 12）年，
第 15 次発掘 / 2003（平成 15）年，第 16 次発掘 / 2006（平成 18）年，
第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，
○地元係　野尻湖新聞社　列長　地質班　司会団等いろいろ

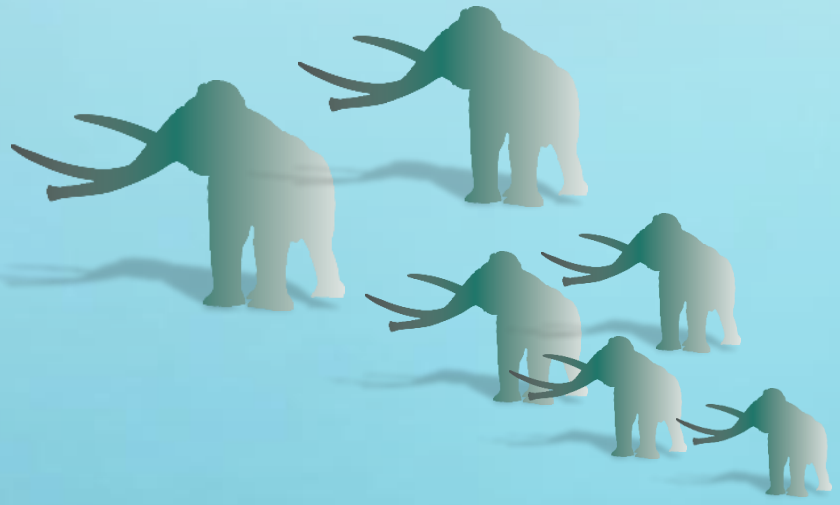


いっぱいあって　ここには書けません　この仕事博物館学芸員を選んだのもこの発掘のお陰だと思っています。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出 ⑥

○J.K
○理学部地質科学科，工学系研究科地球生物圏科学専攻
○第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年
○17 次：資材班、18 次：外回り責任者・資材班長・運営係、19 次：外回り責任者・運営係



17 次発掘は、当時大学 1 年生で何も分からない状態での参加であり、目の前のことをこなしていくだけで精一杯であった。ただ、この発掘が重要なものであるという認識は持っており、迷惑をかけないように、と感じていたことを覚えている。多くの人の協力あっての発掘であると実感し、このような場にいられることが恵まれていると感じた。このころは学生の人数も多く、役割の分担もしっかりしていた。

18 次発掘は、当時大学 3 年生で資材班長として活動する予定であった。しかし、外回り責任者を務める予定であった同級生が学校に来られなくなっており、急遽代理を務めることになった。当初の予定通り資材班長も兼任していたため、どちらの仕事も中途半端になってしまい、迷惑をかけてしまった。外回り責任者は学生側の代表であるため、発掘全体の方針や予定を決める運営委員を兼務することになった。発掘全体がどのように進んでいくのか、発掘をどのように考えていくのか、といった部分を決めることがどれだけ難しいかを知ることができた。この経験は今の仕事でも役立っている。学生の人数はこのころから減少傾向にあり、全日程に参加する人も少なくなっていた。そのため、発掘期間中の作業に支障が出て、参

加者の方に協力をいただくことが増えていった。長年にわたって活動しているからこそ出来ることであり、発掘の歴史を感じることが出来た。また快く引き受けていただいた方々に感謝している。同時に学生側がどのように関わっていくか、考えさせられる出来事でもあった。

19 次発掘は、当時大学院 1 年生で就職活動もあり、積極的に関わる予定ではなかった。しかし、この年も外回り責任者を務める予定であった後輩が学校に来られなくなり、再び代理を務めることになった。引き受けた時点で発掘の準備は進んでおり、後輩に対してもなかなか上手くサポートが出来なかったため、ここでも迷惑をかけたことを覚えている。このときは、学生の人数も少なく、参加日程も短くなっている人が多く、活動がスムーズにいかない部分も多かった。下の学年からしてみれば、私に対して言いたいことが言えずにストレスをためていたのではないか、と反省している。外回り責任者としては、全体の流れは前回の経験からある程度理解していたが、現地で臨機に対応するのは相変わらず難しい部分であった。18 次発掘と同様に OBOG の方や、地元の方、参加者の方々に支えてもらい、何とか発掘を乗り越えられたことが何よりうれしかった。

私が野尻湖発掘調査団松本事務局で活動していた 2007 年～2013 年にかけては松本事務局の過渡期であった。2008 年くらいまでは、信州大学名誉教授の酒井潤一先生が松本事務局の活動に関わっておられ、事務局の学生への指導を行っていた。そのため、学生の活動にも継続性があり、発掘の中でもより重要な役割を果たしていた。しかし、酒井先生が松本事務局の活動に関わる頻度が減っていくと同時に、学生側も活動の指針を失っていった。また、野尻湖発掘に関わる学生の数も減少傾向にあり、過去の発掘の経験を伝える体制も整っていなかった。2010 年代になると、松本事務局は自主的に活動することが難しくなっており、野尻湖ナウマン象博物館の近藤洋一さんや教育学部に赴任された竹下欣宏先生にアドバイスをいただくことが多くなっていた。この時期に松本事務局の役割を明確にしておけばもう少し活動が盛んになったのでは、と今になって感じている。

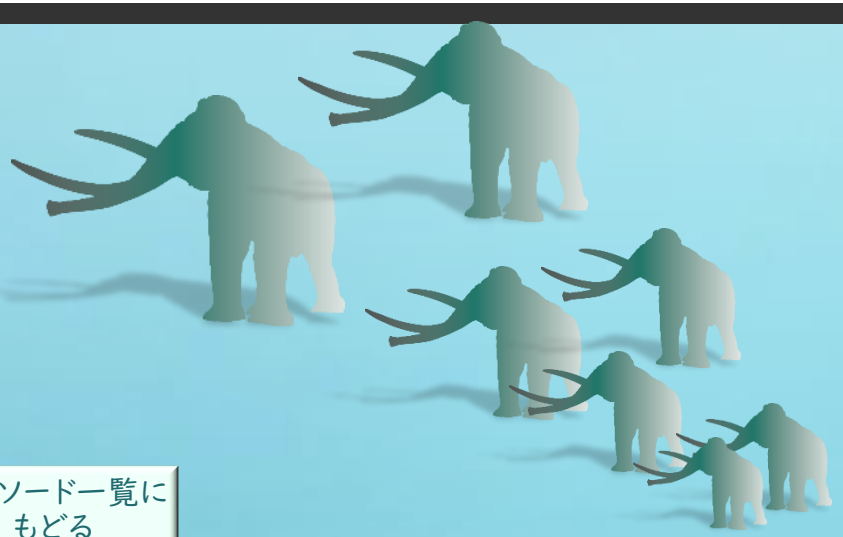
野尻湖発掘で一緒に活動した先輩・同級生・後輩、OBOG の方々など多くの人とつながりを持てたことは自分の人生の財産になっている。また、地元信濃町の方や全国の友の会に所属している会員の方と発掘できたことは貴重な経験であった。大衆発掘という珍しい形式をとるこの発掘が多くの人に支えられていることを知り、その活動の一部を担うことが出来、大変うれしく思っている。

卒業した後は、野尻湖発掘とは疎遠になってしまっているが、今後も野尻湖発掘が多くの人に愛され、継続していくことを願っている。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出 ⑦

○公文富士夫
○大学院生（京都大学大学院　地質鉱物学専攻），1983 年以降（信州大学地質学教室，教員）
○第 5 次発掘 / 1973（昭和 48）年，第 6 次発掘 / 1975（昭和 50）年，第 7 次発掘 / 1978（昭和 53）年，第 9 次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年
○地質班など

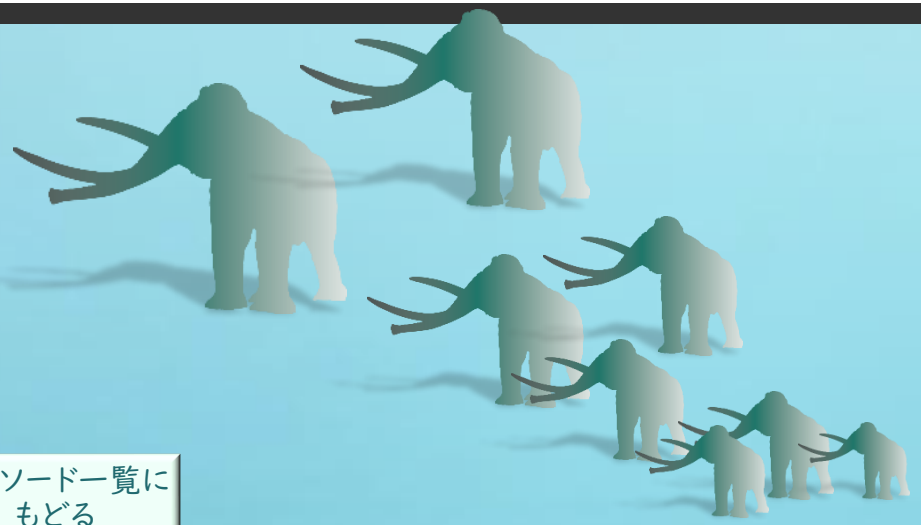


学生時代には一兵卒として参加していた．1983 年に信州大学に就職してからは，学術的なリフトアップに貢献できるように努めた．発掘は沿岸の砂質な堆積物に集中していたが，断続的な情報にならざるをない．それを補完する意味で，1988 年以降は，当時の地質調査所の井内美郎博士の全面的な協力を得て，発掘地の沖合，水深 30m 以上の湖心部で連続した湖底堆積物試料を採取して，発掘地でのナウマンゾウや人類活動の背景となる古環境史の解明に努めた．特に信州大学を卒業した河合小百合博士による花粉分析の研究は，100 年以下の時間分解能で過去 7 万年間を解明した第 1 級の植生史資料である（Kumon et al., 2012；Kudo and Kumon, 2012）．その後，そのデータをもとに物質循環学科を卒業した木越智彦博士が，モダンアナログ法で気候指標を復元することにも成功した（Kigoshi et al.,2017）．

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出 ⑧

○NT
○長野県立高校教員
○第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年，第 21 次発掘 / 2016（平成 28）年，
第 22 次発掘 / 2018（平成 30）年，第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○記載係・地質班・野尻湖新聞社・司会団・受付係・運営係



信州大学教育学部層位研に進学した教え子から、今度野尻湖発掘に行くんです、学習会に参加すれば誰でも参加できますよ、と聞き、当時勤務していた高校の生徒と初めて 20 次発掘に参加しました。

野尻湖発掘に行ってみると、大学時代に教わった熊井久雄先生がいらっしゃいました。

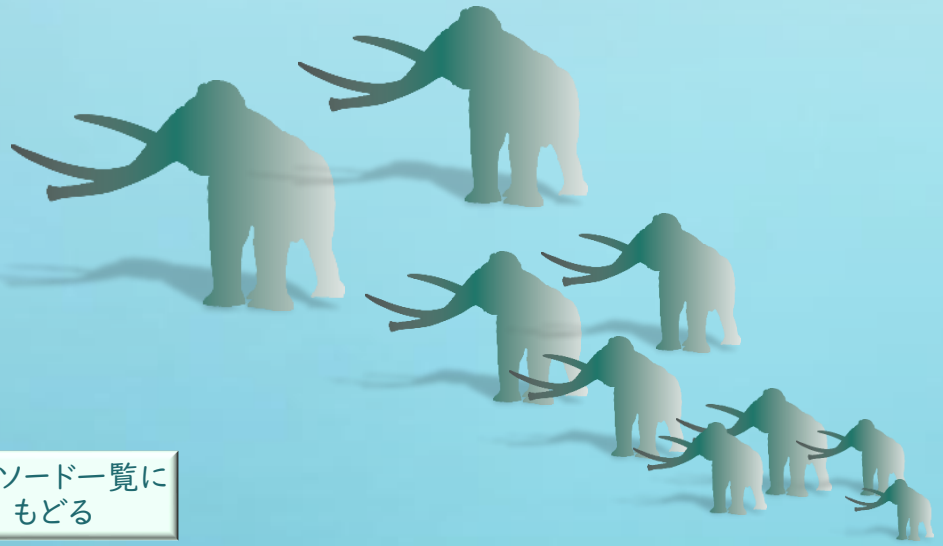
発掘参加初日は猛吹雪で、ビニール袋をかぶって記載をしました。なんて過酷な現場なんだと思いましたが、目の前で地層が見られ、化石遺物が次々と発見されていく生の現場はとても楽しかったです。大学生の時は野尻湖発掘のことなんてきいたことが無かったけどなぁ、こんな面白い現場があるならもっとはやく教えてくれれば良かったのに、熊井先生・・・と思いました。高校地学の教員として専門性を高めたいと思っていた時期で、熊井先生や他の皆さんの誘いもあり、地質グループに入り勉強することにしました。同じ時期に地学団体研究会・日本地質学会にも入りました。地質グループや他の学術団体で地域の専門家の皆さんと活動していく中で、さまざまなつながりができました。大学・研究所・博物館・企業・自治体・地域・小中学校などとのつながりを生かして学校でも多々の連携した取り組みを行っています。

気づいたら、いつの間にか、野尻湖発掘調査団の事務局員になっていました。

エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出 ⑨

○H.T.
○教育学部理科教育コース
○第 23 次発掘 / 2023（令和 5）年
○記載係



(すべて 23 次発掘の出来事です。)

初対面の方ばかりで、最初は班内のコミュニケーションを取るので必死だったが、徐々に打ち解けて「大きな発見がしたい！」と願いながら活動を行うことが出来た。

発掘が終わったあと、「では、次の発掘で会いましょう！」と声をかけてもらい、野尻湖が繋ぐ人と人との関わりと温かさを感じました。

(７日目だったかな？)記載係にとって紙が濡れてしまうため雨が一番怖いです。この日の午後は、急に霧が出てきて数ｍ先も見えないような状況でした。「雨じゃないだけいいな」と思っていましたが、少しずつ紙が湿ってきたのに気が付き慌てて画版ごとビニールを書けて記載を行いました。初日から書き続けていた用紙もあったため焦りましたが、何事もなく進めることが出来たのでよかったです。

(８日目)この日の天気は雨でした。記載をするときには、化石がでてきた場所(座標)も必要ですが、発掘場所と雨除けのテントの場所が離れており、記載するのが面倒だなと思っていました。同じ班の記載係で相談して編み出したのが”伝言ゲーム方式で伝える”というものでした。(A さんが位置を読み取り、B さんが大声でテントにいる記載係に伝え、C さんが記載する。) 他の班の人から注目されるほど目立っていましたが、非常に効率的に進めることが出来ました。一気に仲を深めることが出来て嬉しかったのを今でも覚えています。

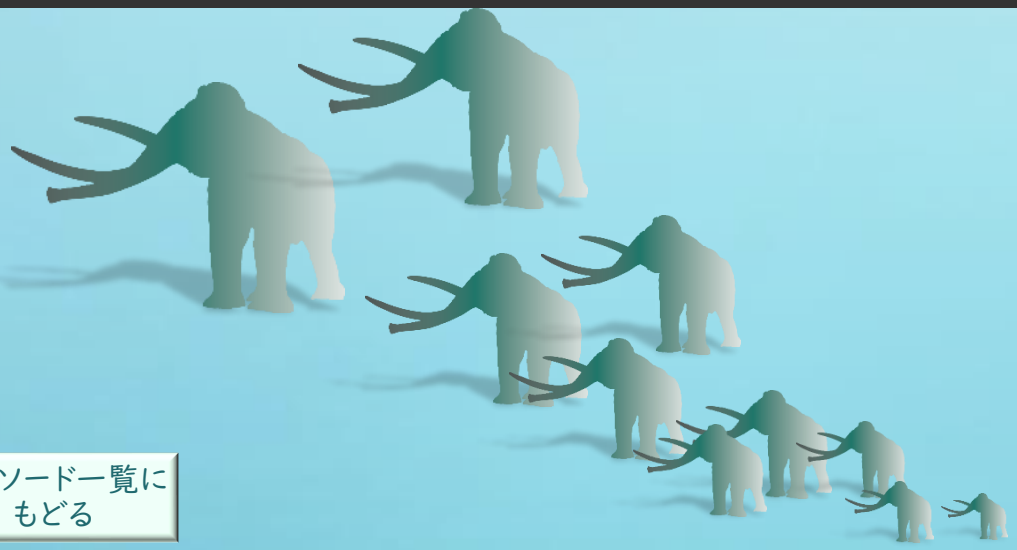
エピソード一覧にもどる

野尻湖発掘の思い出 ⑩

○酒井潤一
○理学部地質学科　教員
○第１次発掘 / 1962（昭和 37）年，第２次発掘 / 1963（昭和 38）年，
第３次発掘 / 1964（昭和 39）年，第４次発掘 / 1965（昭和 40）年，
第５次発掘 / 1973（昭和 48）年，第６次発掘 / 1975（昭和 50）年，
第７次発掘 / 1978（昭和 53）年，第８次発掘 / 1981（昭和 56）年，
第９次発掘 / 1984（昭和 59）年，第 10 次発掘 / 1987（昭和 62）年，
第 11 次発掘 / 1990（平成２）年，第 12 次発掘 / 1993（平成５）年，
第 13 次発掘 / 1997（平成９）年，第 14 次発掘 / 2000（平成 12）年，
第 15 次発掘 / 2003（平成 15）年，第 16 次発掘 / 2006（平成 18）年，
第 17 次発掘 / 2008（平成 20）年，第 18 次発掘 / 2010（平成 22）年，
第 19 次発掘 / 2012（平成 24）年，第 20 次発掘 / 2014（平成 26）年，
第 21 次発掘 / 2016（平成 28）年，第 22 次発掘 / 2018（平成 30）年，
第 23 次発掘 / 2023（令和５）年，陸上発掘、湖底地質調査
○受付係、研究顧問団、広報係

第１次発掘から第 23 次発掘まですべての発掘に参加しています。

酒井氏には、企画展において、発掘調査の道具や記念品などを多数ご提供いただきました。



「私も野尻湖発掘に参加しました！」
という方は、こちらのフォームから
エピソードをお寄せください。

エピソード登録フォーム「野尻湖発掘の思い出」
https://forms.gle/ykE3bcxdUUHxLVVS7

エピソード一覧にもどる

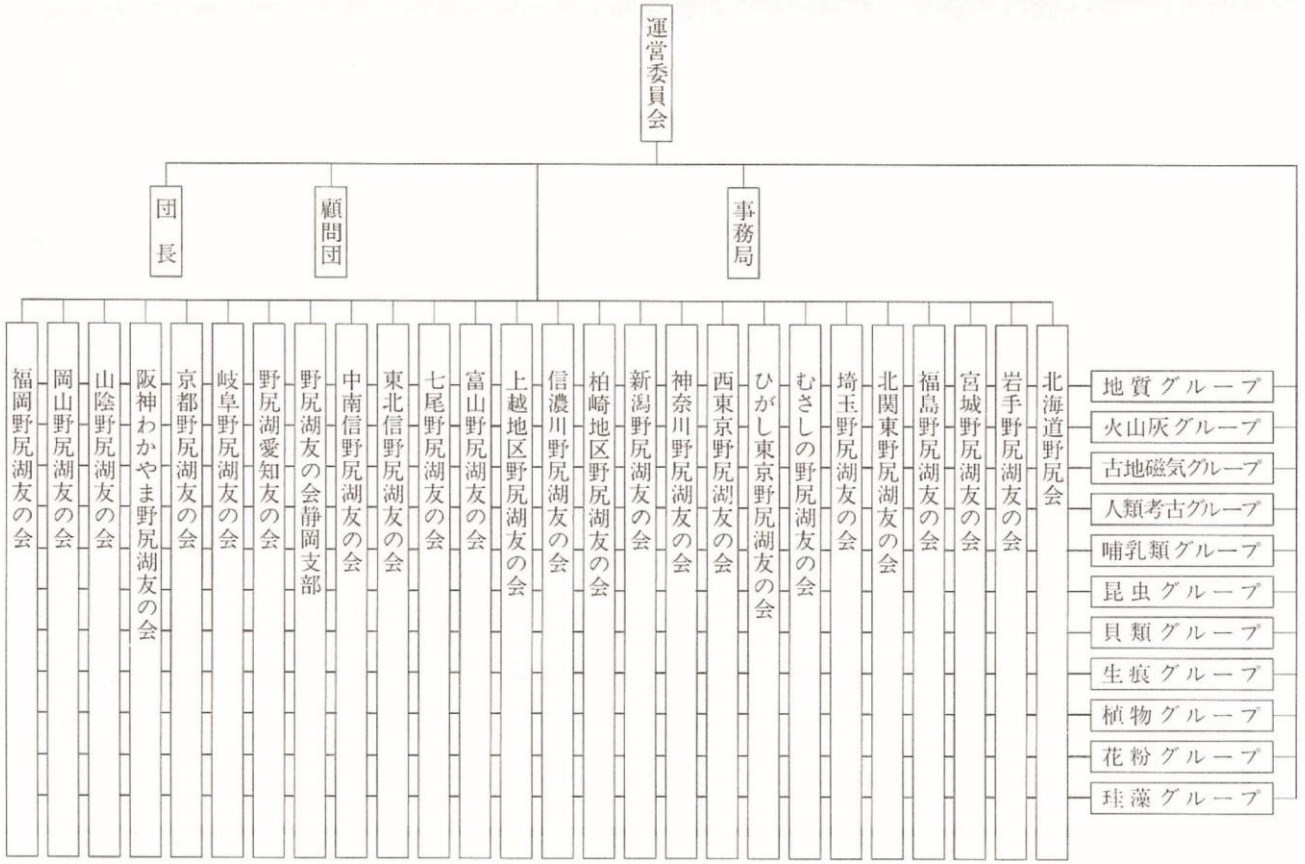
展示資料 No.22　東北信・信濃町友の会の旗（第23次野尻湖発掘）

2023（令和5）年3月

東北信野尻湖友の会事務局

友の会ごとに作られる旗は、参加者が発掘への意気込みなどを書き込み、発掘期間中は竿に付けて現場に掲げられる。ゾウの鼻と頭で第「23」次発掘を表したのは学生のアイデア

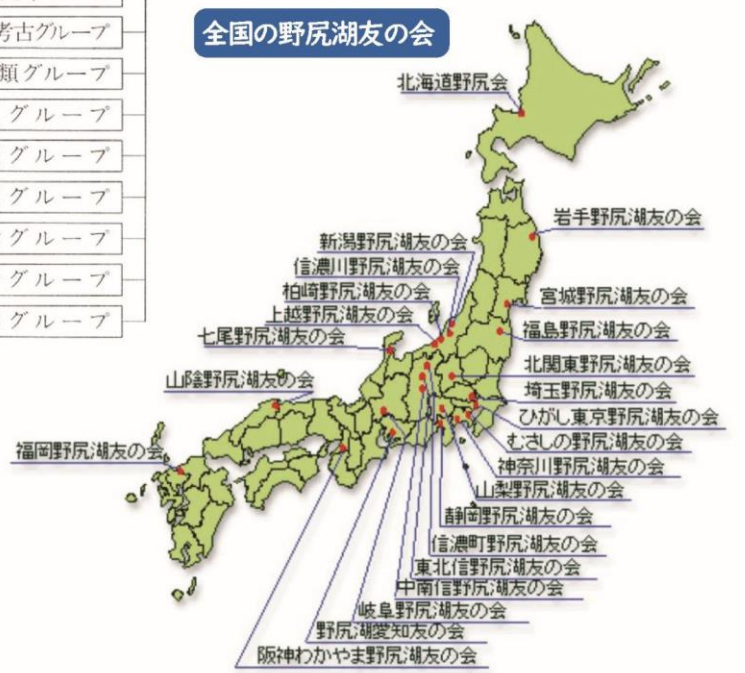
野尻湖発掘調査団の組織図



野尻湖発掘調査団（1986）『一万人の野尻湖発掘』築地書館，p61.

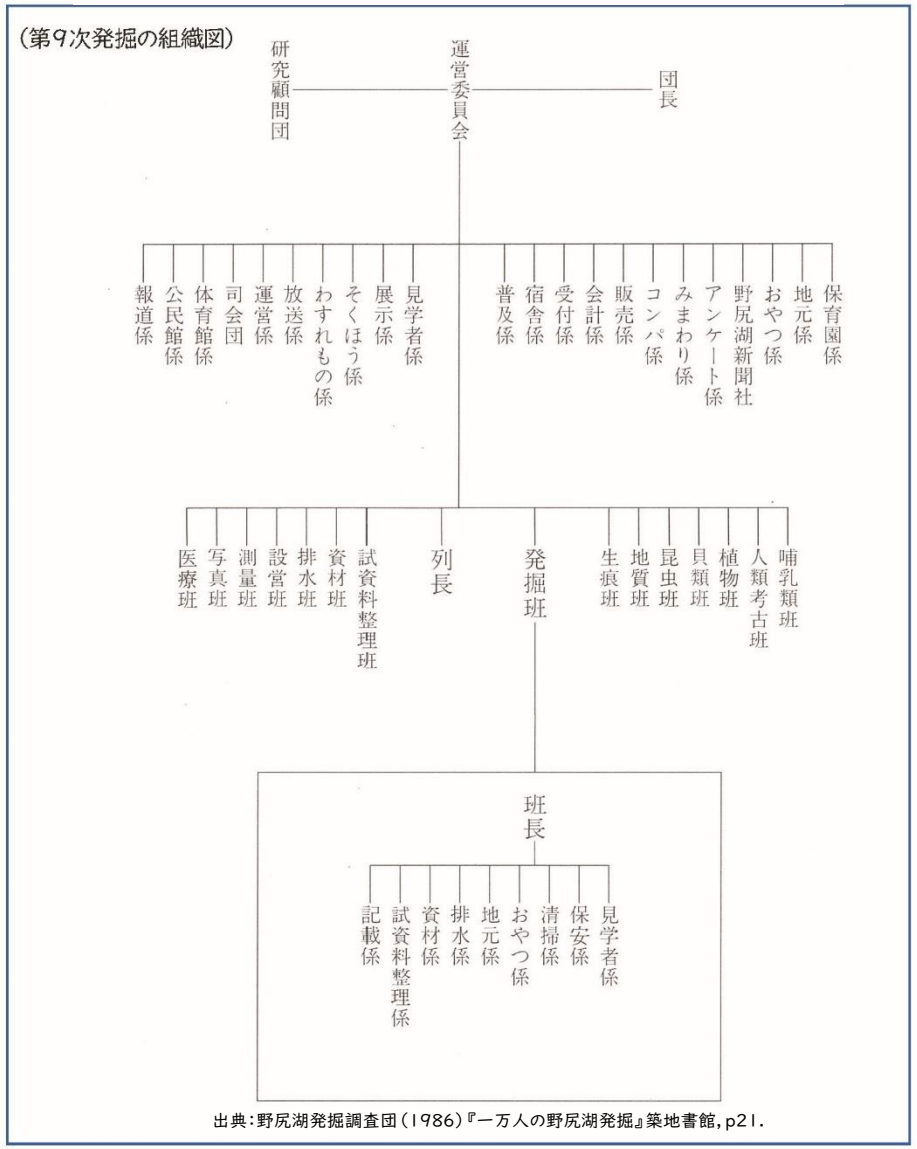
第6次発掘のあと、野尻湖発掘調査団の基本となる組織がつくられた。
友の会事務局がそれまでの調査団事務局の仕事を受け継ぎ、参加者は事前に友の会や専門グループの行事で力をつけていくという、たて糸とよこ糸の組織をつくり出した。

第６次発掘後の２か月間に16の友の会が全国各地に誕生し、現在23の友の会が活動している。
1977（昭和52）年３月に開催した第１回野尻湖発掘まつりでは、友の会の交流と地元との交流を深め、第７次発掘への団結力を高めていった。



野尻湖ナウマンゾウ博物館「全国の野尻湖友の会」http://nojiriko-museum.com/?page_id=114

運営委員会と係・班の組織図



出典：野尻湖発掘調査団（1986）『一万人の野尻湖発掘』築地書館，p21.

小学生から専門家まで能力や経験に応じて参加者全員で分担する。
必ず一人一つはどれかの仕事を担当し、責任をもって仕事をすることが野尻湖発掘の基本となっている。
係と班の種類に変化はあるが、基本的な構造は変わらず現在まで続いている。

11の専門グループ

出典：野尻湖発掘調査団（1986）『一万人の野尻湖発掘』築地書館，p139.

野尻湖発掘調査団には、地層や化石の調査を通して氷河時代の野尻湖とその周辺のようすをあきらかにするための11の専門グループがある。

展示資料 No.23　野尻湖発掘の記録映像

1．野尻湖発掘の記録　第6次野尻湖発掘（1973（昭和48）年、32分）
https://www.kagakueizo.org/movie/animal/212/

2．野尻湖人を求めて　第10次野尻湖発掘（1987（昭和62）年、34分）
https://www.kagakueizo.org/create/other/213/

3．野尻湖文化を求めて　第13次野尻湖発掘（1997（平成9）年、38分）
https://www.kagakueizo.org/movie/animal/293/

（1 ～ 3 ： 科学映像館　配信映画）

4．野尻湖発掘に参加して zoom インタビュー（2023（令和5）年 10 月13日、29分）
協力：教育学部　理科教育コース　層位構造地質学研究室
（信州大学動画チャンネル）

展示案内図へ戻る

おわりに

野尻湖発掘のめざすもの

1962（昭和37）年から60年にわたって続けられてきた野尻湖発掘。研究はみんなで平等の立場で行うこと、地元との関係を大切にすること、発掘によって得られた成果を共有する中で新しい課題を見出すこと、友の会と専門グループの有機的なつながりの中で、参加者がそれぞれの役割を見出して主体的に参加すること、これらが野尻湖発掘を支えてきた基本的な姿勢で、「野尻湖方式」と言われています。このフラットな調査・研究体制を支えたのが信州大学の教員、学生、卒業生でした。ナウマンゾウの臼歯の出土層位の確認から始まった発掘調査は、旧石器時代の人類が野尻湖周辺に実在したことの証明を課題に掲げるに至っています。60年の歴史を踏まえつつ、基本に立ち返って発掘体制の再点検を行い、多くの人に発掘の魅力を伝え、中期計画に基づく調査を進め、より多くの人と情報を共有するためのデータの公開とデータベースの構築などを課題として次の60年へと歩み始めています。これまでにも増して、信州大学人の活躍がいっそう求められています。

参考文献 （書店や図書館で手に入りやすいものをあげています。）

・『野尻湖のナウマンゾウ－市民参加でさぐる氷河時代－』 野尻湖発掘調査団著，新日本出版社，2018.
・『増補版 象のいた湖－野尻湖発掘ものがたり－』 野尻湖発掘調査団著，新日本出版社，1992.
・『ナウマンゾウの狩人をもとめて』 野尻湖ナウマンゾウ博物館著，新日本出版社，1992.
・『新版 野尻湖のぞう』 井尻正二・金子三蔵著，福音館書店，1976.

〇専門的な情報を知りたい方は、野尻湖ナウマンゾウ博物館発行の報告書を参照ください。

・『野尻湖博物館研究報告』（1号～4号 1993年～1996年）
・『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』（5号～30号 1997年～2022年）

参考：http://nojiriko-museum.com/?page_id=93（野尻湖ナウマンゾウ博物館Webサイト）

図書館蔵書検索はこちら ⇒ 信州大学 附属図書館OPAC

付記

　野尻湖ナウマンゾウ博物館・野尻湖発掘調査団から資料・情報の提供をいただき、展示に関するご教示もいただきました。特に野尻湖ナウマンゾウ博物館長近藤洋一氏、元調査団長・信州大学名誉教授　酒井潤一氏・赤羽貞幸氏、信州大学教育学部准教授竹下欣宏氏には多くの情報をいただきました。なお、野尻湖発掘をテーマに市民参加の調査について研究した土屋正臣著『市民参加型調査が文化を変える―野尻湖発掘の文化資源学的考察』（美学出版　2017年）は、本展示を実施するに際して参照しました。

（文責：福島正樹）

信州大学 大学史資料センターについて

大学史資料センターでは、信州大学の歴史を将来に伝えていくために本学に関する資料を収集しています。皆様がお持ちの資料をぜひご提供ください。

◉資料提供の手続きにつきましては、大学史資料センターのWebサイトをご覧ください。

ご提供いただいた資料の一部

大学祭パンフレット

講義ノート

教科書

スナップ写真

募集要項・受験票

バックル・徽章

卒業証書

課題レポート

演劇ポスター

アルバム

学生新聞

2024年3月末時点で約7000点の資料をご寄贈いただきました。
ご提供いただきました方々に、厚く御礼を申し上げます。

展示案内図へ戻る

野尻湖発掘を支えた信州大学の人びと

信州大学
大学史資料センター

スライド 制作・編集　田中 圭美

制 作　信州大学 大学史資料センター
展示協力　信州大学 理学部・教育学部・医学部
信州大学附属図書館
野尻湖ナウマンゾウ博物館
野尻湖発掘調査団

© 2023 信州大学 大学史資料センター